

や風呂敷や、旅立つころは、曉の、明星が茶屋を跡に見て、馴れし都へ下向ある。櫛田の宿は名の
 みして、髪に擬へるぬめ帽子、其の色艶も行く人の、袖にもつる、伊勢比丘尼、唄今の目元は成る眼
 元え、晩にかならず松坂と、しなだれじやれて行く雲出、是れぞ津の町、かうの彌陀、大神宮と御一
 體、佛神するはと分れども、隔ても浪の水たまる、窪田も越えて嬉し野や、はてし長野も打過ぎて、
 都の方へ椋木の、木陰に暫し休らひ給ひ、参りの時は一足も、早う願ひのかけたさに、何處が何處や
 らわくせきと、せく心より此の關の、尊き地藏も忽々に、拜みし事のおろかさよ、あれ／＼其處へ乗
 りかけの、馬士が小唄も外ならぬ、關のお地藏は親よりも、ましぢやにあひのつまたもる、其の一節
 も御慈悲の餘りて深き其の中に、わけて女の妊帯、五月目を守らんと、此の御佛の誓ひなれば、心に
 願ひかけまくも、忝しと伏し拜み、心も足もいそ／＼と、坂の下より鈴鹿山、山又山の土山に、誘
 ふや嵐、ちるや紅葉の亂れ／＼と、空にちりぬる散らし書、茲は硯の水口や、田面に下りる鷹の、
 一行列なる如くにて、跡や先やと子供の参宮、お蔭での、ぬけたとき、えい／＼／＼、さつく／＼、
 さつと流る、横田川、淺く渡りて深きを知る、神の恵みの動きなき、石部の宿より梅の木村、薬も花
 の香に勻ふ、よう御所風と颯られて、人目まばゆく袖おほひ、忍ぶ程猶聲々に、唄あれは慥かに都の
 上蔭、姿優しくしをらしく、左様いうて派出ならず、移り氣な人心、かいどり棲のなりふりに、しん

ぞ此の身を打込んだ。オ、笑止々々、唄ふを聞けば聲の文、流石に都遠からず、心勇みの花摺衣、千
 種の錦古郷に、かへすも暫し名に高き、草津の宿にぞ三重著き給ふ。唄今年や世の中よいと、長閑に治まる
 浦々里々、参宮道者の家々の家印、ござれ／＼、是れについてござれのよいと、長閑に治まる
 君が代の、お禮まるりの人羣集、鎌倉参勤京上り、往來の人に荷ひ賣、目川仕出の田樂、鹽梅よしよ
 しと賣る聲に、物見高いは道者の癖、我も／＼と立ち集まり、／＼皆の衆、豆腐の始まり、田樂
 の由來聞くまいか。「コリヤよかろ、所望々々」と立ち蒐れば、頓作言ふも商ひ口、しかつべらしく
 團扇を上げ、「東西々々、豆腐の因縁堅くとも、耳をすまして聞召せ、昔々、天竺の達磨大師と申せし
 は、顔に似合はぬ豆好きで、坐禪豆と名付け、常に賞翫有りけるが、初めて豆腐を思ひつくとして、
 壁を睨んで九年めに悟りをひらき、なむあみとうふ／＼と、奈落の鍋へ落ち入つたる湯豆腐も、終に
 は浮み上る所を、南無阿彌杓子のすくはせ給ふ誓願なり。叔唐土二十四孝の唐夫人といふ嫁御は、豆
 腐の姥に孝行者、それより和國辨當に廣まつて、煮びに成り、竹輪に成り、縮緬豆腐は細きをいとほ
 ず、お壁とは、白きを譽めたる大内言葉、お公家方には小野の道風、武家方には敵陣へ寄せ豆腐、名
 を萬天に揚豆腐、わきてこの／＼／＼田樂と申し奉るは、忝くも白河院より始まつて、都に祇園
 二軒茶屋、難波に生玉、島の茶屋、菜飯に田樂、ひんよよいと神勇めにも成るぞかし、それにまさり

し目川の田樂、けんくしたるお方には、雉焼にて参らする。いつかな不食なお人でも、此の太鼓飯つぎの底をた、いてでんく田樂、脣にさへるや否や、吸ひ込む飛び込む、咽は鎌倉街道の、名物なり。」としやべりける。在り合ふ人々どつと笑ひ、「豆腐の因縁聞いたれば、心もはれやれよい慰み。」と、皆々別れて通りける。京の君の御母上、伊勢参宮の歸り足、姿は地下に扮せども、供の女中の取りなりも、ほんじやりとして可愛らし。荷ひかたつけ、田樂屋は不思議さうに立ち寄つて、「ヤア何れもは、なみくのお人ではなささうなが、男ぎれもつかず、伊勢参宮でござんすか。」と、問ひかけられて御臺所、「さればとよ、遙か西國方の者には候が、是れなる二人を伴うて抜けまらり。」と半分いはせず、「ぬけくとした誠つかしやんな、尤も身の廻りは、田舎めいた参宮人に見えれども、物ごし爪はづれば都も都、内裏上臈のひんぬき。」と、星をさされて、はつと三人顔見合はせて、躊躇ふ所へ、先走の侍、鐵棒ひきすり、「御上使梶原殿、義經の北の方京の君、めのと侍従太郎主従が首持たせ、お通りなるぞ、片寄りませい。」と呼ばはらせ、鎌倉へかへる急ぎの道中、御臺は斯くと聞くよりも、梶原が前に轉び出で、聲も涙にせぐり上げ、「自らは京の君が母、平産祈りの甲斐もなく、身一つになりもせて、刃にかゝり死ぬるとは、天照神にも捨てられしか、宿世如何なる報いぞや。姫と侍従が死顔を、此の世の名残に只一目、見せて給はれ梶原殿。」と、消え入る許りに歎かるれば、平次景高ぐつと

睨め、「京の君が母めとは、好い所で出くはせた、汝も一つ首にして、鎌倉へつれて行く、あれ引括れ家來共。」「承る。」と一度に寄るを、どつこいさせぬと田樂屋が、荷ひの杓押取つて、薙ぎ立てく叩き退け、御臺の世話を焼豆腐、うしろに圍うて立つたるは、鹽梅よしとぞ見えける。「ヤアいはれぬ味噌めが肩持ちだて、彼奴からまづ繩かけい。」と、聲で威嚇せばせ、ら笑ひ、「商賣の豆腐屋が、田樂料理の鹽梅見よ。」と、杓のつくく並んだる、主も家來も一括め、撲ち惱まされて爲方なく、一度にはつと逃げちつたり。御臺を始め附々まで、思ひがけなき田樂屋が、身にひつかけての働きは、知るべの人かどうぞいのと、言ふ間程なく大童に成つて立ち歸れば、「コレく此方は何人で、御臺様の御介抱、名は何といふ人ぞ。」と、せはしけにとひかくれば、「エ、急な所で名の穿鑿、いふ間もござらぬ、義經様の由縁と聞いて、世話するからは、何ぞで有らうと思はしやませ。アレ愛へ、敵の奴ばら一度で懲りぬ手籠の鹽梅、二はい三ばい八はい豆腐、ざくく豆腐に刻んでくれん。」と、追ひ捲りほつ拂ひ、又立ち歸つて、「コレくく爰には居られぬ、早お退き、跡は拙者が受取つた、早うく。」とせき立つる。「いやコレ重ねて禮いふ爲、そまじの名をばつちよつと。」「エ、此の瀬戸ぎはに根問ひ葉問ひ、是非言へならかい摘んで、かく申す某は、義經様の妾、靜がためには現在兄、親磯の前司に勘當受けし藤彌太と申す者、是れから跡は追付いて、道次申しましよ、一足も先へお出でく。」

「扱は静の兄御よの。」「静所ぢやござりませぬ、急に。」と主従三人、都の方へ落しやる。平次景高取つて返し、「ヤア下主め、やうもく邪魔ひろいで、三人共に逃したな、代りに汝が首こそけ落す、観念せよ。」と一文字に切つて掛る。「シヤまつかせ、心得し。」と柄で丁ど受け留むる。擬勢許りに梶原が、刀を其の儘豆腐屋が、柄も動かす少時が程、相手と相手が顔見合はせ、前後を見合はせ兩人が、耳と耳とに互の口、何やら囁き首肯き合ひ、「出来た、此の上仕おほすれば、コリヤ藤彌太、約束のとほり大名ぢやぞ、都には身が家來、番場忠太を残し置く、言ひ合はせて首尾能くせよ。」「ハアあつばれ梶原様、斯うした仕組で付け込むからは、義經の首は我が手の内、都の首尾を氣遣ひあらねな。」「オ、左様ぢや、此の上ながら、人に共謀ぢやと悟られな。」「心得たり。」とまた立ち向ひ、一打三打義經を、たばかり爲の仕組の切り合ひ、とほい術を藤彌太に、追はれてわざと逃けて行く、梶原平次が恐ろしき、工みの程こそ、三重天下泰平長久の、弓も袋に納まれば、矢竹心の武士の、唄敵に後を見せいで、戀に腰をぬかした、名におふ静が一奏、祕曲の底を堀川の、御所は酒宴の表座敷、いつに勝れて賑へり。御酒の機嫌も義經公、静が膝に寄り添ひたまひ、「何時聞いても美しい、器量につる、琴の音色、とり分け今日より義經が、北の方に直すれば、琴の調子も一際勝れ、我が妻琴の位の高さ、母を呼び寄せ悦ばせいと云付けしが、未だ來ぬか、早う。」「あい。」と重ねて急

ぐ召使、しき浪よする磯の前司、只今是れへと立ち出づる。京に名うての扇の指南、夫に離れて愁もなき、ひつこき髪に二つ折、色はなけれど香は残る、昔を思ひやり梅の花の姿のあたら物、惜しや老木とひねぬらん。母様お上りなされたか、我が君のお待ち兼ね。」と、水入らずの親子の取次、磯の前司參上と手をつけば、義經公、「ア、堅いわ、女の三つ指、物に譬へて見る時は、延に書いたる一筆啓上。堅いも、理神代以來承らぬ、女の名に磯の前司、其の形見を取り置いて、向後は義經が姑御寮。斯う許りでは合點がいくまい、お知りやる通り、頼朝の咎めによつて、可惜花の京の君、散らされた閨の寂しさ、静を今より北の方、本妻と定めねば、鎌倉殿の疑ひはれぬと、家老共が勧めによつて、今日より静は奥様。此の目出度さを言ひ聞かせ、老の身の悦びに、重ねくの悦びを、静にはなせ。」と有りければ、「申し母様、自らが身の上は、冥加に餘る君のお情。まだ此の上のお情は、お前の勘當遊ばした、兄磯の藤彌太様。縁といはうか、不思議といはうか、京の君のお袋様、御參宮の下向道、梶原が見咎めて、危き所を身にかへ、比類もなき大手柄、おけがもさせずお供して、此の館へお歸りなされ、顔見た時の悔り嬉しさ。思ひ懸けなき對面も、兄弟の縁の深さ。」と聞くに驚く母の前司、「フウ何といやる、兄の藤彌太が此の御所へ來て居るとや。」「アイ戻らしやつたは一昨日、此の度の働きも、底の心は勘當が赦されたさ。我が君も感じ給ひ、親子の中を直せと有つて、刀まで下

さりました。「なんぢや、刀まで賜はつた、是れは、冥加ない、して其の兄は何處に居るぞ。」ア兄様は、刀の冥加、武士に歸つた身の悦び、神詣して来うと今はお留守、追付下向なされう程に、勘當赦してしんせて。」と、靜が願へば義經も「赦してやれ。」と御挨拶。「ハア恐れ有りや、我々しきの倅が勘當、あつと申す善なれど、其處を得言はぬ此の母が、磯の前司と申す名は、死に別れし夫の本名。連合も古は武士の數にもいりし人、彼の兄が悪黨にて、武士を忘れし賭博好き、世間を諷で言ひ掠める、其のおどもりが親にもかゝり、浪人さした不孝者。かたはな子は猶可愛と、親の貧苦は厭ひもせず、七年前の臨終にも、念佛は申さず、此ののらめは何處に居る。根性を直しなば、爺が勘當悔しかると、思ひ死がいとしさに、ハテ案じさつしやるな、連合の死後に此の母が、磯の前司と名を呼べば、夫婦此の世に居る同然。心さへ直つたら、二親一所に赦すも同然。オ、左様ぢや嬉しうおぢやると、夫れで浮世の思ひをはらし、迷はぬ正念大往生。連合に約束の詞も反古にならぬから、女にあらぬ男の名、磯の前司と世に諺はれ、今様指南の營みに、靜は育てあけたれども、兄が性根はまだ直らぬか、諺言には何故來ぬと、待ちに待つた母なれど、立ち歸つて見る時は、諺の仕様が氣にいらぬ。靜何故というて見や、我が君のお由縁へ御奉公申せしも、和女や母へ繋がる縁。何か差置き先づ母が方へ來て、今度の様子は斯うくと、言うたらおれが呵らうか。待つ所へは來もせいで、お

館へ來て手柄顔、殊に前司が來るを知つて、爰に居ぬは出違うたか。なんほ父親の遺言でも、性根を見ねば赦されぬ。斯う念入れるも其方が大事、又彼奴が無法出さば、兄にかつて妹まで、君の愛想もつきようかと、彼方此方の思ひ子の、性根をしかと見るまでは、お返事暫く御用捨。」と、女ながらも跡先おもひ、道理を立てて申せしは、磯の前司と男名を、よばるゝ器量と知られたり。「ホ、ウ母が詞尤もく、此の義經が謂はれざる挨拶より、落魄れたる昔の話、座もめいつて氣も浮かぬ。今いふ通り靜は本妻、姑の磯の前司、重ねて舞も望まれまい。何と此の座をわつさりと、其の儘一さし扇の手、所望々々。」と有りければ、「ア、つがもない此の年寄、舞うたとて、諺うたとて、何がわつさり致しませう。是非御所望なら装束して、衣裳で化かす老の舞、此處ではお赦し下され。」と、辭退も聞かず、「いやく、装束の舞は奥で見る、年寄ればとて捨てられぬ、伊勢物語の業平は、九十九に成る婆とさへ、寢られた例も有れば有る、平にく。」のお詞に、靜もそばから「是れ母様、御辭退は却つて慮外、さあく。」とせり立てられ、「是非もない、そんなら舞ひましょ、色も香もない此の母が、扇取る手も皺だらけ。」と、つつと立つて押し開き、東北嶮の踊は、葛籠帽子をしやんと著て、踊振が面白い、吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、戀しき人は見たい物ぢや、所々お参りやつてと下向めされ、とがをばいぢやがホ、、、オ、恥かしや、お笑ひ種、此の舞直しはあれにてと、微笑

み行けば義経も、打連れ奥に入り給ふ。跡に靜は兄弟思ひ、「母様お出ではしれて有るに、此の兄様何故遅い。」と、氣を揉み焦る後より、「北の方様靜様、我が君の召します。」と、腰元姿見すほらしく、立ち出で給ふ京の君、靜ははつと恐れ入り、涙と共に御手を取り、「定まつた御本妻、京の君様ともあらう身が、鎌倉の聞えを憚り、しのぶが名を假初に、腰元姿の勿體なさ、お身の爲とは言ひながら、賤しい靜が上に立ち、信夫如何せい斯うせいと、人目を繕ふ主顔も、たゞならぬお身の上、お腹にござる兒様を、産むまでの辛抱と、堪忍して下さりませ。」「なう斷りに及ぶ事かいの、辨慶の心つれなくば、今は世になき我が命、誠をいはば尼法師とも様をかへ、先だちやつた信夫の跡を弔ふが道なれども、輪廻穢い女の心、夫れまでは得思ひ諦めぬ。斯うして殿のお傍に置いて下さるが、皆の衆の情、忘れはせぬ、構へて、遠慮なしに押しこなして、信夫々と頼むぞや。かく言ふ内も人目有り、北の方様いざ此方へ。」と、座をたち給へば抱きとめ、「其のお心根が猶お愛憐い、上々様に苦はない物と思ひしに、こんな災難も有る物か。人の名も多いに、信夫とは誰が付けて、今は北の方様のお身を忍ぶ、世を忍ぶ、忌々しい名で有るわい。」と、返らぬ事を掻口説く、遣戸口に咳拂ひ、兄藤彌太が立ち歸れば、靜は色目を覺られじと、「コリヤ信夫、兄様の今お歸りと、母様へお知らせ申せ。」「アイ。」といらへて立ち給ふを、「ア、これくく、先づ待つた信夫殿、母人の託言は、早うても遅うても、

いや應言はさぬ義経公の取持、理窟くさい母人も、今度の鼻が手柄を聞いて、四も五もいはず合點で有らう。」「イ、エお前や私が思ふ様に合點なりやよけれども、物事に念入れる母様、縦ひ大將のお詞がか、らうが、どんな手柄をなされうが、夫れには乗らぬ日比の氣質、ぬらりくらの間に合ひ者、心の直つたを、とつくりと見とけ、其の上の事とおつしやつた。」「ハテ小むづかしい、心の直る直らぬは、嗅いで知れるか、見て知れるか、其の片意地に懲りはてて、今朝からの神參、上賀茂下賀茂祇園の社、母の片意地止め給へと、祈る程にける程に、日脚も傾く腹も傾く、幸ひの二軒茶屋、立ち寄る鼻ももと豆腐屋、田樂串から出世した、二本差の身祝ひ酒、俄武士の尾も見せず、微酔ひ機嫌で立ち出づれば、おいくと跡から呼ぶ。歸つて見れば面目なや、差し付けぬ悲しさ、とんと刀を忘れて置いた。何もかも殿が下され、此の様な侍になつたれども、なうく同じ差す物でも、田樂串とは違つて、刀脇差は差し憎い。是れ信夫殿、此のやうに身の恥を打明けて言ふ正直男、恥の次に心の思はく、恥かかさうとかかすまいと、信夫殿のお返事次第、此の屋形へ来て、ちらりと見るより、首だけ惚れて居ます。」と、ほうど抱き付き振袖の、肌へ手を入れしなだるれば、「こりや兄様、てんがう許り、勿體ない。」と引き放せば、「舌てんがうちやない、眞實惚れた。妹のつかふ腰元に、兄の惚れるが勿體ないとは、如何して信夫が勿體ない、勿體ない譯聞かう。」と、問ひ詰められて南無三と、

驚きながらさあらぬ風情、「エ、尖々しい詞咎め、勿體ないというたはな、親の勘當願ふ身が、其の訴
 訟は放て置いて、脇道の小徒ら、親の冥加につきさしやろ、勿體ないというたが誤りでござんすか。
 母様は奥の間で御所望の今様一さし、お装束も出来たやら、笛も鳴る鼓も調べる。お前も餘所から拜
 見して、舞も濟んだ其の上、目出度う親子の御對面。わしも信夫も三絃の役人、心もせけばお先へ。」
 と、言ひ紛らして急ぎ行く。藤彌太は兩人が詞の端々素振まで、ぐつと呑込む頬、鎌倉よりの忍
 びとも、奥には白髪之母の舞、聲の細りも今様當流、琴三味絃の音も戀に、眠寢衣の衣の肌うすし、
 辛いぞ愛いぞなんとせう。フウ扱は京の君を信夫にして、信夫が首をけうといく、やつちやしてこ
 い、此の通り注進せうか、いや／＼／＼、まだ暮れきらぬに御門の出入、咎められてはむづかしい、
 ハア、何うせうな。唄深き思ひの淵となる。ホウそれよ、せいては事を仕損する、此の藤彌太を犬と
 もしらす味うまるつた判官殿。マア奥へ往て勘當の、いや／＼／＼、妹が今の素振。唄見るに付け聞
 くにつけ、胸にせまりし數々の、袖もかわかぬ沖の石、歌の唱歌に引換へて、一筆知らせの硯石、牀
 の料紙を幸ひと、蓋押し明けてする墨より、歪む心を矯めさんと、三絃たづさへ靜御前、空酔つくる
 千鳥足、唄ゑうたとさ／＼、土手の細道危い、合點ぢや、危い／＼、兄様何を書かんすと、聲かけら
 れて悔りし、あたふた袖に狀押しかくし、「其方は三味の役ではないか、爰へ來ては聞か缺けう、サア

サア奥へ。「イヤ大事ござんせぬ、母様の舞も一番濟んだ。我が君の御機嫌、酒一つ飲め、も一つ飲
 めとひら強ひに強ひられて。」唄酒の擧句に亂る、かたを波、彼方へざらり、此方へざらり、彼方より
 は此方さんの唄ざらり／＼、ざら／＼と、かかしやんした、今の文隠すは曲者、夫れ見たい。い
 や其の文とはあの物よ、隠した譯は、彼の信夫に思ひ／＼べく候。唄いよし御見と書いたるは、ほど
 しの種か、花薄、ほんに誓文、戀ぢや有るまい慾と見た。「慾とは妹、何を見た。」「まだ直らぬ心を見
 た、人には漏らさぬ兄妹中、サア有様に言はしやんせ。」「オ、言へならば言はう、汝も言へ。」「わし
 に言へとは何の事。」「ヤア俗けまい／＼、信夫といふは京の君、濡に事寄せ抱き付いて、腹帯を慥か
 に見た。」「夫れ見付けて如何さしやる。」「鎌倉へ注進する。」「エイ、フウ扱は勘當の詫言とは。」「オ
 オうそぢや、梶原と心を合はせ、伊勢道から付け込んで靜が兄が味方顔、釋迦でも喰はす鹽梅よし、
 かうした思案はまた田樂、義經の首を串さし。」と驅け出すを引き止め、「エ、曲もない兄様、悪事に與
 して身が立たうか、恐ろしい工みの段々、聞いた者は、妹ばかり。外へは聞えぬ奥の囃、鼓や歌に紛
 る、も、お前の仕合、親の慈悲。サア舞のをはらね内に、悪心を翻し、善心に成つて下され。」と、
 兄を思ひの眞實心、涙は詞に先だてり。「ヤア兄が出世に不吉のほえ頬、ぞつこんしみ込む此の失望、
 いつかないかな、翻さぬ。ばれ出すからは一時勝負、いで注進。」と又かけ出す、先に靜が立ちふさが

り、「やらぬ、何處へもやらぬ。」「エ、面倒な女郎め。」と、すばと抜いて切りかくなれば、得たりや紫檀の延棒に、はつしと受け、「妹を殺さうとは人でないの猫の皮、不幸の上塗ばち當り。」と、拂ふ刀を又付け込み、此の世のいとまき取らさんと、太刀筋血筋の遠慮もなく、兄は強力、刃物わざ、妹はかよわき無刀のあしらひ、三味と白刃の鐺音筒鳴り、焦つ懸聲二上りに、心もめいる三下り、三世の縁の絲筋も、断れてふた、び海老尾、天柱、絲藏散々に、亂れちつて争ひしが、終には三絃切り折られ、逃ぐる静を藤彌太が、取つて引敷く膝の下、びつくとも働かせず、「サア此の兄と一つになるか、否といへば突き殺す。」と、胸に刀を指し付くる、物音おくに聞えてや、母は装束脱ぐ間もなく、走り出でて抜打に、兄が肩先すつばと切る。うんと反氣にそりながら、「死にそこの老耄め。」と、親に刃向ふ極悪人、寝ながら静が諸足かけば、どうと倒れて立ち上らんと、蠢く藤彌太起しも立てず、胸腹ぐつとさし通す、老女の手なみ早業に、手足をはつてくるしみしは、心地よくこそ見えにけれ。母が心は張弓の、藤彌太が鬚片手に掴み、ぐつと引き上げ面打守り、「コリヤ此の刀を抜けば命がない、息の有る中言ふ事有り。眼も未だくらすまば、此の親が扮装を見よ、烏帽子、水干、男の装束、母と思ふな父親の磯の前司。エ、汝淺ましい、本心に立ち歸らば、爺が勘當悔みをろと、母に前司が名を譲り、待ちに待つた甲斐もなく、悪に悪を積み重ね、現世後生を迷はす故、磯の前司が蘇生して、手

にかけたを覺えしか。」と烏帽子装束かなぐり、藤彌太に礎と打ち付けて、「是れまでは父の役、前司といふ名を力にて、思ひ切りは切つたれども、母が身にもなつて見よ。現在我が子を手にかける、母も因果、汝も因果、憎けれど佛になりをれ。」と、わつと叫び入るを見て、静も共に泣き崩をれ、「言うて返らぬ此の有様、せめては最期に心を直し、親子兄弟睦まじい、詞を交して死んでいの。」と取り付き歎く其の聲の、藤彌太が耳にや入りたりけん、むつくと起きて眼を開き、「ハッア誤つたく、親を親とも思はぬ我を、親は我が子と思召し、父の名を母に譲り、勘當を赦さんとの、御恩を無下にするのみか、天の冥罰二親の、御手にかゝる不孝者。元此の館へ入り込みしは、梶原と心を合はせ、京の君の實否糺し、義經公を科に取つて陥さん爲。二つには、番場忠太京都に残し置く間、謀し合はせて夜討の手引き。大將の首とらば、梶原が取持にて、大名に仕てやらうと、慾心に親の慈悲を忘れ、御手に懸りし今此の時、一生の非を改め、善心になつたれば、最期にせめて寸志の忠義。是れ静、今宵鎌倉武士共が、夜討にせんとこの仕度有り、必ず御油断なさるゝなど、義經公へ申し上ぎや、言ひ置く事も是れまで。」と貫く刀に手をかけて、抜けば絶え行く、息の往來、生死の道ぞ定めなき。「エ、しなしたり残念や、其の根性をまあ三寸、早う直してなせくれなんだ。辨慶殿の娘御は、女なれども、父の手にかゝつて、忠義の死。汝も母が手にかゝつて、死ぬるに二つはなければども、根性の直り様が

遅さに、犬猫の死んだ様に、此の死にざまは何事。」と空しき死骸に取り付いて、老の繰言親と子の、別れはつきぬ歎きなり。静は涙のひまよりも、「いうて歸らぬ御悔み、鎌倉勢寄すると有れば、歎きは無用、是れ母様、もう何時でござんせう、今宵も夜半、あの太鼓は、時うつ數とも思はれぬ。」「ほんに忙しい鐘太鼓、如何やら世上も物騒がしい、必定夜討に疑ひない。此の次の間に釣つて有る鐘をならせば、御家來衆が驅け付ける兼ての相圖。滅多無性に撞き鐘は、此の母が心得し。」と、走り行くより台圖の鐘、かうくるところ。三重響きけれ。静小棲をかい寒け、凜々しげに聲を上げ、「夜討が寄せて候ぞ起き合ひ給へ。」と呼ばれば、奥口取りく女中の騒ぎ、「何ほ起しましても酒の酔ひ、殿様のお目が覚めぬ。」「覺めいで是れがよい物か、私に任しや。」と立ち掛り、御具足箱の蓋押し明け、鎧取り出し重たけに、提けるやら曳きするやら、御寐所の障子押し明けさせ、お枕元へ投げやれば、天性其の器備つて、武勇に敏き御大將、御鎧の金物の、からめく音に忽然と、御目も酒の酔ひもさめ、むつくと起き、鎧提げ、端近く立ち出で給ひ、「如何にく。」と宣へば、有りし次第を細々と、申す内から手つとり早く、鎧、直垂、小手、脚當、金作りの御佩刀、弓矢甲の次第よく、取つてあてがふ機轉の静、「天晴御身は弓取の、持つべき妻よ。」と御戯れ、さわやかに出で立ちたまひ、「誰々も休息せよと、私宅にかへせば、宿直の武士も有り合ふまじ、假し義經が手を下さば、何萬騎有りとも皆殺し、

馬引け。」と呼ばはつて、縁の上へ突つ立ち給へば、靜長刀かいこんで、お側をはなれず引添ふ所へ、時移さず夜討の大將、法師武者、表門を込み入つて、廣庭に駒かけする、「義經の首給はらんと、土佐坊昌俊向うたり、最早遁れぬ御腹。」と、聲々に罵るにぞ、「ヤア義經を討たんとは、しをらしき土佐が夜討よな、相手には不足なれど、此の世の暇とらせん。」と、太刀抜きそばめ廣縁より、ひらりと飛鳥の早業さそく、靜長刀かひくしく、切りはらひ薙ぎ廻る勢ひに避易して、寄手もたやすく進み得ず、しばし支へて居る所へ、武藏坊を始めとして、源八兵衛、伊勢、駿河、おひく／＼にかけ來り、御大將に引添ひしは、天帝修羅の戦ひに、須彌の四州の四天王、帝釋天を守護せしも、是れには過ぎじと謂ひつべし。寄手は臆せぬ土佐坊昌俊、采配振り立て諸軍の下知、辨慶焦つて進み出で、「坊主の相手は坊主が好い、引くな昌俊、逃ぐるな土佐。」と、聲をかけて飛び懸れば、擬勢にも似ぬ土佐坊昌俊、逸足出して逃け行くを、何處までもと追うて行く。源八駿河も抜き連れく、残る軍勢一人も、餘さじ物と、三重切つ立つれば、さしにも廣き堀川御所、塵灰もなく逃げ散つて、御所もひとつそとしづまつたり。かかる所へ御門の脇より、武者一人寄せ來り、「土佐坊昌俊是れに有り。」と、弓矢たづさへつつ立つたり。伊勢三郎とつくと見、「辨慶にほつかけられ、あとも見えず逃げ去りし、其の昌俊とは扮装の、そくばくかはりし鎧直垂。但し鎌倉殿の御内には、土佐坊一人有るやらん、實否を申

せ。」と詰め掛くる。「オ、不審尤もなり、先だつて我が名をかり、寄せ來りし土佐坊は、梶原が郎黨番
 場忠太。只今向ひし某こそ、左馬頭義朝公より鎌倉殿へ二代の忠臣、澀谷土佐坊昌俊なり。」と、
 直平頭巾脱ぎ捨つれば、けにも疑ふ所なし。伊勢三郎も笑ひ、「厳しき忠臣呼ばはり、日外日の岡に
 て出合ひしとき、退引きならぬ親の敵、討つ場を討たぬは判官殿、お爲くを誠と思ひ、義を知る武
 士と思ひしに、偽りをもつて命を助かり、今此の所へ寄せ來るは、取り所もなき表裏者。刀汗しと思
 へども、義盛が親の敵、一分試しに試してくれん、いざ來い勝負。」と身繕ふ。「オ、義盛が疑ひ尤も千
 萬、それにこそ仔細有り、先づ此の一通、大將の御覽に入れてくれられよ。」と、鎧の引合より取り出
 し、差し出すを取り次いで、義經に奉れば、訝しながら、押し開き見れば、牛王に血判せし、野心
 なき起證文、大將なほも不審はれず、「イヤ昌俊、此の起請の文言は、義經に弓引き敵對はば日本大
 小の神祇の御罰を請けんと書きながら、今宵夜討に寄せたると、起請とは相違せり、心底如何。」と仰
 せける。「さん候、鎌倉殿、梶原父子が申すに任せ、彼奴を君の討手と有る。元來とがなき義經公、
 梶原許り上しては御大事と思ひしゆゑ、某さへぎつて望みしは、討手に事よせ罷り上り、御兄弟の
 御中、日月のごとくせんものと、思ふ心を梶原に見すかされ、其の場の争ひ武士の意地、義經の首取
 つて罷り歸るか、さなくば昌俊が、骸を堀川の土に埋むか、二つに一つは違へじと、一通の神文、

鎌倉にて書きし故、頼朝卿は申すに及ばず、梶原まで疑ひ晴らし、はだゆるさすより工みを聞き、彼
 が盗む平家の廻文、先へ廻つて奪ひ取り、義盛へ渡せしは、君に難儀をかけまい爲。我は澀谷金丸
 とて、義朝公より譜代の家來、頼朝卿も判官殿も、頭の殿の御形見、大切に思ひ奉れば、何れに最
 眞依怙もなし、鎌倉殿へも起請文、判官殿へも起請文、二通の起請を反古にせじと、夜討に寄せたる
 昌俊が、心を見する此の籠」と、重藤と共に投げ出すを、伊勢三郎おつ取つて、「見れば弓には弦も
 なく、矢尻を抜いたる籠の矢殻、けに敵對はぬ證據ぞ。」と、大將を始め義盛も、心を深く感じ入る。
 昌俊 かさねて、「是れ伊勢三郎、日の岡にての約束違へず親の敵、土佐坊昌俊討つて本望とけられ
 よ。」と、襟押しくつろけ待ちかくれど、義盛は中々に、昌俊が忠義を感じ、討たんず氣色はなかり
 ける。義經深く感心有り、「かくまで我に忠義の土佐坊、伊勢が討たぬも理なり。此のうへは存命へ
 て、義經に仕へよ。」と、仰せも果てぬに呵々とうち笑ひ、「昌俊が主君は鎌倉殿、討手に向ひし判官
 殿、刃向はざるは義者の道、奉公せよとは愚かの御説。昌俊が此の體、堀川の土とならずんば、鎌
 倉殿への誓紙は反古、生きては武士の名の穢れ。此の御所の庭をかつて、義盛の手に掛れば、不忠と
 呼ばる、事もなく、一枚の起請も、武士も立つ。去りながら判官殿、我を我と思召し、存へと有るお
 詞は、生々世世に忘れまじ、心に懸るは御兄弟、御中和睦を此の世にて、見奉らぬ残念々々、此の

上ながら御中よく、未來の御父義朝公、我にも見せて給はれ。」と、目にては泣かぬ武士の、詞が直に涙なり。大將御目潤ませ給ひ、「今の世の人心、士農工商に限らず、誠に立つて誠に書く、誓紙誓言皆反くに、汝は夫れに引換へて、偽りに誓紙を書き、誠に命を捨つる事、亡からん跡まで、汝が誓を殘す爲、祇園のお旅に隠れなき、官者の宮に相殿せさせ、誓文の神に崇むべし。」と御感の詞末の世に、十月二十日の誓文祓、此の昌俊を祭るとかや。「ハ、ハ、ハ、恐れ有りや有り難し、人数ならぬ昌俊、命一つ捨てずんば、古今無雙の御大將の、かかる情を聞くべきか、未來の譽此の上なし。サア義盛、首取つて父に手向け、年來の本望をとけられよ。」と、すつとよつてどつかと坐す。義盛も此の上は、辭退申すに及ばすと、太刀抜き放し後に廻り、「伊勢左衛門俊盛が一子、同名三郎義盛、親の敵只今討つ、昌俊殿御免有れ、弓矢應護の八千鋒の神、許させたまへ。」と振り上げれば、首はあへなくをちかたに、重ねてつくる鬨の聲、敵かと思ればさにあらで、源八兵衛、駿河次郎、鎌倉勢を追つ拂ひ、勝鬨あけて立ち歸り、「今夜夜討の大將を、討ち漏らしては候へども、武藏が追つかけ候へば、追付召し連れ参るべし。」と申し上げれば御大將「ヤア今夜は鷄望喜速の日、戦ひを急ぐべからず、夜は何時ぞ。明方近し、一番鶏の鳴くを相圖に軍を出し、逃げかむ奴原を、片端より切りつくせ、是れ義經が軍慮の大事、旁其の旨心得よ。」と、御下知智謀は吳子、孫子、張良、陳平、韓信に、諸葛が術を讀んじ給ひ、しかも劍術早業は、雲にも翔り水にも入る、龍に翅や虎の巻、七書を胸に疊みこむ、御大將の御勢ひ、恐れぬ者こそなかりけり。

第五

明け渡る、野邊も山路も照る空に、敵の心は鞍馬道、夜とも晝とも辨へず、逃ぐるを追掛け、ほつ詰めて、土佐が乗つたる駿足逸物、おろしも立てず飛び乗つて、相合馬の二人乗、居喰は武藏坊主の好物、尻馬に打跨がり、馬廐神の暴れたる勢ひ、鞭振り上げて、丁々々、人と馬とを砧の拍子、しつていからころさつくさ、はいく、沛艾、打ち立て追つ立て、辻も小路も、飛び越えはねこえ、室町通横切りに、堀川御所の門前に、乗り留めて大音上げ、「土佐坊昌俊生捕つて参つたり。」と呼ははる聲に義經公、源八兵衛伊勢駿河一様に躍り出で、「コレ、コレ、武藏、そりや違うた、土佐坊は義盛が親の敵、夜前手にかけて本意をとけた、そいつは質者番場忠太。」「ヤア道理で滅多に頬を隠す。」と、頭巾を取れば、「ヤア番場の忠太、昌俊をだしにつかふ土佐の質武士、此の生武士三人中へ振舞ふぞ。」と、馬上にぐつとさし上げて、受け取れやつと投げ付ければ、腰もをれふし足立たず、蠢きながら手を合はせ、「土佐に似せたも梶原の皆指圖、忠太が命助けて。」と、ほえぬ許りの見ぐるしさ。武藏坊馬乗り

放し、忠太が脊骨をしつかとふまへ、「助けるは坊主の役、汝に似合つた戒名付け、引導渡して得させん。」と、三尺五寸をしやにかまへ、「汝元來梶原が家來ながら、昌俊と諱をつき、自業自得果、終には轉りと素首を、落され畢んぬ。ア、悲しきかなや、今日只今、昌俊が名を藉つて殺さるゝは汝が損。其の損を名に取つて、正尊と付けてこます、喝。」と云うて打つ太刀に、首は飛んでぞ死してける。さてこそ賢と正眞の土佐坊昌俊、土佐坊正尊、二人の土佐が名の紛れ、義經公に敵對ひしは、此の正尊が事なりけり。判官御悦喜在して、「家來といへども、さす敵なれば、梶原を討つたも同然、勇めや〜。」と宣ふ所へ、女中の預り黒井の軍治罷り出で、「先だつて靜御前に仰せ付けられし、今様の女舞、早御舞臺も成就し、役人残らず相詰め候、直に御覽有るべうもや。」と申し上ぐれば、判官彌御機嫌能く、「老中が今度の勳功、勞れをも晴らす爲、早始めよ。」と御詫も君が御代長き、未廣扇今様舞臺、賑ふ御所こそ 三重

花扇郡 鄂枕

次第浮世の戀に迷ひ來て、〜、思ひをいつか晴らさん。是れは色里の傍に住む者なり、我好色に身をやつし、太夫、天神、あるひは夜發の假寢にも、露の情を受けしより、露の情の文字を直に、名をも露情大盡ともてはやされしも、今ははや、親の勳氣に肌寒き、紙子の皴のよるとなく、晝ともわ

かす通ひしに、いまだ色道のさとりを開かず、まことや在原業平を、好色の神にいはいひこめし岩本のか社へ歩み運び、諸分手管の道を辨へ、ついでなれば鳥原の、昇夫が方へ立ち寄らんと存じ、諸只今彼の里へと急ぎ候。通ひなれし、道は昔に變らねど、變る姿と口の端に、いひ編笠の一字、西に傾く日影さへ、朱雀の野邊に照り添ひて、蕭行けば程なく出口なる、こんたんの宿に著きにけり。こんたんの宿に著きにけり。ハア、昔に替らず三枚肩でおすわ〜、コリヤ堪らぬ、ア、羨ましの郭通ひと、人目忍ぶの軒の下、笠傾くる暖簾の陰、主の昇夫内より出で、「ア、是れ〜、諺なら聞きたうない、通りや〜。」「いや苦しうもないおれちや。」「どなたぞい。」と笠を覗いて、「エ、イお前は、扱もお前は露情様か是れはしたり、なんと久しや〜。命あればちや、先づ御息災。」「そなたも無事で重疊々々。」「さて此のお姿は。」「はて愚智な事を問ふ、いはすと姿で推量しや、とかく傾城買と灰吹は、青い中に賞翫なされ、粹に成ると追ひ出さるゝが一時、てつきりと郭へ行かば、色の褪めた灰吹男と唾吐きがなするであらう、そちは辛い顔もせず、はつばすつば忘れぬ〜。」「さては左様か。ハテお笑止や、それは氣の毒せんばいりて出來合を上らぬか、エ、折悪い御臺の留主。」と、獨りうつたり舞ふを見て、「イヤ〜只今は所望にない、心づかひ無用々々。」「然らば一種拵へて久しぶりのお杯、どりやお伽上げませう。」と押入より枕取り出せば、「コリヤ珍らしい、色めいた文枕、謂れが聞

きたい。「されば其の張枕は、此の里の妓様方紋日の催促、身請の相談、付文、投文、或は付合、問夫狂ひ、可愛い、憎い、嬉し、悲しの、種々無量の、文どもを一つに集めて、鼻が仕事に、魂膽の張枕、是れをなされてまどろみ給ひ、講來方行末の悟りを御開き候へ、我等は其の間、酒の爛して参らん。」と、蒲團引き被せ入りにける。エ、きさく物ぢや、是非に紙花と出たい所、今は漸う鼻紙にも、紙子の袖を枕にあて、文羅、けにや盧生が見し榮華の夢は五十年、我も此の一睡に、講昔の夢を見るやと、魂膽の枕にふしにけり。郭通ひは皆駕籠でおす、おれも通へど駕籠かいておす、おして勝手もまがひなき、昇夫が門にかごかきする、爰ちや／＼と内に入る。講いかに露情に申すべき事の候。そもいかなる者ぞ。いや私でござります。手代の彌六かは何故。とは御吉左右御勘當のお詫かなひ、お迎ひに参りて候。来たか、てんとびやくらい嬉しや／＼、否また己が親父程有つて、餘程にもてる／＼、扱思ひがけもない、どうして急に御免された。講是非をばいかではかるべし、御身勘氣を赦さるべき、其の瑞相こそましますらめ、早々駕籠にめされ候へ。おつと心得のり移り、宿へ歸らば来る事ならぬ郭の見納め、是れより直におせ／＼と、簾上ぐれば紙子の袖も、故郷へ歸る錦の袂、昔の姿にたがやさん、折に幸ひ三絃の、ねじめにつれてもてるか／＼。いき杖の音二上りに、のせて合はせてもてるわ／＼、駕籠ももてますはい／＼、えいさ／＼えいさつさ、榮華も夢

とは島原の、掲屋をさしてぞ三重うかれ来る、今此の里に川竹の、身をば流れに島原の、ヨイ／＼イサヨ出口の柳ふりわけて、戀と情のヨイサヨふた思ひ、結ぶ契りは仇人へヨ今の、妬みは誰ゆるぞ。サイ、世渡るわざのかり枕、勤めの身こそ便りなやと便りもとめて、又爰の里に名うての太夫職、ぬき八文字のつれ道中、今日もかはらぬ花の宿、もんじがもとに入り来れば、幫間の喜作立ち出で、「ヨウ見事々々、夏花様、冬菊様、二季相ならびしお姿、月花は磯一對の珊瑚の玉、色をくらべる二人の君は、露情様のほだしの種、いかな天女もほだし裸で逃げさんしよ、やつちや／＼。」とほめ詞、ふたりもにつと笑顔して、「又わるがうな事許り。」と、火燧にとんと腰打ちかけ、庭の紅梅咲き分けて、紅白みめを争へり。「又露情様を争うてか、お二人の顔が悪い。」「はて悪うても如何しても、夏花は先の逢方。」「先でも萬でも此の冬菊は心意氣。」「否左様はなるまい。」「誰が。」「私が。」とせりあふ中へ、「おつと見えた、合ひざし合ひ投げとたんのわれ喧嘩は貰ひ、爰で我らが智の字をふるひ、お二人様のお文を、是れ此の様に。」と、縁さきの手拭かけに括り付け、「是れでお的の心を知る狐良、露情様の見えるまで、奥で飲まう。」とそ、り立つ。講深い浅いは、うへからさま見えぬヨイナ、底の心は寝にや知れぬ、寝て／＼しれる。講打連れ入りにける。講座敷には金銀の襖を立て、四方の女郎の貸しかりに、出で入る人までも、色どる風の粧ひは、誠や名に聞きし借錢の都、機嫌上戸の楽しみも、か

くやと思ふ許りの氣色かな。夜晝通ふ、露情大盡、色と酒とのもんじが座敷、醉狂閣や阿房殿の、常附の間に入りける。文雅爰に喜作が才覺にて、心を引き見る二通の文、手拭掛にかけ置いたり。アア恐ろしの傾城の心や、おれが心を見ん爲に、正眞の狐良、思ひなく候の油揚がぶらく、何ぢや冬菊より、夏花より、又憎うはない物、開いて見よう、いやくこちらを見れば、あちらが恨みよ、あちらを見れば、こちらが恨みん、所詮此の文見ずに歸らう。唄いのやれ、我が住む宿へ歸ろやれ、足中を爪立て、ちよこくくと爪立て、ア、思へば、二人の君が心のたけを書きたる文、ア、儘よいやいや只恐ろしい、ふつつと止めよ、イヤやめまいと、文雅行きては歸り、歸りては足もしどろに行き悩む。喜作いそく、「ヤア旦那、白藏主のお身振、どうもく、中々良にかゝらぬ、お前はきつのは空蟬の、もぬけのから衣、君が移香誰にかきせん、脱ぎはやらじ。」と引き寄せ抱き寄せ、そこを喜作が押取つて、互に悋氣の花摺衣、片袖許り打ちきせて、きせて雉子の雌様、片袖は雄様、比翼の取りなり所望々々、我らは又下男と、えさし帚に路次笠も、待てば甘露の日傘、機轉利かしてさしかくれば、コリヤ出かした、是れで二人が恨みも有るまい、太夫とおれが二人前、左六法右小褌、姿もしやんと振り分けて、唄限り知られぬ、六法アリヤコリヤ、唄思ひの淵よ、いつそ沉まば、此の身も

共に、六法 沈む里はどこく、上の町下の町、中のく、中の町を通り掛けに、なんと太夫、久しや久しや。お前も御無事で嬉しやく。唄ア、鳥もなげ、鐘もなれく。六法 二人寝し夜は往なしたうもまだく、ハツア無いがさ。よいや露情様の振分け姿たまらぬく、何をかくさうお前の事で、二人の君も修羅のたね、唐土の玄宗皇帝は、雙六の勝負にて、楊貴妃、虞氏君の后定め、例を引いて二人の君に、手鞠つかせて、相方定め、よからうく、おれをだかうと抱くまいと、ほんのふたりが肩次第、精一ばいにつかせい、あつと障子を押し開けば、かねて趣向の夏花、冬菊、色を争ふ眞紅の絲、鞠も心もはすまして、勝たばいやおういはさぬと、悋氣妬みのちどりがけ、手玉もゆらにつきそむる、旦那は鼓弓、我が三味も、不調頼願た、き次第、出次第の音に合はす手鞠歌、唄とんくとんくと諸國の、戀のわけ里數へ數へりや、武士も道具も伏せ編笠で、張と意氣地の吉原、花の都は歌で和ぐ敷島原に、勤めする身は誰と伏見の墨染、煩惱菩提の撞木町より、難波四筋へ通ひ木辻に禿達から、室の早咲それがほんに、色ぢや一、二、三、四、夜露、雪の日しもの關路も、俱に此の身をなじみかさねて、中は丸山た、丸かれと弾き唄ふ。おつと手鞠は喜作が預り、千年ついでには取りはづさぬはお前方のたしなみ、お二人の悋氣あらそひ、拙者がとんとあつかうて、互ちがひのさめ言、かはゆがつたり、がられたり、それは露情が望む所、誓文ぞ、おりやかはらぬ、ハテ主様さへかはら

すば、夏花様、冬菊様、二人して大切にいとしがらうと、寄り添へば、目出たいく、是れで御中むつまじし、御祝儀に一踊、旦那諸共サアお立ちと、喜作が文作高々と、鼓、太鼓、三絃の、なりよや見よやな、袖振る姿、ふりもよき四季の榮華の一踊、是れをきて見よかしのえ、音頭 先づ揚屋の座敷には、西の三十疊には黄金のとさん 杯に、太夫天神居ながれて、園には不老の櫻を咲かせ、春の榮華ぞおもしろや、東の座敷は三十疊に、おねまの屏風ひきならべ、白い肌をあらはして、睦言など聞えたり。筒には五色の菊をいけ、秋の氣色に色そへて、郭に花をぞさかしける。榮耀にも榮華にも、實に此の上や有るべきかと、君と手に手を取交し、障子開けば這は如何に、誦畫かと思れば、月又さやけく、春の花さけば、紅葉も色濃く、夏かと思へば雪も降りて、四季折々の榮華も夢なれば、今まで騒ぎし女郎太鼓の聲と聞きしは窓打つ風、揚屋の座敷も皆きえんと失せはてて、有りつる昇夫が假の宿、魂膽の枕の上に眠りの、夢はさめにけり。露情は夢さめて、ハア、南無三寶、叔は夢にて有りけるか、能く思へば、手管諸譯の道辨へる此の枕、是れも偏に岩本の神の恵み、實に面白や魂膽の、く、色の世ぞと悟り得て、望みをかなへ歸りけり。義經悦喜限りなく、御代を祝する静が舞、面白しく、是れも偏に京鎌倉、和睦をすべき瑞相と、悦び御座を立ちたまへば、伺候の諸士も壽きて、靜御前の御臺なり、三國一の名將に、隨ひなびく武士も、勇有り智有り仁義有り、三々

九郎判官の、御威勢御果報夜に倍し日にまし年にます、實に動きなき源氏の御代、五穀成就民安全、百億萬歳末かけて、治まる國こそめでたけれ。

御所櫻堀川夜討 終

逆勝
矢箆梅松
ひらがな盛衰記

文

耕

堂

逆鱗松 矢箆梅 ひらがな盛衰記

第一

謙頃けんこうは元暦げんりやく元年正月二十日、朝日將軍あさひしやうぐん木曾義仲きそぎよむね、惡逆あくぎやく日々に盛さかんなる、都みやこの騷動さうどう鎮しづめよと、鎌倉かまくら殿どのの下知げちを請うけ、大手おほての大將たいしやう蒲冠かほのくわん者しや範頼のりより、勢田せだをさして攻せめ上のぼらる。搦手かちめての大將たいしやうには九郎くわう御曹司ごせうし義經ぎけい、伊勢路いせぢを越こえて上洛じやうらく有ある。心こころぞ剛がうにたくましし。附つき従したがふ輩ともがらには、佐々木ささき四郎しやう高綱たかづな、畠山はたけやま次郎じやう重忠しげただ、和田わだ小太郎こたろう義盛ぎせい、侍さむらい大將たいしやうは梶原かぢはら平三景へいさんけい時とき、其そのの勢せい二萬にまん五千ごせん餘騎よき、兜かぶとの星ほしを戴いたきて、夜晝よるひる分わかぬ旅たびなれど、いさむ驛路えきぢの鈴鹿山すずかやま、去こ年のゆかりと消きえ残のこる。江戸えど雪ゆきの戸とざしの籠かごの關せき、八十やそ瀬せにつづく加太山かたさん。川かはを越こえては山路やまぢに懸かり、山やまを越こゆれば川瀬かはせにひたり、西にしへくとなびく旗手はたてに、東風とうふうがしらする風かぜの森もり、朱あけの玉垣たまがき見みえたるは、如何いかなる神かみか白幣しろはにぎて、敵追討かたきつらたうを祈いのらんと、暫しばらく牀几しやうぎ立たてさせ、皆みな々々休やすらひ給たまひける。詠なむれば、山やまより山やまの山道やまぢを、腰こしも二重ふたへの老おいの杣そま、杖つゑをたよりにとほくと、岨そはをつたひて歩あゆみ來きる。大將たいしやう見み給たまひ、「あの杣そま召よめせ。」と有ありければ、和田わだ義盛ぎせい承うけたまり、「ヤア、く、老人らうじん、大將たいしやうの召よめさるゝぞ、早はやく是これへ。」と招まねかれて、はつと許ゆるりに老人らうじんは、御前ごぜん間ま近ぢかく畏かしこまる。義經ぎけい仰おほ

せ出さるゝは、「山人なれば案内はしりつらん。是れより宇治へ出でんには、近道有るや。」と問ひ給へば、「ハア、心安き事のお尋ねや、御覽遊ばせ、西に見えたる平岡をばあさ山と申し、夫れより先に、頭落の瀧といふ所を行かんには、近道にて候。」と言ひもあへぬに、「いやコリヤ老人、戰場に向はんに、頭落の瀧とは禁忌なり、又其の外に道はなきか。」「さん候。此の御社を弓手へ廻り、笠置にか、つて御通り有れ、よき道の候。」と、申し上ぐれば義経重ねて、「此の御社の御神體は、如何なる神ぞ、老人知らずや。」と宣へば、「ハア賤しき身なれば、委しく存せねども、此の御神をいとゞの明神と申し、文字には射手と書き候へども、言ひ安きが慣はせとや、いとゞの明神と申すなり。」と、語れば大將御悦喜有り、「いとゞの明神弓手へまはり、かさに蒐つて攻めよとは面白し、それ老人に恩賞せよ。」と、仰せも重き御恵み、御褒美數多賜はつて、早御暇と老人は、宿所をさして歸りける。梶原平三進み出で、「勇まし、武士の運に叶ひ、弓矢神の御前に暫くも休らふこと、偏に神の御加護なれば、神前にて的矢を射、軍の勝負を試み申さん、見物あれ人々。」と、鎧の引合より陣扇取り出し、幕中に確乎と結び付け、矢比よき場に立てさすれば、有り合ふ人々息をつめ、勝負如何にと待つ所に、梶原一世の公業と、滋藤の弓の真中取り、廣言してぞ罵つたり。「抑梶原が家に傳はる譽といつば、先祖鎌倉の權五郎景政、敵に左の眼を射られ、其の矢もぬかず、たふの矢を射返し、唐日本に名を上ぐる、見給へ殿原、扇に書きし日の丸は、取りも直さず朝日將軍木曾義仲、此の景時がひと矢にて、朝日の直中射通さん。」と、鷲の羽の尖り矢打番ひ、きりきりと引き絞り、暫し堅めて切つて放せば、何とかしけん、規ひは反れて大將の、御白旗横に縫うて止まつたり。南無三寶と弓投げ捨て、眞面目になれば、すはや味方の大事ぞと、眉をひそめぬ者ぞなき。大將義経聲高く、「やをれ梶原、義経が下知をも受けず、鎌倉殿の出頭を鼻にかけ、出来し顔の采配立て、試みの的を射損じ、味方に氣おくれさせつるは言語道斷の曲者、夫れ戰場に日の丸の扇を用ゐる事、淺々しくも思ふべからず、日の丸は即ち日輪、日の神の御影を移す陣扇、敵間近く寄るならば、さつと開いて眞甲にさし翳し、神の威光を頭に戴き、此の日に敵たふ不覺の武士、神の御罰に亡ぼす道理、今度の敵木曾義仲、朝日將軍と名乗る事、全く此の理に相同じ、扇の的には大諄の傳へと言ふ事有り、故實をしつたる武士は、日の丸を除けて地紙を射るか、蟹目際を射る物よ、夫れに何ぞや梶原が、朝日の直中射通さんと、神に弓引く冥罰にて、却つて味方の旗を敗る、旁以て不吉の相、よし此の上は義経が故實を正し、一矢射て軍の勝負を試さん。」と、思ひためたる弓の裏箆、神の御告げを白羽の矢、取つて突立ち上り、「アレ見よ扇は西に有り、朝日は東に有るものを、西に入日を追つ詰め、木曾が胸板射通して、八本の肋骨、ばらくにしてくれん。」と、弦打ちつがひし拳のかたまり、よつびきひやうと、放つ手答へあや

またず、蟹目射切れば骨ばら／＼、扇碎けて飛びちるにぞ、今に初めぬ義經の、凡人ならぬ弓勢を、恐れぬ者こそなかりけれ。大將の御弓矢、畠山重忠受けとり、恭しく神前に捧げ奉り、敵に打ち勝つ拍手も、味方の勝利疑ひなしと、御悦びは限りなし。「ヤア恥を恥と思はぬ梶原、味方の旗を射通したるも、弓矢の故實か二心か、返答聞かん。」と、きめつけられ、面目なげに頭を上げ、「義經公への申譯、只今切腹仕る、何れもさらば佐々木殿、介錯頼み存する。」と、鎧の上帯引きほどけば、四郎聲かけ、「ア、鹿忽々々、かかる大事を抱へながら、腹切らんとは同士打ちも同じ事、但し大將への面當か、今度の軍に高名あらば、申譯は自然と立つ、聊爾有るな。」と押ししづめ、威儀をたゞして御前に向ひ、「梶原が切腹、某申し預らん、又白旗を射貫いたるは凶事にあらず、却つて吉相、君の御軍慮圖をはづさず、敵にはたと當るといふ、瑞相めでたし／＼。」と、秀句に寄せて壽けば、義經御感斜ならず、「高綱いしくも申したり。ヤア梶原過つて改むるに憚らず、以來を急度慎むべし。」と、ものにさはらぬ御詞、あつとはいへど義經に、意趣を含みし其の根ざし、此の時よりと知られける。斯くて時刻も過ぎ行けば、大將采配押取つて、「ヤア時移りなば敵の要害悪しかりなん。」と、先に進んで打ち給ふ、寛仁大度の御粧ひ、悠々として勇有り義有り、巍々たる岩石踏みしだき、宇治川さして和泉川、威勢は輝く光明山、平等院の北の邊、富家のわたりへ著き給ふ。源氏の御代の末長く、榮え榮

ゆる。三重時なれや、九重の、空ものどけき春の色、霞こめたる檜皮茸、美麗を盡し手を盡す、木曾殿の御館には、御長男駒若君、三つの長生麗はしく、わけて母君山吹御前、御寵愛淺からず、附添ふ女中も御機嫌を、取り／＼賑ふ其の中に、お傍離れぬお氣に入り、お筆というて才發者、しとやかに手をつかへ、「此の春は珍らしい、お國にかはつて都に年をお重ね遊ばし、御祝儀申すも漸うと昨日今日、馬鞍休める隙もなく、また軍の戦ひのと、心よからぬ世の騒ぎ、お案じも尤もながら、四天王と呼ばれたる、一騎當千の人々に、巴様も向はせ給へば、十が九つ味方の勝、お氣づかひ遊ばすな、したが何ほ大力でも、殿のお胤を身に持つて、切つはつはあぶな物、出物腫物處嫌はず、ひよつと其の場で氣が付いたら。」「サア自らも夫れが氣遣ひ、殊更左孕みと有れば、疑ひもない御男子、何事なう平産あらば、此の駒若の弟御、今まで此の子を可愛がつて貰うた代り、自らも心一杯いとしほがりたい、早う抱いて見たいわいの。」「ホ、そりや知れた事、常さへどちらもお中が好うて、お互に抱き合ひごくら、お精次第根次第、中に立つた殿様も、お嬉しからう。」と打笑ふ。折から告ぐる先走り、「只今殿様御歸館。」と、呼ばはるころに家中の面々、地に鼻付けて畏まる。叢蘭茂せんと欲すれども、秋風是れを破るとかや。朝日將軍木曾義仲、照り輝ける物具も、龍に翼を得る如き、威勢優美の御粧ひ、しづく／＼と入り給へば、山吹御前出で迎ひ、「是れは／＼思ひの外早いお歸り、そして如何や

ら御顔持も勝れず、早う様子が聞きました。「さればく、兼て御身も存知の通り、鎌倉の討手、範頼、義経、夜を日について攻めのほれば、宇治の手は楯六郎、根井小彌太をさし遣はし、勢田の手は今井四郎兼平に固めさせ、猶又巴も跡より打立つとはいへども、折悪しう樋口次郎は多田藏人行家を攻めん爲、河内國へ立越ゆれば、味方は小勢、敵の多勢にくらぶれば十分が一、中々たやすく防ぐべきとも覚えねば、某も今出陣し、士卒の掛引軍配せんと思ふに付き、御暇乞の爲、院の御所へ参りしに、厳しく門戸をさし固め、物音だに聞えざれば、是非なくすこく歸つたり。エ、口惜しや、浅ましや、過ぎつる壽永二年、彌竝、篠原兩度の戦ひ、平家の大敵を切り靡けし勳功によつて、朝日將軍に補せられ、高名譽を顯はせしに、今又平家に従つて、朝敵謀叛と呼べるも、皆君の爲、天下の爲、心を碎く甲斐もなく、却つて隔て疎んぜられ、剩へ鎌倉へ追討の宣旨を下し給はり、一門らざる所なければ、是れとても是非に及ばず、此の上は片時も早く驅け向ひ、腕限り攻め戦ひ、潔く討死せん。」と、思ひ切つたる御顔色、見るに悲しき山吹御前、「扱は今日の出陣は、疾くより覺悟遊ばして、討死なされん爲なるか、左程科なき御身の上、時節を待つて何故申し開きはなされぬぞ、心やすう討死と、お前ばつかり合點して、此の駒若や、巴様の胎内の、お子はいとさう思われぬか、あ

んまり氣強い胸慾ぞや、どうぞお心ひるがへし、お命恙なきやうの、御料簡は無い事か。」と、纏り付いて泣き給へば、「ア、おろかく、夫れ程の事辨へぬ義仲にはあらねども、御所には中納言兼雅、修理大夫親信を初め、百官百司も大半平家に心を寄すれば、中々申し開く時節はなし、分けて多田藏人行家は、某に興味有る中、義仲こそ、木曾の山家に育ちたる不骨者、色に迷ひ酒に長じ、奢りの餘り朝家を亂す謀叛人と、讒者の口にかけるれば、とてもかくても遁れぬ運命、義仲が胸の鏡曇らぬ證據は、天道ならで誰かしらん、泥中の蓮も汗れぬ花の榮えを見ず、我が悪名は後代に残し、身は戦場の土と消え、首は大路に晒されて、恥に恥を重ねん事、返すくも口惜しし、去りながら、我こそ命を落すとも、御身は片時も館を立ち退き、駒若を養育し、時至らば義仲が罪なき旨を奏聞し、再び家名を雪がれよ、不便や何の頑是なく、是れ今生の別れとも、しらすはからず我が顔を、見て餘念なき笑ひ顔、いぢらしさよ。」と許りにて、勇氣に撓まぬ大將も、恩愛父子の憂き別れ、暫し涙にくれ給ふ。山吹御前は今更に、留むる方も泣きくつほれ、「たつた今まで子の行末、家の榮え御身の上、千萬年も添ふやうに、思ひし事もあだし世の、夢か現か悲しや。」と、御身をもだえ伏し沈み、聲も惜しまぬ叫び泣き、見るに身に染むお筆が思ひ、「お道理様や。」と諸共に、袖を絞るぞ哀れなる。かかる歎きの折こそ有れ、間近く聞ゆる轡の音、しやんく〜りんく〜さらく〜さ、さつと吹きくる春風と、

名におふ名馬に打乗つて、驅け立て蹴立つる馬煙、生まれ付いたる大力に、馬上も勝れし巴御前、色を縁の紫絨、鎧輕けの女武者、長刀かい込み鞭打ち立て、馳せつく門前ひらりと下り、「扱も此の度宇治の戦ひ、楯根井が計らひにて、橋板を引き岸には垣楯、川には亂杭隙間なく、大綱小綱を流しかくれば、鶯鴨などの水禽も、輒く通るべしとも見えざる所に、血氣の大將義経が下知によつて、佐々木四郎高綱、梶原源太景季、先陣二陣に川を渡せば、秩父、足利、三浦の一黨、我もくと打渡つて攻め戦ひ、味方敗軍、剩へ楯根井も討死し、士卒もちりぐ、無念ながら引つかへし、直に追つ立て、勢田の手へ向はんと存ぜし所、既に宇治の手破れしかば、勝つに乗つたる鎌倉勢、或は木幡、醍醐、深草、月見の岡、思ひくりに打越え馳せ越え、都へ亂れ入ると聞けば、御身の上氣遣はしくたち歸り候。」と、言ひもあへぬに人々は、はつと仰天呆れ果て、暫し詞もなかりける。木曾殿少しも動じ給はず、「ホ、ウさこそく、胸にこたへし味方の敗軍、死すべき時に死せざれば、死に増る恥多し、いまこそ木曾が最期の門出で、巴來れ。」と宣へば、はつとはいへど伏し沈む、山吹御前お筆が歎き、見れば心も打ち萎れ、君の先途を見届ける、死出のお供は一思ひ、跡に残りて便りなき、御身の上はいか許り、悲しうなうて何とせう、おいとしほやとかきくどき、しやくり上げたる歎きにつれ、木曾殿もや、せきくる涙、留め兼ねさせ給ひしが、心弱くて叶はじと、振り切つて馬引寄せ、ゆらり

と召せば巴御前も、泣く目を拂ひ片手にしつかと轡面、取つて引つ立て勇みを付け、「コレく申し山吹様、死を輕んずるは勇士の道、軍のならひ、今我が君戰場へ打ち立ち給ふと雖も、是れ又決して討死とも定め難きは時の運、此の巴が附添ふからは、敵何萬騎有るとても、我が命の續かんだけ、片端撫で切り拜み打ち、蛛手輪違ひ十文字、十方八方打ち立て追つ立て捲り立て、是非一方打ち破つて驅けとほり、何國如何なる奥山にも、隠れのがれて時節を待ち、御本意遂げさせ申すべし、先づ夫れまでは若君諸共、知るべの方へ御忍び。」と、諫むる詞にお筆も嬉しく、「夫れは些とも氣遣ひ有るな、私が古郷、桂の里の爺親は、源氏譜代の侍、鎌田兵衛が弟、同名隼人と申す者、年寄つたれども、心は忘れぬ弓矢の家、御主人といひ親子の中、命にかけてかくまはん。」「オ、夫れこそ究竟偏に頼む、随分御無事で山吹様、若君様、もうおさらば。」「お前も達者で。殿様さらば。」「さらば。」「さらば。」と行く名残、残る思ひは果てしなき、涙と共に延び上り、見送り見返る恩愛妹脊主従の、歎きになづみ行き兼ねる、駒の足どり諸手綱、引きわかれ行く三重雲のあし、吹雪交りの朝霞、比良の高根の互え返り、春めきながら野も山も、雪にまがへて白旗の、八重立つ敵の其のなかを、心細くも巴御前、御最期の供は叶はじと、夫なり又主命の、我が身に重き唐錦、古郷へ歸る鎧の袖、供をも具せず只一騎、名残涙の玉櫛篋、手枕ふりし寝たれ髪、昨夜の儘に振り亂し、烏帽子引き立て眉深く、見

る目も曇る鏡山、女とも見えず又男とも、江戸いか物作りの太刀佩いて、思ひ切れども女氣の、跡へ跡へと心引く、琵琶の海面弓手に見なし、行く先如何に白月毛、駒に任せて行く道の、手綱よ二世の別れの鞭、打つに力ぞなかりける。俄に來し方騒がしく、「ヤアあの凱歌は敵か味方か、君はいかに、兄はいかに。」と覺束な、人の便りを松陰に、馬乗り留め立つたる所へ、勝ち誇りたる鎌倉勢二三十、「落武者返せ。」と呼ばはつて追取り巻く。「何落武者とは舌長し、落ちぬか落つるかは見えよ。」と、駒の頭を立て直し、渦く我が名の巴の如く、右左に乗り廻し、蹴立て踏み立て驅けさせれば、詞は主の恥しらず、後をも見ずして逃げちつたり。躊躇ふ間もなく、暫しくと呼ばはつて、歩武者一人、軍兵に先だち大音聲、「木曾殿の御内に、男勝りの然る者有りと音に聞く、巴御前と見しは僻目か、坂東一の勇者と呼ばれし、秩父重忠見参せん。」と、言ふより早く、鎧の草摺しつかと取り、引き下さんと曳と引く。巴莞爾と打笑ひ、「男勝りと名を立てられ、強身を見するは恥かしけれど、秩父程の人柄で、坂東一の勇者呼ばはり聞き憎い、ならば手柄に引き下して見さんせ。」と、鎧の鳩胸踏み反らし、引くにちつとも動かばこそ、鞍強にこたへしは、作り付けたるごとくにて、廣言放ちし重忠も、大力の女持てあまし、馬人ぐるめに、こりやくくく、雪間を分けて生ひ出づる、春に粟津の草ぞ迷惑、踏みちらし 江戸引き戻しては引きすられ、引いつ引かれつ寄るべなき、堅田の浦の釣小舟、浪にも

まる、如くにて、こたへもこたへ引きも引く、草摺三開引きちぎり、尻居にどうど伏したるは、苦々しくも目ざましし。跡に續きし佐々木四郎、「手柄は仕がち、御免候へ秩父殿、佐々木が組んで見せ申さん。」と驅け寄れば、「なうくねつたい佐々木殿、こはざれなせられそ。」と押隔て、「宇治川の先陣はせられしが、巴女にはいかなく、秩父も叶はぬ、今の倒さまを見られしか。」「ヤア女、秩父に尻餅つかせたを手柄にして、木曾へなりとも、何處へなりとも、勝手次第に早歸れ、アレ見られよ、歸れといふに耳へも入らず、鎧づきしてすはといはば、勝負せんと待つ大強者、勝つてからが女なり、秩父が様に尻餅ついて、物笑ひ仕出すか、先づ此の陣は引いたがよい、合點か。」と目で知らせば、「オオ夫れく、勇者の尻餅と、高名の首帳も、筆末ならば付かぬが好い、いかに此の陣引くが勝、なう秩父殿。」「なう高綱殿。」と點頭き合ひ、よそにもてなし立ち歸る、弓矢の情ぞ類なき。後陣に控へし内田三郎、「ヤアく、秩父殿佐々木殿、敵に逢うて勝負せぬは、後を見するか二心か、内田三郎家吉参りぞう。」と、諸鎧かけ合はせ、「天晴御器量武者振や、烏帽子が下の亂れ髪、象ではなけれど此の鼻が繋がれ申す、一軍して内田が手並を見せ申さん、鎧の上帯下紐も打解けよ、引く手に靡け。」としやれ事し、隙を見て組み留めんと乗り廻す、巴が乗つたる駿足は、數度の軍に逢坂の、關吹きこえて名に高き、春風といふ名馬、内田が乗つたる章駄天栗毛、足疾鬼とて足早き、鬼に劣らぬ足どりは、兩

方劣らぬ馬上の達者、駒の足並飛鳥のかけり、行き違ひ様内田三郎、鎧の袖を引違へ、巴にむづと引組んだり、「シヤ大膽な、義仲といふ主有る女に抱き付いて、オ、こそば、目顔を赤めて強い顔なされても、力の有る體でもなし、聞えた〜、女ぢや思つてふかじやれか、人にこそよれ此の巴には、芋殻で撞く釣鐘、成らぬ事〜、未來の爲の折檻」と、前輪にぐつと引付けて、うんともぐつとも言はさばこそ、片手に素頭引攔み、太首ちよいと引抜きしは、子供遊びの紙籬の、首を抜くより易かりける。「和田義盛是れに有り、聞きしに勝る女の働き、去りながら、手柄も人による物。」と、生ふる手頃の竝木の松、ぐつと根こじに引抜いて、馬人共に一打と、口にはいへど心には、馬の諸脚薙ぎ倒し、適れ手取りにせん物と、追ひ様向ふ横腹へ、薙ぎ立つるを事もせず、巴は馬を乗り飛ばし、熊の子渡し、燕のもじり、獅子の洞入りなどといふ、手綱の祕密に聲そへて、四足を土に著けばこそ、宙をかけらし地を潛らし、蹄にかけんと隙を待ち、暫しあしらふ折こそ有れ、敵の方に聲立てて、「朝日將軍義仲を、石田次郎が討ち取つたり、今井四郎兼平も、一所に最期。」と呼ばはる聲、聞くに驚くたるみを見て、義盛得たりや畏しと、馬の前脚どうどなぐ、ながれて前脚折るよと見えし、巴も馬上を眞倒、落つるを其のま、起しも立てず、家子郎等折り重なり、かくる千筋の縛めも、妹春をむすぶ縁の綱、長き夫婦の初めとは、後にぞ思ひ知られける。斯くと注進してければ、御大將義經公、秩父

佐々木を召し具して、障泥を土手にしき皮や、御座に移らせ給ひける。和田義盛罷り出で、「女を生捕り、手柄がましく申しあぐるも、をこがましく候へども、鎌倉の御前に御沙汰候ひし、木曾殿の妾巴と申す女召捕つて候、如何はからひ申さん。」と、申し上ぐれば、「いしくもしたんなれ、直に問ふべき仔細有り、早いそふれ。」と御説にて、引き出す繩取共、却つて宙に引立てて、怯めず臆せず御大將の膝近く、振り仰ぬいたる容顔に、潸々懸る無念の涙、雪に霰ぞ亂れける。折しも梶原平三景時、武者一人召し具し、息を切つてかけ付け、「當年の怨敵は、悉く討ち亡ほし、鬼神と呼ばれし朝日將軍義仲を、石田爲久が討ち取り、首を御目にかけてくれよと某を頼み、其の身は後陣に罷り在り、又召し連れし此の男は、井上次郎と申す木曾の郎等、主の悪逆を疎み、今井四郎兼平が首取つて、鎌倉殿へ降参の手土産候。」と、直垂の袖に包みたる兜首、太刀に貫きたる今井が首、實檢に供ふれば、「コハ我が殿か兄上か。」と、巴は繩とり引立てて、「變り果てたる御姿や、覺悟の上とは言ひながら、思へば思へば、曉の、鶏に互の泣き別れ、永い別れになつたか。」と、二つの首に身を寄せて、人目に恥ぢずどごと伏し、聲も惜しませ泣き居たる。梶原怒つて、「ヤアめろ〜と、今になつて何の吠えごま、尾籠なり。」と引立てさせ、「恐れながら首御實檢なされ、井上次郎にも御褒美の御詞下さるべし。」と取持てば、熱と實檢有り、「エ、淺ましや、同じ清和の臺を出で、正しき源氏の累葉として、平家に勝

つたる朝敵、謀叛の族となつて、末代源氏の弓矢を汗す、一門の面汗し、憎やくく。」と持つたる扇振り上げて、丁々々と打ち給へば、巴懐へす、「聞き憎し義経殿、平家に勝る謀叛人とは、何が謀叛、其の譯聞かん。」と詰めかくれば、「オ、言ふまでもなし、法住寺の御所を焼討し、高位高官の人々を苦しめし、是れが謀叛朝敵で有るまいか。」と、以ての外の御氣色、巴涙をばら／＼と流し、「されば夫れこそ木曾殿の深き御思案、謀叛でない物語、並み居る人々も聞いてたべ。既に木曾殿、礪竝、俱利迦羅、篠原の合戦に打勝ち、都へ攻め登り給ふと聞えしかば、平家一門の人々、三種の神器を守り奉り、西國へ落ち下る、木曾殿都に入り替つて御所を守護し給へば、法皇御感斜ならず、雲の末海のはてまでも追つ詰め、平家を討ち亡ほし、三種の神器を事故なく、都へ遷し參らせよとの宣旨、畏まつてお請け申させ給へども、安からぬ一大事、三種の神器を取り返さんと、直攻めに攻めるならば、身の置き所ない儘に、唐高麗へも逃げ渡らば、勿體なや神より傳はる三種の御寶、永く異國の物とならんは日本の國の恥、若し又海底に沈め失はば、世は常闇、冤やせん斯くやと御思案有り、義仲朝敵謀叛人の名を取らば、平家心赦して一致せん必定、折を窺ひ三種の神器を奪ひ取り、跡で平家は盛し、サア此の上の分別なしと、心に工まぬ惡逆の謀、夫れとは知らで諸國の驅武士共、我儘を働かしは、木曾殿の知召されぬ事ながら、まんまと上々の朝敵の名を取り給ひ、スハ鎌倉の討手向ふと聞

えしかば、寄られては後手になる、御身に誤りなき由を、申譯させ給へといへば、いやとよ、他人より一門は猶恥有り、宰我子貢が辯舌を以て言ひ解くとも、三種の神器を取りかへし、平家を悉く討ち亡ほさねば、我が本心は顯はれず、卑怯氣に言譯はすまじいぞ、かくなり果つる我が武運、寄手を引受け、潔く、討死せんと御覺悟なされ、夫れ故にこそ、やみ／＼と今度の敗軍、申す詞に疑ひあらば、仰せ置かれし詞の末、召されし兜に仔細あらん、御覽あれ、如何に思し諦めても、心の内の御口惜しさは如何許り、人こそ多けれ石田連の、名もなき下郎の刃に蒐り、勿體なや御首に、義経が扇を受け、一方ならぬ冥途の御無念、哀れ此の身が儘ならば、義経殿に飛び懸つて、恨み言はん物、エエ口惜しや悲しや。」と、立つて見居て見身もだえし、零る、涙を押へんと、すれども繩の強ければ、頭を膝にすりあてて、前後不覺に泣き居たる。高綱仰せを承り、御首に立ち寄つて、兜を取れば鉢受の、絹に巻き添へし一通有り、取り出し捧ぐれば、つく／＼御覽じ仰天有り、「是れ見よ方々、巴が申すに些とも違はず、三種の神器を取りかへさん爲の計畧、思ひ設けぬ朝敵に成つたる悔みの條々、神明佛陀を誓ひにかけ、逐一に書き残されたり。扱は反逆にてはなかりしな、鎌倉殿こそ御心付かずとも、討手を蒙る此の義経、尾張三河の間に軍兵をとめ置き、一應も再應も、使を以て事の品を問ひ明らかめ、反逆謀叛に極まらば、其の後こそ討つべきに、其の氣の付かざる我が無調法、扇を以て首

を汗せし我が誤り、御詫び申す、赦してたべ。」と座を立て、義仲の首取り上げ、「義経が名は遮那王丸、貴殿の名は駒王丸、鞍馬と木曾の住所は替れども、再び源氏の世になさんと、恥を凌ぎ憂目を見し、心遣ひはひとつにて、平家を西海へほつ下せし、源氏再興の軍初めの大功は、貴殿こそ立てられし、其の功を空しく、謀叛人の悪名を取つて果てたまひし、最期の遺恨を翻し、弓矢擁護の神となり、源氏の武運を添へ給へ。」と押し戴き、悲歎の涙に暮れ給へば、伺候の武士を初めとして、懸け構ひなき下部まで、感涙催す許りなり。和田も哀れにかきくれて居たりしが、御前に向ひ、「ハア、追が源氏の御血筋とて、驚き入つたる木曾殿の御心底、然れば此の女に掛けるべき、御疑ひも科もなし、殊に木曾殿の御胤を懐胎せしと傳へ聞く、義盛賜はつて婦妻に具せんと申すは如何、合筈は踏ますとも、御子誕生有るまでは、我等に預け下さるべし。」と言はせも立てず梶原平三、「ヤア心得ぬ義盛の願ひ、如何書いて有らうが、如何言はうが皆諱々、謀叛人に極まつた木曾義仲、其の胤を孕んだ女を預り、子を産ませて何にせらる。但しは其の子を守り立てて、又謀叛起す氣か、夫れは免も角も鎌倉殿の御計らひ、先づ差當る拙者が取次の井上次郎、兼平が首取つたる莫大の高名、御褒美の御詞下さるべし。」と、遮つて言上すれば、秩父重忠、「イヤ梶原殿、義経公は總軍の御大將、細かなることとは知召さず、今井四郎兼平は目下、木殿殿討たれ給ひぬと、呼ばはる聲を聞きしより、太刀を唾へ

つ、逆様に落ちて貫かれ死したる事、誰しらぬ者もなし、夫れを何ぞや、井上次郎が高名とは、死首取つたるが高名か、頼まれての取持ちか、自分の最良か、よし夫れはとも有れ、重恩の主の討死を餘所に見捨て、命惜しさの降参、偽りを飾る表裏の武士、取次の梶原殿まで心底疑はし、返答あらば承らん。」と、一口にやり込むれば、井上次郎進み出で、「ヤア浅々しき重忠の仰せ、主人の討死を見降参する様な井上にては候はず、一兩年以前より、梶原殿を頼み、頼朝公へ心を寄せ、義仲の身の上、噓一つ爲られたまで、犬になつて告げ知らせし某、是れ許りでも捨てても一箇國や、二箇國が物は有る、其の上にも、兼平が首取つたる今日の手柄、羨ましくうてのわんざんならば、此の首御邊におまするぞ、勳功解状に預られよ。」と、首取つて投げ出せば、事を破らぬ重忠も、怖へるに怖へ兼ね、「汝等如きを手にかくるは、大人氣なしと思へども、弓矢を汗す人非人、微塵になさん。」と飛び鬼る。義経暫しと制し給ひ、「井上次郎が忠節は此の度初めならず、梶原平三が取次を以て、兼て鎌倉殿へ歸伏せしと申す上は、萬事鎌倉にて、鎌倉殿の御裁許有るべし、夫れまで互の論は無益、心得たるか。義盛は願ひの儘、巴を汝に預くるぞ、去りながら、平産の子男子ならば、朝廷の畏れ、義仲の名を包み汝が子とし、和田の家を相續すべし、巴が縛めとくく。」と、搦めらるゝは義経の、情の詞許りにて、繩も解かるゝ氣もとくる、朝日將軍義仲の、名を象りて生まれ子を、朝比奈三郎義秀と、古

今に秀でし兵は、此の胎内の子なりけり。いざや人々都に入りて、勝軍の御奏聞せん、エ、是非もなき浮世の習ひ、義仲の首今井が首、土中に埋み跡弔はばやと思へども、院の御氣色はかり難し、檢非違使の手に渡さでは叶ふまじと、秩父佐々木に取持たせ、道をはやめて走井の、軍の備へ九重の、都に蹄を飛ばせらる。梶原井上手持なく、顔見合はせ、「ア、梶原殿、義經と言ひ秩父といひ、大抵ではかまれぬ相手、鎌倉殿もあれなれば、いかう當の違ふ事。」と、ぶつつけば、「何さく、義經がこゝでの我儘は、烏無い里の蝙蝠、追付鎌倉殿の御前、見せ付ける所で見せ付ける、何奴等もおほえて居よ。」と、睨め廻し、次郎を引具し立ち出づれば、巴すつくと立ちあがり、「待つたく、井上次郎、君御存命の内よりも、鎌倉へ内通とはたつた今聞いた、いかいお世話で有つたの、夫れは言うて詮ない恨み、さし當る兄の敵主君の仇、最う臨終に聞はない、旦那寺へ人やらせん。」と、曲る詞も井上が、頭の上の雷の、落ちかゝるかと懐まじく、「ナウ梶原殿、弓矢取る身は相互、今の命をお助け。」と、脚腰立たず身もわなく、頼む人より頼まるゝ、梶原も底氣味悪く、「人使ひがなくなば、旦那寺へは身が往かう。」と、言ひ捨てて驅け出せば、續いて逃ぐる井上が、縮嚙擱んで引戻され、「扱は道が違うたさうな、何方へ往ても大事ない。」と逃げ出す。先には和田が仁王立、左義盛右巴、一つ巴にくるゝと、ぢりく舞する井上次郎、命お助けくゝと、土にひれふし手を合はせ、泣くより外の事ぞなき。

「エ、腑甲斐なき業晒し、主君の仇兄の敵には、不足ながら。」と引きよせて、くびねち切らんとせし所へ、井上が郎等共、主の命を助けんと、一度に抜きつれ切つて掛る。「オ、しをらしや、欲しがる主を得させん。」と、鏡の上帯搔擱み、落花微塵に投げちらし、羣り蒐るを引きよせく、せめては是れで色直し、おつつけ和田と祝言の印、今打つ人際、身輕き働き蝶花形、出合うた敵は三々九度、むらむらばつと逃げちつたり。猶も進むを引きよめ、さのみ長追ひ長柄の銚子、返せ戻せは無益ぞと、いさめる駒に小角を入れ、時に近江の鮎盛や、乗りしづめたる義盛が、二葉のひれに相生の、松の榮えや、えいこのくくく、此の壽をよろ昆布、敵に勝栗のつし鬘斗、連れて陣所へ歸りける。

第二

鷹は水に入つて藝なく、鶉は山にあつて能なし。筋目有る侍も、世事には疎き町住居、削る楊枝さへ細資本、辛苦黒もじ身すぎ楊枝、商賣磨き楊枝の看板、猿もくはねど高楊枝、浪人ところ知られたれ。此の家の家主門口から、「暮れるまで精の出るは、急な誂へ物でござるか。」「コリヤお家主様、今日は何事が起つてやら、ちよこくお出で、ムウ聞えた、晦日前なりや家賃の催促、私も油断は致さぬ、此の楊枝仕立てて先へやれば、其の價で家賃は野々山、跡の月の残りも、受取り次第上げま

せう。「いや催促許りに来るでもおぢやらぬ、楊枝許り削つては、埒の明かぬ身代、取りつきから知つて居る馴染の其方、はかの行かぬ世話が笑止さに、思ひ付いた事も有り、話して見たさ、来る事は來ても以前が侍、麁相な事は言ひ出されぬ。」是れは、御遠慮迷惑、御懇意の上、お話とはまづ耳寄り、早う聞きたう存じます。「ムウ其の氣なら話しませう、浪人殿には好い娘もたれて、木曾殿へ奉公ぢやと聞いて居る、此の間の騒動、木曾殿も死にめしたりやお娘は浪人。ならぬ身代に口が殖えてはいよくいくまい、幸ひとおれが知つた大金持、器量の美いお妾を欲しがる、捨金の二十兩や三十兩は、此の家主が受合ひ、危けもなう家賃も取れる、重一打ち出した仕合と、きて見るも當が有る。昨夜八つ過ぎ、爰な表を頼りに叩き、其の跡は内へ入り、話したは女の聲と、相借屋の者が知らしたで、扱はお娘と来て見れば、何時も替らぬ古長持と古親父、破れ屏風缺け土籠、鍋洗うて待つて居るに戻らぬの。「オ、御存じの上は隠すに及ばぬ、成程奉公致させ置いた、木曾殿の没落に付き。娘が事案じぬでもござらぬ、去りながら、軍の法で女子には指もささぬ由、又差す奴があつてもささされて居る様な、鈍な奴でもござらぬ、親の内は知れてある此の桂の里、遅いか早いか戻りませう、昨夜門を叩いたは、夜通し参りの愛宕の南向、又隣の兩換店と取り違へ、此方の戸を破れる程叩く、何ぢやと表明けたれば、錢が欲しいと言つた故、己も欲しいと言ひかへし、笑うて仕廻た。」と言ひけれ

ば「ムウ夫れで聞えた、談合は娘の顔見てから、コレ手に取らぬ話當にして、仕業後れて家賃待つてと言ふまいぞ、話す内に日も暮れた、店の仕舞手傳はう。」夫れはお慮外。「慮外ぢやおぢやらぬ、一人してぐわたびしすりや、店が損ねて家主の迷惑、エ、此の猿めが守しをるで賣れぬ、楊枝も此奴も内へ取りく上店下店上げて、そこで鑿門の戸しめて、家賃の夜業精出そぞや。」合點でござります。「お娘の事も。」サア合點、能うお出でなされました、家賃も娘も來次第に、此方から御左右致しませう、お出でには及ばぬ。」と、門送りして家主が、内へはひるを能く見届け、立ち歸つて、締むる門の戸の、日破れ、節穴、釘穴より、若しも覗く人もやと、筵立てかけ古暖簾、店の道具で取り繕ひ、「サア是れで覗く氣遣ひない、さぞお氣詰り御窮屈。」と、長持の蓋明くれば、いたはしや山吹御前、駒若君を抱き参らせ、お筆諸共出で給へば、引下つて頭を下け「移り變る世のならひとは申しながら、朝日將軍の御臺若君、かかる埴生に隠れ忍び、日影もささぬ櫃の中、若君の長しう、出たいとも仰有れず、むづかりもなされず、能う御堪忍遊ばした、お氣晴らしにハ、ア何ぞお慰み、オ、夫れよ店守の此の猿、まめなにあやかりおはしませ、勝る目出度い御壽命。」と、祝ひ申して指し出せば、いたいけ顔の莞爾に、猿の頭を叩いつ撫でつ、御機嫌よけに見えければ、山吹御前の御悦び、「何から禮を言はうやら、譜代でもない主徒、お筆に連れて親御まで、甚い世話になります、義仲様御最期

と聞くよりも、同じ道にと思ひしが、遺言も有り此の若を、捨てても死なれぬ身のつらさ、思ひやつて。」と許りにて、跡はつきせぬ御涙、「ア、勿體ない、私が父様に何御禮。」「オ、娘能う言うた、もと某も源氏の譜代、野間の内海にて相果てし、鎌田兵衛政清が弟、鎌田隼人清次と申す者、仔細あつて兄政清が不興を受け、義朝卿の御先途も見届けず、本意を失ふ瘦浪人、古主の源氏へ歸參の望み、二人有る我が娘、姊のお筆を御前へ指し上げ、千鳥といふ妹を鎌倉へ遣はし、出頭の梶原家へ奉公さすも、歸參の便りと存ぜし所に、思ひも寄らぬ源氏と源氏の御軍、さし當る姊が御主人、見捨てて出世の望みは致さぬ、年こそ寄つたれ心一杯お力になり申さん。ヤア夫れに就き、木曾殿の御内に、四天王の隨一と呼ばれし樋口次郎兼光、討死との沙汰もなし、存命で居るならば、御臺若君ひきうけて、世話致すべき樋口が安否、お聞き及びなされずや。」「さればいの、樋口次郎は多田藏人を攻めんとて、河内の城へ向ひしが、其の後はいなせも聞かず、世につれる人心、頼みに思ひし樋口にさへ、見捨てられたる親子の者、自らが身は厭はぬ、何とぞ若を傳り育て、二度世にもあらせて下され、頼むは隼人一人ぞ。」と、又泣き沈む御風情、お筆親子も諸共に、絞り兼ねたる袖袂、實にや至つて悲しきには、腸を斷つといふ、猿の楊枝や曲者ごと、梶原が郎等番場忠太、家主に案内させ、聞き耳立つる表はひそく、内には忍ぶないじやくり、扱こそ知れたと打領き、門の戸荒く打ち叩く。隼人驚き

これは又、家主はひらせては事やかましと、欠交りの聲しはぶき、「うまう寢てるる所を誰ぢやいの、用が有るならあしたござれ。」と、寢覺の體にもてなせば、「いやおれぢや家主ぢや。」「オ、其の家主合點ぢや、夜夜半まで家賃の催促、夜が明け次第誂への楊枝先へ渡し、錢受取つて急度濟ます、起きるのが大層な、明日の事に。」と、言ひつゝ、そつと差足して、戸口の隙間を窺ひ見れば、表に捕手の荒者共、すは打ち入らん氣相なり。南無三寶あの大勢、外に落ちる道もなし、冤やせん角やと胸も心も碎くる許り、門の戸猶も打ち叩く。「オ、それよく、よき思案。」と、娘が耳に口さし寄せ、「若君のお小袖を、コリヤ斯うしてな、其の道は斯うくく。」と、知らすれば打領き、破れ屏風引立てて、若君御臺諸共に、身拵へする其の中に、隼人は戸を明け、「お家主、何事でござります。」と、ぬつと出づれば、それとかけ聲、番場が家來、十手振り上げ押取り巻く。「ア、これくく、聊爾なされな。」「ヤア聊爾とはのぶとい奴、木曾が女房小倅、隠うたにまきれなく、主人梶原の下知を受け、番場忠太が捕りに來た。尋常に渡せばよし、さなくば撲つてぶちする。」「コレ浪人殿、もうかなはぬ、隠うた子を彼方へ渡せば、御褒美を下さる。意地張らるゝと楊枝の様な其の腕が、脊中へ廻つて青細引、家主の過意に、其方の飯を運ばにやならぬ、家賃取らぬ其の上に、左様なつては家主滅却、サア早う渡されい。」と、齒の根も合はぬ顛ひ聲、「いや家主の難儀より、さし當つて此の身が可愛い、若君を渡しま

しよ、とても事斯うなされて下されぬか。「イヤ斯うとは細言、願ひあらば早まき出せ。」「アノ物
 でござります、假初にも娘が主人、取つて出しては此の頬が世間へ出されぬ、私も立ち、何れも立
 つ料簡は、何かなしに爰には置かれぬ、出て行けと追ひ出します、皆は表に隠れてござつて、此の内
 を出る所、彼の若君を引きたくつて、女にはお構ひ有るまい、すりや娘も助かる、何處も彼處も好い
 様に、御料簡頼み入る。」と、手をつけば、忠太領き、「夫れ程の儀は宥免をしてくれう、隠うた者ども
 早う出せ、家來共は提灯片寄せ、物音すな。」と、其の身も小陰に立ち忍ぶ。隼人は悦び内に入り、又
 啼いて親子が談合、わざと表へ聞かする大聲、「ヤイ娘、親を的に思うても吟味が強い、脊中に腹はか
 へられぬ、主人の供してとつととうせう。」「エ、父様そりや聞えぬ、他人でも義理は知る、娘の主人
 を出て行けとは、胴慾な事許り。」と、聲には泣けど目に泣かぬ、親子が狂言表には、すは出をるか
 と待ち受ける、番場忠太が腕捲り、内には隼人が心付け、笠取つてやり杖渡し、「なんほほえても叶は
 ぬ叶はぬ、出て往きをれ。」と、言うては旅の、用意の油單渡しては、「ヤレうせい。」と、言うては煙管
 煙草まで、残る方なく取り持たせ、「あれ／＼しぶとい泣面。」と、二人を門へ突き出せば、待ちに待つ
 たる番場忠太、山吹御前を引捕へ、「ヤ此奴は手振、次の女郎が抱いてをる、此の倅め。」と搔掴む。「こ
 は情なや渡さじ。」と、争ふお筆が手をもぎ放し、若君を奪ひ取る、汝も共にと言ふ聲に、「なう恐ろし

やお助けあれ。」と、山吹御前の御手を取り、轆つ轉びつ落ちて行く。「やれ／＼嬉しや、家主に難儀も
 掛らず、お手に入つてお目出度い、小ほけな形をして、結構な物著て居る。」と、いふに、番場も心付
 き、「此奴ごねたか、しやちばり返つて木ほせの様な小倅。」と、提灯取り寄せとつくと見、「ヤア、駒若
 ぢやない、こりや猿松、見世ざらして恥さらした憎い浪人、蹈ん込んで撲ち殺せ。」と、一度にどし込
 む門口の、小脇に隼人は隠れ居て、捕人を遣り越し入り代り、すつと出て表の戸、外より引立て、鏝
 手早くえび錠下す。内にはてんでに疊を上げ、簀子の下から長持の、底まで叩けど、こりや居らぬ、
 脱け道はなし、ムウ叔は門へと引き返す、表の戸口は外から閉て切り、忠太主従家主まじり、「コリヤ
 如何ぢや／＼。」と、うろ／＼狼狽へ、爰明けよと、内からた／＼く門の戸の、外に隼人が心地よく、「コ
 レ家主、家賃せがむが面倒さに、家を明けて今行くぞ、楊枝屋が猿智慧は、汝等に置土産、若君は爰
 に抱いて居る。」と、内懐よりお顔を出し、「御運強きにこやか顔、見せたけれどもマアならぬ、ゆる
 りと其處にけつかれ。」と、山吹御前の御跡慕ひ、逸散に落ちて行く。「ヤア老耄め、遁すな。」と、番場
 主従聲々に、門の戸打ち破り店踏み碎き、何處までも追つかくる、跡には家主口あんごり、「コリヤ
 ささほうさにしをつたな、家は碎かれ家賃は取らず、エ、儘よ、百貫の形に猿一疋、此奴めに著物著
 せ、爰をさるとは秀句ぢやの、さるとは能うしをつた、さるとんがうとは思はれぬ、汝楊枝屋め、

力癩楊枝出さば出せ、家賃をとらで置くべきか。」と、跡を慕うて三重急ぎ行く。實に武士のならひとて、夫は跡の軍場に、妻は東の留主住居、梶原平三景時が屋敷には、嫡子源太景季が誕生日の祝ひとて、上段の牀に兜鍪を飾り立て、敵に搗餅の供物、御神酒の三方、鬘斗昆布、取りく運ぶ其の中に、千鳥といふは鎌田隼人清次が乙娘、親の出世の便りにと、望み有る身の宮仕、友傍輩にも憎まれぬ、顔容より心まで、愛敬有りて可愛らし。「サア、奥様の言付の通り、お供物も残らず揃うた、此の障子を斯うしやんと閉て切ると最う仕舞、ア、嬉しや。」と言ひければ、「オ、そなたは取分け嬉しい筈、何がな御用聞きたがりやる若旦那の誕生日、都の軍も勝ちやけな、如何か斯うかと、お案じなされた母御様より百増倍、心がいそぐ千鳥殿。」「ハテ此のお館に奉公する身、嬉しいに替りはない。」「イヤかはりの有る證據言ひましょ、若旦那のお立ちの時、永い別れにならぬ様に、目度う凱陣遊ばし、お顔見せて下さんと、涙片手に抱き付きやつたを見てるに、隠すが憎い操つて、白状さしよ。」と立ちかゝれば、「なう誤つた、泳へて下され、心安い傍輩中、隠したには譯がある、よい事には寸善尺魔と、弟御の平次景高様、此の千鳥に惚れたとて、くどかる、其のつらさ、私は兄御の源太様にと、左様も言はれぬ日比の氣質、こんなけびらい聞かすが否や、堪らぬく、かんまへて沙汰なしに。」と、話の中の間の襖そつと押明け、病の牀より立ち出づる梶原平次景高、一重帯に大脇差、伊達

紙子の大廣袖を打ちかけ、「ヤアあた奴しいめろさいめら、母人の伽はせないで何をほざく、奥へうせう。」ときめ付けられ、「あいと。」一度に立つて行く。「コリヤく千鳥、其方許りは此處に居い。」「いや私もお袋様の傍へ。」「というて外さうでな、そりや成らぬ、願うてもない上首尾、サア来い寝間へ。」と、手を取れば振り放し、「お前には御病氣故、親御様のお供もなされず、お留守に残つて御養生の最中、夫れにマアお寝間へとは、お傍に居るさへ私は怖い。」「オ、病人とは不粹な、薬呑むは假令の見せかけ、鼻も引かぬ達者な平次。」「フンすりや、わづらひはなされぬか。」「オ、諺ぢや。」「そりやなげに。」「何故にとは餘所々々しい、其方を己が手に入れうで、邪魔な和郎達京へ登し、味い留守事せうでな、作兵衛と出かけた心中男、君よ憎うは有るまいかな。」「サイナ夫れ程まで私が事、思召し下さりますを、忝いと言はれぬは、京に居られます父様は、鎌田隼人清次と申して、源氏譜代の家來筋、頼朝様へ歸參の望み、御出頭の此のお家、御奉公致しまするも、折もあらば右の願ひ申し上げたい下心、お袋様の赦しもないに、お前の仰せに隨へば、いたづら者とお隙の出るは定の物、さすれば親の望みも叶はず、爰を能う聞き分けて。」「ヤア黙れ千鳥、赦しが出ねば隨はれぬといふ者が、兄源太とは何故寝た。」「いや私は。」「いやとはどこい、たつた今そちが口から、好い事には寸善尺魔と、吐さぬ先から知れてはるれど、言ひ出しては物が無い、ハテそちさへ應と言や、兄のわけでもいた」

く合點、斯う底を打ちわるからは、いやとは言はさぬ、手も足も引つく、つて、むりやりに抱いて寝る、サア應といふか、いやと言うて括らるゝか、如何ぢや〜。」と肩口捉へ、手詰に成つて動かさねば、「コレ無體な事なざるゝと、平次様の病は謠、作病でござりますと大きな聲で言ひますぞえ。」「夫れいうて堪る物か。」「言ふなら此處放して。」「放しては戀が叶はぬ。」「そんなりや言ひます。」「いや言はさぬ。」と口に手を當て、せり合ふ所へ都より、急用有つて横須賀軍内、只今下著と打通れば、平次悔り、「エ、邪魔な所へ。」と、うろ付く隙をそつと抜け、千鳥は奥へ逃けて行く。景高居直り、「ヤア軍内、急用とは氣遣はし、様子如何に。」と尋ねれば、「さん候、御總領の源太殿鎌倉へ御返しなさる、其の儀に付いて、奥様へ親旦那より御内意の此の文箱、先へ參つてお渡し申せ、畏まつたと急ぎの道中、川々の水に隙取つて漸う只今、源太殿にも追付お著き。」「何ぢや兄貴が戻る、エ、夫れでは此方の工面が違ふ、何角に付けて面倒い和郎、何の爲に歸さるゝ、其方や知らぬか。」「成程知つてをりまする、其の様子はお前の御果報、今度宇治川の先陣、佐々木四郎に高名せられ、源太殿は後れを取り、京中の物笑ひ、なにが手厳しい親旦那、御機嫌さん〜、京で殺せば恥の上塗り、鎌倉で腹切らせ、汝をやるは檢使同然、必ず手緩く致すなと、きつと仰せ付けられた、總領殿を仕舞うてやれば、御家督は差詰めお前、目出度うは思さぬか。」「目出度いく、結構な吉左右、能う知らせた、委しい

事は奥で聞かう、先づ其の文箱を母人へ。」と、打連れてこそ入りにける。時もあらせず表の方、「若旦那の御歸國。」と、ざゝめく聲々、梶原源太景季鎌倉一の風流男、戰場より立ち歸る、烏帽子の懸緒古實を正し、大紋の袖たぶやかに座敷へ通れば、母の延壽「なに源太が歸りしか、いづらや〜。」と立ち出で給ひ、「ナウ源太、頼朝卿の御運強く、木曾殿を亡ぼし給ふ、範頼義経兩大將を初め參らせ、誰々も恙なしと聞きつるが、顔を見て落著きました。」「仰せの如く木曾の狼藉、早速に切り鎮め、押續いて西國表、平家の大敵攻め亡ぼし、法皇の宸襟を休め奉らんと、攻め支度の評定取り〜、父にも益、御勇健、先づは變らぬ母人の御有様、拜し申して祝著。」と、謹んで述べければ、「いやとよ源太、都は未だ軍なかば、其方一人歸されしは心得ず、父御の仰せは聞かざるか。」「いや何とも承らず、鎌倉へ立ち歸り、仔細は母に尋ねよと、仰せも辭みがたければ、是非に及ばず罷り歸る、母人の御方へは如何申し参りしやらん、覺束なし。」と伺へば、「オ、軍内が渡せし文箱、是れ見よ、封もまだ切らず、心元なや披き見ん。」と、蓋押明くるその隙に、千鳥は戀しい殿御の顔、守りつめても親子の中、包む戀路のやるせなさ。「申し源太様、常さへ旅は憂き物に、たと御苦勞なされしやら、お顔の細つた事わいな、お氣もじ悪うはござりませぬか。」「ホ、しをらしい、そちが問ふで氣が付いた、身が發足の時分には、弟平次病氣であつたが本復をしめされたか。」「アイナ本復やら、立腹やら、

達者過ぎて迷惑を致します。「夫れは一段、何處にお居やる、對面したい。」イヤ兄者人、平次是れに罷りある。」と、一間の内よりのさばり出で、「先づななが指指きて聞きたいは、宇治川の先陣、見事な高名遊ばしたでござらうの。」「オ、此の源太が身に取つては、過分なる今度の高名。」「何高名とはコリヤ珍らしい、お話しなされ、承らう。」「ホ、語つて聞かさん承れ。さる程に義經の御勢は、都合二萬五千餘騎、山城國宇治の郡に押し寄する、比は睦月の末つ方、四方の山々雪解して、水嵩増りし彼の大河、宇治橋の中の間引きはなし、向うの岸には亂杭逆茂木隙間もなく、鎧うたる武者五六千、川を渡さば射落さんと、鉞を揃へて待ちかけたり。かかる時節に渡さずば、いつか譽を顯はさんと、我が君より給はつたる磨墨と云ふ名馬に、障泥外してゆらりと打ちのり、名に橋の小島が崎より、逸散に驅け出せば、續いて跡に武者一騎、春の晨の川風に、誘ふ響の音はりんく、誰なるらんと見返れば、古歌の心に似たるぞや、朧々と白玉の、霞の隙より驅けきたるは、佐々木四郎高綱、馬は劣らぬ生駿磨墨、二騎相竝んでさんぶくと打入れる。」「コレ兄者人、是れまでは話しもならう、是れから先が勝負の關門、自身には言ひ憎かる、兄弟のよしみ、平次が代つて話さう。」と、言ふに千鳥が聞き兼ねて、「兄御様の高名話、横合から腰折らすと、黙つて聞いて居さしやんせ。」「ヤアいやらしい肩持つな、我には構はぬ、今の跡は斯うである、佐々木は聞ゆる剛の者、兄貴は知れたぬるま

殿、遂に佐々木に乗り負けて。「いやくくく何の貴方が負け給はん、知らぬながら千鳥が推量、敵は川を渡さじと水底に、大綱小綱十文字に引渡し、駒の足を惱ませしに、頼智の源太景季様、太刀をすりと抜き給ひ、大綱小綱切り流しく、なされたでござんせう。」「オ、千鳥がいふに違ひなく、綱を残らず切り拂ひ、佐々木が乗つたる生駿に、一段許り乗り勝つたり。」「アレ聞き給へ負けはなされぬ、ア、嬉しや、それ聞いて瘡が下りた。」とよろこべば、平次頭を打振つて、「某佐々木になり代り、一問答仕らん、其の時高綱大音上げ、コレく景季、馬の腹帯が延び候、鞍かへされて怪我あるなど、聲をかけたであらうがの。」「ホ、委しくも能く知つたり、某はつと心付き、弓の弦を口に啣へ、馬の腹帯に諸手をかけ、引上げ揺り上げしつかとしめる。」「コレく夫れがうつかり延びぬ腹帯を、延びたといふはこなたの鼻毛を見ぬいた計畧、うじくめさる、其の際に、さつと佐々木が打渡つて、宇多の天皇九代の後胤、近江源氏の嫡流、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣なりと呼ばはりしは、天晴手柄、此方は大恥、微塵も違ひはあるまいが。」と、かさに蒐つて恥ぢしむれば、源太は黙して答へなし。傍からハアくくくと、焦る許りに女氣の、何と詮方泣く千鳥、平次景高せ、ら笑ひ、「何奴も此奴も泣え頬、ハテ氣味の好い事の。コレ母者人、總領の恥かき殿を、仕舞へと言うて來ませうがの、其の状己にも見せさつしやれ。」と、差しだす腕を擲きのけ、「コリヤ此の文は母への名

宛、何が書いて有らうと儘、そちには見せぬ、母をさし措き出しやばるな。」と、呵る聲さへおろく、
 涙、又くり返す文體に、心を痛めおはします。「エ、子に甘いも事による、生きて置く程親兄弟の面汗
 し、コレ爰な腰抜け殿、せめては親の催促待たず、直に斯うと思ふ氣はないか、夫れも成るまい、世
 間は切腹したにして、其の首刎ねて埒明けう。」と、すばと抜いて切り蒐る。刀の鐔際むすと取り、「兄
 親に對し尾籠の振舞、腰抜の手並腰骨におほえよ。」と、引つかづいてどうど投げ付け、起しも立てず
 刀の背打ち、りうくはつしと撲ちのめせば、あいたくと顔撃め、はふく逃けてぞ入りにける。
 「コリヤく千鳥、源太が母へ申し上げる仔細あり、次へ參れ。」と人を除け、「斯く申さば、景季が命
 惜しむに似たれども、ゆめく助かる所存にあらず、此の度宇治の合戦前、父にて候平三殿、軍の
 勝負を試みると、御赦しもなき的を射損じ、其の矢が計らず大將の、御白旗に當りしは、味方の不吉
 父の不運、申譯立ちがたく、切腹に極まりしを、佐々木四郎が情によつて、君の御前を言ひなほし、
 父の命を助けたり、其の場に某在り合はさず、跡にてかくと承り、佐々木に逢つて一禮をと、思
 ふ間もなく早合戦、宇治川の先陣は、我も人も望む所、有るが中にも川を渡すは佐々木と某、南無
 三寶、父の爲には恩ある佐々木、此の人に乗り勝つては侍の道立たすと、心一つに料簡定め、先陣
 を彼に譲り手柄させしは情の返禮、後れを取りし某は、元來覺悟の上なれば、恥も命もちつとも厭

はず、先陣の高名におさく劣らぬ、孝行の高名と存すれど、白地申されぬは、武士と武士との誠の
 情、父の爲に捨つる命、お暇申す母上。」と、指添に手をかくれば、「やれ待て源太、それほど知れた身
 の言譯、父御へは何故言はぬ。」「いや言譯を仕れば、佐々木が手柄を無にする道理、據なく母人
 へ、申し上げしも本意ならず、死後とても此の事は、御沙汰なされて下さるな。」「否々、夫れは若氣
 の料簡、今死んでは忠孝にならぬぞよ。」「こは仰せとも覺えず、義を知つて相果つれば、忠も立ち孝
 も立つ。」「いや立たぬ、何故と言へ、梶原の家は坂東の八平氏、其の氏を名に顯はす、平三殿の總領
 の其方なれば、名をば平太といふべきを、源太と付けしは忝くも、征夷大將軍源頼朝卿、石橋山
 の伏木隠れ、危き御命助けられし、平三殿を命の親と宣ひて、勿體なくも家來の子を、兄弟分に思召
 され、源の氏を給はり、源太と名乗らせ、源氏嫡流の御召ある、産衣といふ鎧まで下された烏帽子
 子、爰を能う合點しや、今命を捨ててはな、産の親への孝行は立たうが、烏帽子親の我が君へは、何
 の命で御恩を送る、主なり親なり、忠孝が立たぬとは、爰の事をいふわいの。」「イヤ其の御恩をわす
 れは致さぬ、烏帽子親とは憚りあり、主従は三世の契り、生きかはり死にかはり、君に仕へる侍の
 魂。」「ヤア情ない三世の契りのお主には、未來でも逢はれうが、親子は一世、此の世許りで又逢は
 れぬ、母を置いて死なうといふ子も胴慾、殺せと書いて送られし連合は猶胴慾、悪い子でさへ捨て兼

ねるは親の因果、まして健氣な子でないか、蟲けらの命でさへ、科ない者は殺されぬに、塵芥かなんぞの様に、心やすそに捨てよとは、父御許りの子かいなう、母が爲にも子ぢや物を、問ひ談合に及びもせず、軍内を檢使にやると、一徹短慮な此の文體、見るも恨めし忌々し。」と、すん／＼に引裂き引裂き、口に含んで噛みしだき、夫を恨み子をかこち、わつと叫び入り給ふ。母の慈悲心膽に銘じ、六根五臟を絞り出す、涙もあつき恩愛の、親子の歎きぞ道理なる。横須賀軍内憚りなく、つつと通り、「親旦那の御狀御覽の上は、申すに及ばぬ某は檢使の役、サア源太殿、腹めされ。」と、苦り切つて言ひ放せば、「オ、覺悟は兼て極めし。」と、身繕ひする所を、母は立ちより取つて伏せ、「ヤアどこい、腹とはそりやならぬ、恥かいた人でなし、大小もいで阿房拂ひ、手緩い爺御の指圖より、嚴しい母が仕置を見しよ、誰そ中間共が古布子持つて來い、早う／＼。」と呼ぶ聲に、あつと答へて平次景高、古わんばう提げ出で、「申し母人、此の布子如何なさる。」と、「如何するとは知れた事、此奴めに著せかへて門前からほつ拂へ。」と、「それこそ望む所よ。」と、無法の主従立ちかゝり、てんでにもぎ取る太刀烏帽子、叩き落されおつほる髪、素袍袴の帶紐も、引きしやなぐるやら引き切るやら、上著中著の綾錦、古わんばうに著せ換へさせ、腰に喰ひ入る繩帶しめ付け、己を先刻に投げをつた、禮は平次がお脇で言ふと、縁より下へ蹈み落し、「さつても氣味の好い様の。」と、一度に哄と打笑ふ。源太は變りし我が

姿の、恥も無念も忍び泣き、母は我が子を助けん爲、人前作る澀面顔、怒る擬勢も苦口も、詞と心は裏表、「命代りの勘當ぢやと、思うて堪忍してくれ。」と、言ひたさ辛さ泣きたさを、胸に包めど包まれぬ、悲しい色目悟られじと、「ヤア皆の者が彼の態見て、をかしがるので母もをかしい、餘り笑うて涙が出る、ハ、ハ、ハ。」と高笑ひ、泣くよりもなほ憐れなり。千鳥はかくと聞くよりも、有るにもあられず走り出で、變りし源太が憂き姿、二目とも見もかす、「お胸慾な母御様、勝つも負けるも軍の慣ひ、誰しも斯うした不覺はあるもの、父御様から殺せと有るを、お詫言はなされいで、阿房拂ひの勘當のと、是れがほんの父打ち母打ち、二人の親御に憎まれて、源太様の御身が何處で立つ、あれ程慘うなされた上は、もう堪忍して上げまして、下さりませい。」と許りにて、かつばと伏して泣きわぶる。「ヤア此の母が采配、小癩な其方が何知つて、コリヤ能う聞け、源太めがああ態は、第一の見せしめ、あの恥を無念と思はば、西國へ攻め下つて平家を亡ほし、手柄して我が君の御用に立たば、ナ勘當はせぬ、ナ平次、ナ心得たか、必ず手柄を待つて居る、母が詞を忘るゝな。」と、弟が事に言ひなして、兄を勵ます詞の謎々、とくより母の御慈悲とは、知る程重き源太が額、土に摺付け泣き居たる。平次景高したり顔、「コリヤ千鳥、なんほ吼えても叶はぬ、是れからは分別仕換へ、泥坊めが事思ひ切り、おれが言ふ事聞きさへすりや、母へ願うて、コリヤ奥様ぢや、嬉しいか。」と、脊中擲けば、「エ、穢ら

はしい、聞きともない、憎まれ子世に憚ると、何所までは、わかりなされうが、いやぢやく、わしやいやぢやく。「ヤアしぶとい女郎め。」と掴み蒐るを母押し退け、「何ぢやく、千鳥と源太が狂うて居る、エ年よりひねた徒者、此奴は己が仕様が有る、源太めを追ひまくれ。」と、千鳥を引立て奥に入り、「コリヤ軍内、下部共に言付け、彼奴を早うまくし出せ。」「イヤサおせきなざる、な、母御の仰せは冤も角も、某が存ずるはコレ斯うく。」と平次が耳に吹きこめば、「オ、左様ぢやく、よい分別。」と二人白洲に飛び下り、聲をまかけず抜き打ちに、源太を目蒐け切り付くる。さしつたりと引つばづし、かい潜る身の捻り、軍内が諸膝かき、のめらす隙を又切りかくる、平次が刀も閃りと外し、引摺んで筋斗うたせ、二人を踏み付け立つたるは、心地よくこそ見えにけれ。「ヤア平次千鳥が事を根葉に持ち、兄に敵たふ畜生め、今踏み殺すは安けれど、悪い子とても捨てられぬと、母のお詞聞き捨てられず助け置く、源太に代つて孝行に仕れ。」と、弓手に差上げ、くるくると振り廻し、七八間打ち付くれば、辛き命を助かりて、跡をも見せず逃けて行く。「ヤア軍内、親共からの使なれば、汝も如何も殺されぬ、其處を源太が料簡して、殺してしまふ仕様はりうく、これ見をれ、汝が刀で汝が首、ころりと落すは自業自得果、源太は殺さぬ、手許り動く。」と言ふより早く、首と胴との生別れ、親子の別れ今一度、母の御目にいやく、仰せに随ひ平家の戦ひ、四國九國の果てまでも、ほつ詰めほ

つ詰め高名し、其の時お顔を拜まんすと、思ひ諦め立ち出づる、うしろの障子さつと開く、音に驚き振り返れば、母はすつくと立ちながら、源太が方へは目もやらす、「四國九國の合戦も、素肌武者では手柄が成るまい、勘當した子に持つて行けと教へはせぬが、頼朝卿より賜はりし産衣の鎧兜、誕生日の祝儀とて、飾らせて爰に有る、我が物を取つて行くに誰がいやと言はうぞ、但しは入らぬか、主もない此の鎧、早取りおけ腰元共、女共は何處に居る、来いよく。」と呼ばはりく入り給ふ。「ハ、ア重々ふかき御憐愍、忝しく。」と、驅けあがつて鎧兜を取り除くれば、思ひがけなき具足櫃より、すつと出でたる腰元千鳥、「ヤア其方は爰に何として。」「サア是れも母御様のお情、不義をした科で、此の箱に入れ糺命さす、其の跡は隙をやる、往きたい方へ連れ立つて往きをれと、お慈悲深い御料簡。」「何母人が、ハッアハ、、有りがたや、冥加なや、あだに思はば逆罰受けん、恐ろしく、是れより直に此の源太が、恥辱をすく合戦の首途、お暇申し奉る。」と母の方を伏し拜み、「おまめでござつて下さりませ。」と、言ふも盡きせぬ別れの涙、しほり兼ねたる袖の海、深き御恩を蒙りしは、身一つならぬ友千鳥、なくく出でしが又立ちどまり、振り返りては親と子の、はてし名残の憂き別れ、浮世に憂き身かこつらん。

第三

道行君が後紐

半太夫捨つる身を、捨てぬほだしは子故の闇、空もあやなき 曉の、髪も形も宵の儘、世の憂き辛さ
 悲しさを、いはぬ色なる山吹御前、月さへ西に落人の、柱の里の難儀より、知邊の方に一夜二夜、明
 し暮せど忍ぶ身は、都近くも物憂しと、今日思ひ立つ俄旅、人目を恥づる取りなりは、身に幅もなき
 麻衣の、木曾路をさして行く道の、歩み苦しく眞砂地を、よむ許りなる桂川、お筆が背に大きむ小さ
 む、猿の衣服かつて著しよ、かつてめしたる若君の、危き所をのがれしも、まさるめでたき御運のつ
 よさ、亡き我が夫の胤よ形見よ、わすれ草、唄焼野の雉子夜の鶴、子を悲しまぬはなき物を、まして
 況んや人として、親の別れを白絲の、血筋を分けし父君に、似たりや似たりいたいけ盛り、あれく
 あれを見や、二つ連れたる雲居の鴈、故郷へ歸る我々も、君の故郷へ歸れども、鶯鶯の片羽のとほと
 ほと、子に迷ひ行く小夜千鳥、つまも迷はん三つ瀬川、四つ塚東寺九重の、都のうちにのおのづから、
 傾く笠の打ちしをれ、今落人の身の上も、人にしられし白川の、水も淀みて粟田山、唄あはれ父なき
 稚子を、すかせば肩にすやくくと、轉寐入の餘念なき、爰こそ姥が懐と、土地の名さへ有る物を、

鉢叩 お乳も添乳もなきそなきそ、晝寐の夢はかはらねど、變る姿のア、恥かしや、丸寐がちなる我
 我に、色も有るか袖袂、引くな引かせじ日の岡の、戀の峠も越えわびて、唄いやといふのはな浮世
 のならひよさいな、底の心はホンニ得しらいでさいな、それがじよいなまじよいな。遙かに唄ふ聲々
 は、松をしらぶる春風か、それかあらぬか御して、やうく跡を老いの身の、道に後れて鎌田隼人、
 娘が肩脊休めんと、抱き取つたる駒若丸、音せでお寐れ好い殿、ねん／＼ねんねこせい、いとしい殿
 に花やろ、花やろ／＼、花一時と詠めても、君の命にくらべては、盛り久しく若君も、父御の武勇を
 受けつぎて、生長榮えましませと、諸羽の宮に人々は、暫く法施奉り、今たどり行く道芝も、さい
 つ比木曾殿の、鞭打ち給ふ所ぞと、聞けば草木も外ならず、浮世なりけり世なりけり、昨日めでたき
 人だにも、今日は漂ふうたかたの、粟津が原の討死を、思ひやるさへ悲しやな。矢ひとつ來つて我が
 夫の、内兜に射付けしは、天の咎めか武運のつきか、終に其の手で馬上より、をちこちの土となり給
 ふ、所はあれよあの雲の、下こそ君の最期場と、見るに付け語るに付け、袖は涙の春雨に、しをれ侘
 びつ、山吹も、心地すぐれず見え給へば、立ち寄りいさめ慰めて、いささせ給へと御手を引き、見渡
 せば、春の日あしも走井や、慣はぬ旅に身も疲れ、世の憂き事を夕嵐、さら／＼と吹きくれば、
 棲も裳もひら／＼、ひら／＼と吹き分くる、追分過ぎて大津の宿、唄今宵は爰に枕、袖

をかたしく旅宿り、疲れを晴らさせ三重給ひける。東路を上り下りの旅人も、二つと三つに追分や、大津に並ぶ旅籠屋の、棟門多き其の中に、名高き關の清水屋が、疾くより奥に客とめて、料理拵へ俎板の、音もてきく亭主が氣配り、下女も男もそれ／＼に、茶運ぶ風呂焼く人泊める、門賑しき黄昏時、あら尊と導き給へ觀世音、運ぶ歩みの順禮姿、背に國名を笈摺の、年は六十路に色黒き、達者作りの老人が、娘と孫を打ちつれて、胸にかけたるふだらくや、紀の路大和路打過ぎて、今日も暮れぬる鐘の聲、三井寺に札納め、爰か其處かとさし覗けば、亭主がかけ出で、「コレ親仁様、お泊りなら脇ひら見まい、名代の清水屋、座敷が綺麗な木賃が安い、サアお入り。」と引き止むれば、「ア、これこれ、滅多に引張つて著物破つて貰ふまい、なんほ泊めたがりやつても、木賃を聞かにはほか／＼とはひらぬ親仁、サアいくらぢやきり／＼言うた。」「ハテ定まりは三十なれど、好い様にして泊めましようい。」「イヤ好い様とは好い衆の事、俺はずんと貧乏な西國、道々も杓振つて、順禮に御報謝で貰ひ溜の米も有れど、たつた今跡の石場で蕎麥をした、かしてやつたりや、腹袋に足が入つて、明日まで煮焚も何にもならぬが、ナント二十宛で泊めぬかい。」「ハテそりや安けれど、順禮衆の事ぢやもの、儘よ負けましよう。」「イヤ安うはないぞや、錢の-highが合點か、しかけてつかへば五分四五厘、利が有りすぎよ。サアそんならお芳草鞋解け、サア坊上ろ、ヤアえい／＼。」と、襖隔てて次の間に、打寛い

で、「扱歩いたは、今日は大道其方も草臥、おりや猶の事、道下手で氣許りいらくら、船頭と鼈は、陸で埒の明かぬ物、やれしんどや腰痛や、ドレ其の枕取つても。ア、やい／＼コリヤ榎松よ、其の禰明けん物ぢや怖いぞ／＼、コリヤ爰へ來い、じ、かんでやろ、エ、穢い涕では有るぞ、オ、あれあれ、又飯行李引出すわい、さりとて徒手の奴、ヤ真に夫れで思ひ出した、コレ／＼宿の衆、どれぞ鳥渡頼んましよう早う／＼。」「オ、これ父様、けた、ましい何ぞいの。」「イヤ此の飯行李がさ／＼洗うてもろて、明日の出立の残りを詰める、菜は茄子に大根を取り交ぜ、香の物のこけら鮮、頼んで置く。」と詔はぬ、巽上りのとんきよ聲、夫れといはねど紛れなき、舟乗とこそ知られたり。同じ浮世に憂き思ひ、人忍ぶ身はおのづから、茅にも心奥座敷、山吹御前は先達、爰に宿りを假初も、慣はぬ旅に疲れ果て、御心地例ならねば、お傍離れぬ鎌田隼人、娘のお筆諸共に、勞り介抱するうちに、何の頭是も泣き出す、駒若君のやんちや聲、襖一重に聞くと氣の毒、「ア、お芳、あちらの旅人も子が有るさうなが、さつてもせがむは、わやくいふなア、瞞しても賺しても、おこりをると何處にも迷惑、ハア、なんぞ遣りたい物ぢやが、オ、夫れよ、童賺しはこんな時、今跡で買うた大津繪一枚やろ。」と取り出すを、榎松が掴んで放さばこそ、「いやぢやく／＼。」と泣きわめく。「オ、こりやく／＼破るなやい、エ、各い坊主め、コリヤよう合點せい、此の繪は座頭の坊が禪を、犬がくはへて引く所、こりや目

がなうて面白ない、餘所の子に遣つてのけ、汝にやこれく、衣著た鬼の念佛嚙みくだく、撞木を持つて鉦くわんくわん、イヤくわらくわんくわん。」と紛らす中に、お芳が襖押明けて、「コレ申し、お鄰のお小さいのがきつい泣きやう、是れ進ぜましょ。」とさし出せば、お筆が取つて押戴き、「是れはく、忝い、お前にも子達が有るに、好物進せて下さんした、これく、嬰兒、ホ、好いのぢや、アレ餘所の嬰兒御覽じませ、おとなしい事わいの。」「オ、あのおつしやる事は、能うおとなしかろぞ、其の腕白さ意地わるで、如何も斯うも成ることちやござりませぬ、お前のは色白に美しい好いお子やの、お幾歳でござります。」「ナア此のお子は、三つなれど年弱でござんすわい。」「扱もいやく、そんなりや是れと同じ年、同じ三つと言ひながら、此の坊主は二月生まれで年強。」「ホンニ夫れでか大柄にも有り、逞しい子でお仕合、見れば順禮さしやんすさうなが、奇特な事や、所は何處ぞい。」「アイ所は是れから大方十二三里も下。」「コリヤお芳、主の臍探る様に、エ、ぐづくした物の言ひ様、たつた一口つい津の國の船頭ぢやと言うたが好いわい。」「ア、忙しない、ちつと人にも物言はせたがよいわいの、マ、聞いて下さりませ、此の様に乳香子を抱へ長旅を致しまするも、私が稚馴染、此の子が爺は随分達者な人で有つたが、ふと感言の心地と病み付いたが定業やら、聞もなう死なれて、今年が丁度三年に當りますれど、何を供養施しも、内證のかいは廻らず、西國は結構な事ぢやと聞けば、

せめて足手を引いてなりと、夫の菩提を弔ひたさに、おもひ立つての順禮。」と、語るを聞いて山吹御前、「あの子も三つ我が子も三つ、父親にわかれたとは、果報拙やいとしゃやなう、自らとても殿御に離れ、便りなき身の旅の空、世には似た事も有る物。」と、身につまさる、御涙「アレ聞いたかお芳、あなたもお亭様か無いといやい、そりや悲しいは尤もぢやが、生身は死身、合はせ物は離れ物、何ほ泣いても返らぬ事、さつぱりと諦めて、早う男を持たしやりませ、ハテ左様なけりや我も人も、肝心の商賣がなりませぬ、夫れでこつちも近頃幸ひな者婿に取つたが、此のお芳が舵の取り様が好い故か、何時ともなう帆柱立てて、乗りまする押しまする、舟一まきならござれく、そこで己は一助かり、大船に乗つた心、外に望みは何にもないが、たつた一色サアいつくの浦でも、無い物は金と化物、有る物は質の札と借銭、こいつも根柢でござります、見りやお前方は好い衆さうなが、何處元から何方へござる。」と、問はれてお筆が取り繕ひ、「サア我々は都を離れ、片山里から信濃路へ志し。」「エ、聞えた、善光寺参りぢやな。」「オ、いかにもそれく。夫れに付いて難儀な事は、是れにござるお主様が俄の御病氣、アお道理でも有る、つひに是れまで道一里と、お拾ひなされた事なければ、お疲れの出るも尤も、私らが足さへ草鞋にくはれて。」「ホ、まめが出来たでござりましょ、そりや針で突かしやりませ、總體まめといふ物は、突くとじくく汁が出まする。」「ア、これ父様、ひよかすかと出

放題な何ぞいの。「イヤひよかすかぢやない、ようなる事を言うてしんぜる。」「アレ未だいの、オ、笑止な人や。」と袖おほへば、「イヤ〜些とも苦しうない、最前から手前も出て、挨拶するも合點なれど、却つて興もさめうかと、わざと控へて居申した、今娘が言ふ如く、御主人の御病氣、親子の者が御介抱も、旅宿なれば萬事に任せず、何がな慰みと思へども、口重たき我々では埒明かぬ、正眞の旅は道連、かう打ち寄るも他生の縁、サア〜遠慮なしになんなりとも、お氣のはる、話を頼む。」

「ア、旦那殿こりや迷惑、おらは話はなんにも知らぬに、オ、有るぞ〜、たつた一つ話しましよ、昔々爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯しに。」「ア、これ〜、そりやあんまり、子供も知つた昔話古い〜。」「サア古いによつて洗濯しまする、洗うても磨いても、新しうならぬ物は、寄る年と此の顔の、眞黒なはしつかい牛、もう寐たとよござりましよ。」と、蒲團てんでに寐轉びて、話半ばへ亭主がによつこり、「ハア、こりや皆まだお休みなされぬか、さらば行燈を取りましよかい、此の儘置けば油代が十文出まする。」「オ、そりや合點ぢや、やつぱり置いたり、爰で一つ談合が有る、兩方兼ねた此の行燈、其方も此方も勘定つく、何と三文負けて貰をかい。」「へッ扱も細かい虱のかは。」「イヤ己が虱より此の蒲團はどうやらうじ〜、千手觀音は居らぬかや。」「ハテ勿體ない、順禮が觀音嫌うて好い物か、信ありや徳有る奇特には、道中怪我の無い様に、乗りうつつてござりましよ。」と、笑うて

勝手へ入りにけり。文齋跡は互に旅草臥、子供の添乳肘枕、話のあとも轉寐に、とろ〜寐入るをりこそ有れ、村中を驅け廻る、歩行がによつと門口から、「御亭主内にか。」「オット何ぢや。」「イヤ何ぢやはお尋ね者、嚴しい御詮議、委しい事は來て聞かしやれ、サア〜今ぢやちやつと〜。」「ホイそりや往かざるまい、遅くは莊屋のたくら者、また頭から嚙むぢや有る。」と、氣もわく雪駄片々に、羽織引つかけ出でて行く。既に其の夜も更け渡り、遠寺の鐘もかすかなる、燈火細く影さして、四方に人音しづまりぬ。唄旅ぞとも、知らぬ稚子鄰同士、宵寐まどひの目をほつちり、乳房離れてそろそろと、這ひ出で一人にた〜笑ひ、頭てん〜てうち〜あはは、間の襖を越え行けば、此方の子も出て這ひ廻り、額き合せて寄り集り、おせ〜小ばうしが同い年、互に愛するごとくにて、機嫌笑顔のしほの目細目、煙管ぐわた〜手すさびや、菅笠取つて著たは松茸ほしがる顔で、摺めば遣らじと引張り合ひ、餘念他愛もなかりしが、悦ぶ先にほつと欠も子供の常、又行燈に手をかけて、此方が引けば彼方も引き、突き戻せば押ししかへし、引きあふ拍子に土器揺り込み、燈火ばつたり眞暗闇、我と我が手に驚きて、わつと泣き出す子供の聲、寐耳に恠り目さます人々、こりや何事とろつ中、亭主が注進先に立ち、梶原が家來番場忠太、大勢引連れ驅け來り、それ遁すなと下知すれば、捕つた捕つたと亂れ入る。音に驚き家内の騒動、顛ひ戦慄きあつたふた、危さ怖さも暗紛れ、行き當るやらこ

けるやら、上を下へと三重立ち騒ぐ。風も烈しき夜半の空、星さへ雲に覆はれて、道もあやなく物凄
 き、裏は田畑を隔ての大藪、押分け掻分け、忠義一途にかひなくしく、お筆は片手に若君抱き、山吹
 御前の御手を引き、驅け出でて息をつぎ、「扱もひやいや危い事、父様は多勢を防いで跡から追付く、
 早う逃げよと有りし故、滅多無性に走つても、暗さは暗し勝手は知らず、どつちへ逃けてよからう。」
 と、うろつく向うへ数多の人聲、又むらくとかけ來り、遁さぬやらぬと無二無三、打つてか、れば
 叶はじと、山吹御前に若君渡し、一腰抜いてはつし、てふく翼の早業さそく、飛びちがへ切り
 ひらき、弓手に薙り馬手に受け、怯まず去らず戦へば、さしもの大勢たまり兼ね、逃けるをやらじと
 追うて行く、跡にはあゝ山吹御前、「長追ひ爲やんな戻つても、此の隼人はどう仕やつた、ア、氣
 遣ひやあぶなや」と、あせる向うへ打ち合ひ切り合ひ切り結び、追つつまくつ驅け來る、番場を相
 手に鎌田隼人、忠義に互えたる切先刃先、受けつ流しつ上段下段、秘術を盡し戦ひしが、忠太がいら
 つて打つ刀、受けはづして弓手の肩先、袈裟にすつばと切り下けられ、心は鬼神とはやれども、腕も
 弱り目も眩み、足を立て兼ねたぢく、よろ／＼とよろめく所を、附け入り附け込みた、み
 かけ、留めの刀一割り、はつと驚く山吹御前、逃しも立てず向うへ突つ立ち、「サア女、其の倅渡せ渡
 せ。」「ヤア何者なれば此の狼藉、様子が聞きたい合點がいかぬ。」「オ、様子は其方に覚え有る筈、朝

敵謀叛の義仲が倅、敵の末は根を断つて葉を枯らす。「ハア是非もなや、此の子一人助けたとて、さ
 まで仇にも害にも成るまじ、生きとし生ける物ごとに、物の哀れはしる者ぞ、取りわけ武士は情をし
 る、自らは冤もかくも、此の子が命を助けたい、慈悲ぢや功德ぢや後生ぢや」と、涙と共に詫びたま
 ふ。「ヤア甘ちこい成らぬ、當歳子でも男のがき、生け置いては後日の仇、くりごと言はずとサア
 渡せ」と、飛び蒐つて引取れば、わつと泣く子を放さじと、取り付き給ふを振り放し、突き飛ばせば
 又縫り付く、反ねのくれば武者振付き、やらぬ／＼と泣き給ふ。「ヤア面倒な女め」と、鬮擲んで投
 げ付くれば、うんと許りに息たえ、其の隙に若君を、宙に提げ首はつしと打ち落とし、小脇に掻込
 み飛ぶが如くに驅けり行く。山吹御前は夢心地、むつくと起きて、「ハア悲しや、西も東も辨へぬ此の
 子に科はなき物を、慘や辛や胴慾や、かへせ戻せ。」の聲も遙かにお筆が聞き付け、息を切つて立ち歸
 り、はつと驚きだき抱へ、「コレお心は慥かなか、若君様は何處にござる、様子を仰しやれ、サア如何
 ぢや如何ぢや。」とせき切つて、問へば答へも苦しげに、「ホ、お筆が遅かつた、情なや唯今、追手の者
 が爰へ來て、隼人も討たれ、駒若も殺された、ソレ首切つて逃げたわいの。」「エ、。」と仰天狂氣の如
 く、呆れて詞も出でばこそ、胸も張り裂く悲しさの、涙はらく立つたり居たり、身を跳き齒を噛み
 しめ、「エ、口惜しや今一足早くばなあ、女でこそ有れやみ／＼と討たしはせまいに、シテ其の切つた

奴はどつちへ逃けた、顔見知つてござりますか。ア、此の暗さでは夫れも知れまい、名はお聞きなされぬか。「イヤ、顔も名もしらねど、梶原が所爲で有らう、可愛やわつとたつた一聲、泣いたが此の世の暇乞、父御といひ子といひ、刃に掛りはかなき最期、剩へ是れまで付き添ひ、忠義を盡す隼人まで、爰で死ねとの約束か、こはそも如何なる前生の、報いか罪か浅ましや。」と、御身も絶ゆる叫び泣き、お筆も有るにあらぬ思ひ、「父の最期はお主へ忠義、悔む心はなけれども、おいとしや駒若様、今日の今まで愛らしう私を廻し、片時離さず抱かれて、泣いつ笑うつ可愛氣な、お顔を矢張見る様な。」と、口説き立て、聲も惜しまず歎きしが、涙の中に心付き、「せめて一目若君の、お死骸なりとも見ん物。」と、四邊見廻し尋ぬる心も空も闇、怪しや血にそむ稚き骸、手に觸るを搔抱き、涙と共に撫で廻し、「ハア、此の著物は如何やら手觸りも違ふ、そして何やらびらくと、こんな物は召さぬ筈、合點がいかぬ。」と能くくすかし見、「ヤア是れは違うた、申し、こりや若君ではござんせぬ。」「ヤア何と言やる、駒若でないとは。」「ハテ此の死骸は笈摺かけて居るわいな。」「どれ、ほんに變つた、こりや如何ぢや、是れはく。」と二度悔り、「ム、扱は今の騒動に相宿の子と、駒若と取り違へたかハア悲しや。」「ア、これく、そりや何仰しやる、悲しい事はござんせぬ、コレ取り違へたのでな、若君のお命に氣遣ひない、是れ則ち天の恵み、御運の強さ、アッア嬉しやく有りがた

や、コレ御悦びなされませ、コレ申し、是れはしたり、何故物を仰有らぬ、ハア、又眩暈が来たさうな、これはく、エ、お氣の弱い、腑甲斐ない事では有るぞ、これく申し。」と、言へども弱る身の上に、悲しさ辛き氣を揉み上げ、又嬉しさにがつくりと、引き取る息も敢なき最期、お筆はあわてうろくきよろく、「こりや何とせう如何せう。」と、脈取つて見つ耳に口、「これく申し山吹様なう。」と言ふ聲さへ人を憚り、「思ひ切つて呼ばれぬか、エ、情ないエ、鈍な。」と、心は千々に碎けども、早色變り手足は氷と冷え切つて、押し動かせど其の甲斐も、涙先立つ魂も、共に消え入る憂き思ひ、大地にかつばと伏し轉び、聲の限りを泣き盡す、理とこそ聞えけれ。稍有つて顔を上げ、「ハア、左様ぢやく返らぬ事、悔むまじ歎くまじ、一先づ此の場を立ち退きて、妹千鳥と心を合はせ、お主の仇父の敵、逃げ隠る、とも天地の間、命限り根限り、やはか助けて置くべきか。」と驅け出でしが、「イヤ、く、夫れより大事のく若君、片時も早う取り返さう、ア、否待て暫し、死骸を此の儘捨て置かれず、無縁の此の子、父の體諸共に、隠さんとは思へども、前後に満ちたる多勢の追手、隙どらば却つて妨げ、せめてお主の面影を、先づく彼處へ葬らん。」と、邊に繁る竹切つて、明昇き上げ乗する笹の葉は、亡き魂おくる輿車、轆も細き千尋の竹、肩に打掛け引く足も、しどろもどろに定めなき、淵瀬と變る世の憂きを、身一つに降る涙の雨の、小止みもやらで道野邊の、草葉も浸す

袖袂、泣く／＼、辿り、三重行く空の、難波瀉蘆火焚く家の片廂、家居には似ぬ里の名や、福島ふくしまの地は押
 竝べて、世をうみ渡る舟長の、有るが中にも権四郎ごんしろうとて、年も六つを十返りの、松右衛門まつえもんといふ通り
 名は、養ひ婿に譲りやる、門に目あての松一木、所に蔓る親仁有り。志す日に邊近所の婆喚達、お
 茶参れとて招かれて、「ナウ権四郎様、今日は、志の日ぢや、お茶飲めと、お芳様の直にお使から伴ひ
 忝い、誘ひ合はせて参つた。」と、どや／＼内に入りければ、「能うこそ／＼、今日は娘が前の連合、
 此の榎松つちまめが本の父が、三年の祥月命日に當つた故、澀い茶を焚きました、飲んでゆつくりして下さ
 れ、常なら箸でもとらせませす筈なれど、知つての通り足弱な、娘や孫を引連れて順禮の長道中、物入
 の跡何にも爲ませぬ、とはいへ娘何ぞ無いか。」何ぞと申したら人手はなし此の子はせがむ、ほんの
 心許りをば上つて御廻向頼みます。」と、霞交りの煎豆に、花香持たせて汲み出せば、「もう三年になり
 ますか、ア、月日の關守するざればぢやの、今の松右衛門殿はござつて聞もなく、しみ／＼と付合は
 ねば心入はしらぬが、死なしやつた此の榎松の爺御は、丁度此の人參の太煮の様に、毒にならぬ人で
 有つたに、いとしゃ／＼南無阿彌陀、皆廻向してお茶まるりませ、鹿尾菜のお和物此の蒲公英、扱も
 旨し。」と舌鼓、茶請けに話囃み交せて、仇口々の喧しさ、皆船頭の女房とて、乗合舟の如くなり、「ヤ
 アよい序ぢや権四郎様、お尋ね申すことが有る、別のことではない此のわるさ殿、連れて順禮なさる

るまでは、色黒に肥え太りて、年より丈も大柄に病氣なうて、眞の赤松走らかした様に、門を家と遊
 びやるを見ては、あやかり者ぢやと羨んだ子が、何として又此の様に、色白に瘦せこけて、思ひなし
 か顔のすまひも變つて、背も低く弱々と、外へとては一寸出でず、あれが順禮の奇特か、観音様の御
 利生かと、打寄つては是れ沙汰、めんよな事や。」と尋ねれば、「されば其の事、ありや前の榎松ぢやご
 さらぬ、違つた／＼、違つた譯思ひ出すも、なう恐ろしや聞いて下され、娘よ何日の夜やらで有つた
 な。」ハテ二十八日の。「オ、夫れ／＼又跡の月の二十八日、三井寺の札を納めて、大津の八丁に泊
 る夜、何かは知らず御上意ぢや、捕つた／＼と大勢の、侍がコレ見さしやれ、話するさへ身が顫ひ
 ます、ほんの世話に言ふ狼狽へては子は逆様、如何負うたやら娘が手を引いたやら、走つたやら飛ん
 だやら、漸う毒蛇の口を遁れ、逃けて行く先は又狼谷、谷の水音松吹く風も、跡から追手の來る様
 に思はれ、扱も命は有る物かな、眞黒の夜に四里足らずの山道を、息一つ吐かばこそ、水一口飲まば
 こそ、命から／＼伏見へ出て、初めて背に負うた子の、顔見れば南無三寶、相宿の襖越し、宵に話も
 した和郎が、連れられた子と取り違へたに極まつた、大儀ながら一走り往て、元々へとり換へて来てくれ
 と娘はせがむ、オ、尤も、とり戻して來うと思ふ程先の怖さ、いかな／＼一足も、行かれるこつちや
 ない、今には限らぬ、とり返す折が有らう、先の和郎も子を取り違へ、人の子ぢやとてどろ／＼へろく

にはして置かぬ筈、此の子さへ大事に育てて置いたら、三十三所の觀世音のお力、枯れたる木に花さへ咲くぢやないか、一先づ内へ戻つて、潰した肝を癒してからの上の事と、晝舟に飛乗つて戻る中、乳飲まうと泣く、持合はせたを幸ひに、娘が乳飲ませたら、夫れなりに月日も経ち、名も知らねば呼び付けた、榎松々々と言や我が名と心得、祖父よくと馴れ馴染むいたくしき、いまでは眞の榎松も同然に、可愛のござる。」といふ聲も、咽につまらす老心、娘も共に涙ぐみ、「時の災難とは言ひながら、縁有ればこそ此の子が手鹽にかゝり、他人がましようもする事か、母様々々と此の乳を、飲みもすりや飲ましもすれ、馴染めば我が子も同じ事、此の子憎いでは夢いさゝかなけれども、今日の亡者の手前も有る、成らう事なら手つとり早う、もとくへとり戻したうござんす。」と、語るを聞いて婆鼻達、「夫れで疑ひ今晴れた、大願立てての西國廻り、現世未來の觀音様の引合はせ、あつちから榎松を連れて、やがて尋ねて見えますよぞいなう、必ずきなく思はぬがよい。サア皆の衆、あんまりお茶飲んで、結局お腹も晝下り、いざござれお暇。」と、打連れ出づる門の口、權の先に笠かつ付け、打ちかたけたち歸る、堀の松右衛門、「ホこりや皆お歸りか、今日は前の堀殿の三年忌、内に居て共々御馳走申す筈を、遁れぬ川事で罷り出で、近頃の亭主振、まそつと緩りとはなされいで。」「まそつとの段かいの、ゆるり罐子の底た、いて歸ります、餘り茶には福が有る、飲んでお休みなされや。」と、住

家住家にたち歸る。「ハア親父様今かへりました、茶事の間に合はう笠の下でも焚かうと、氣がせいでも相手はせかぬ大名のゆつたり、遅なはつた嘸お草臥、女房共大儀で有つたの。」「何の大儀な事はない、お前こそ嘸おひもじかる、坊よ、父様お歸りなされたかと、何故お傍へ行きやらぬ、どりや飯上げう。」と立ち上る。「コレく女房、まだ欲しいない、望みな時に此方から言はう、扱申し親父様、大名の中に梶原殿は、取分けの念者と申すが違ひはない、お召しによつて船頭松右衛門參上と奥へ言つて行き、や、暫くして、御家老の彼の番場忠太殿がお出でなされ、先達さし上げた逆櫓の事書、一つ一つ尋ねる程にける程に、問ひ殺した其の上で、「其の通り申し上げよ、暫く待て。」能う暫くで有らうぞ、な、の三時待たせて置いて、「殿が直にお逢ひなさる、是れへお出でなさる。」と、其の重々しさ、物言ひの堅苦しさ、「船頭松右衛門とは汝よな、智謀軍術逞しき義經へ、此の景時が能く存せしといふ逆櫓の大事、疎かに聞き受けがたし、汝舟に逆櫓を立てての軍、調練したる事や有る、それ聞かん。」と問ひかけられ、此の度親父様に習うて、逆櫓といふ事初めて知つた此の松右衛門、返答に困るまいか難儀せまいか、ほつとせしが分別致し、「御意ではござれども、賣船の船頭風情、軍といふ物は夢に見た事もござらぬ、逆櫓の事は我等が家に傳へ、能う存じて罷り有ります。」などと申して、間に合はせを言うたれば、「ム、さも有りなん、然らば汝覺え有る船頭を語らひ、今宵密かに逆櫓を立

て、舟の掛引手練して、其の上には知らせよ、事成就せば御大將の召舟の船頭は汝たるべし、御褒美は此の梶原が取持ち、永く船頭の司として、莫大の財寶を下さりよ。」と有る直のお詞、其の嬉しさに初めの術なき忘れ、あたふたと歸りがけ、日吉丸の船頭の又六、灘吉の九郎作、明神丸の富藏、此等は梶原様のお舟の船頭、幸ひ三人を相手にして、日暮から逆櫓稽古に此の方へ参る筈、御教へなされた手際を見せ付け、立身出世は唯今、是れとまうすも御指南のお蔭、忝い。坊主よ悦べ、結構な衣服させて玩弄びに飽かせうぞ、女房共親父様悦んで下され。」と、語る壻より聞く嬉しさ。「イヤサ不器用な奴は、千年萬年教へても埒や明かぬ、まんざら素人のわり様が、入壻にわせられて、一年も立つや立たず、天下様の弟御の召さる、御船の、船頭する様に成るといふは、おれが教へた許りぢやない、其身の器用がする事でおぢやりますよ。目出たい、壻殿の草臥やすめ、娘十二文持つて走らぬかい。」「イヤ、御酒も歸りがけに九郎作が所で下された、一生覚えぬ大名の付合、膝はめりつく氣骨は折れる、播磨灘で南風に逢うた様な目にあうて頭痛まじり、草臥れたといふ段ではない、暮までは未だ間も有らう、親父様御許さります。とろくと一寐入。およしコレ見や、坊主めが居眠るは、幸ひ父が添乳せん、ねんころころ。」と搔抱き、納戸の内にぞ入りにける。「娘裾に何でも置いたか、出世する大事の體風ひかすな、祝うて舟玉様へ燈明も點せ、御神酒上げたい買うてくれぬかい。」

「買ふまでもない、是れをお供へなされませ。」と、棚から下す難波焼、ちろりと用意が有つたなど、老いの洒落言輕口も、神慮は重き一對の、徳利に餘る親心、妻は火燈の石の火に、夫の威光輝けと、油煙も細き燈明に、心をてらす正直の、神や光を添へぬらん。妻戀ふ鹿の果てならで、難儀硯の海山と、苦勞する墨憂き事を、數書くお筆が身の行方、何時まではてし難波瀉、福島に来て事問へば、門に印のそんじよ其處と、松を目充に尋ね寄り、「ハア御免なりましたよ、松右衛門様は此方か、お名を知邊に遙々尋ね参つた者、お逢ひなされて下さつたら、忝うござんしよ。」と、物腰のしとやかさ、「アア父様、松右衛門殿に逢ひたいと女が来た、碌な事では有るまい。」と、跡先知らで女氣の、早愒氣する詞の端、「興がる、嗜め、松右衛門に逢うて姉ぢやというても愒氣するか、夫れ程氣遣ひなら呼込んで、逢はせぬ先に聞いたがよい。何方ぢや女中、何處からござつた、松右衛門内に居りまする、遠慮せずと入らしやれ。」「夫れはまあくお嬉しや。」と、笠解き捨てて内に入り、「お前が松右衛門様か、お近付でなければ、お顔見知らう様はなけれど。」「なけれどなりやなせござつた。」「サア申し何が知邊にならうやら、攝州福島松右衛門子、榎松と書いた笈摺が縁に成つて。」「ヤアそんなら此方は大津の八丁で、又跡の月二十八日の夜の。」「アイお子様を取違へた者でござんす。」「道理で見た様な顔ぢやと思つた事、是れは夢か現かい、なうお芳悦べ、榎松を取違へた人ぢやとやい、此方からも行

方尋ねて、元々へとり戻す筈なれども、何を證據に尋ねて行かう手掛りもなく、泣いて許り居りました、其の代りには、取違へた其方の子供衆、菟の毛で突いた程も怪我させず、蟲腹一度痛ませず、娘が乳が澤山な故、喰物はあしらひ許り、乳一度餘させず、オ、夫れよ、風一度引かさばこそ、親子が大事にかけたに付いても、此方の息子めも、嘸御厄介御世話で有らう、能う連れて来て下さつた、忝い忝い。わるさよ、我が内を忘れたか、何故入らぬ。」「イヤ門にはござんせぬ。」「エ、連れの衆が跡から連れてお出でなさるゝか、嘸御厄介 忝いゝ、ハテ早う逢ひたいな、娘お禮を申しやいの。」
 「ア、父様忙しい、此のお禮がちやつきりちやつと、つい言うて済む事かいな、申し此の榎松はなぜ遅い、お連れの衆が門違へはなされぬか、此の榎松はなぜ遅い。」我が子は如何に、孫は如何にと、立ち替り入り替り、門を覗いづ禮言ひつ、そゝろに悦ぶ親子の風情、お筆が胸に燒鐵さす、今更何と返答も、泣くもなかれず差俯き、暫く詞もなかりしが、「お願ひ申さねば叶はぬ譯有つて、恥を包み面目を凌いで尋ね参りしが、左様お悦びなされては、氣が後れて物が申されぬ、マア下に居てくださんせ。」と、涙ながらに押し鎖め、「改めて申すも無味なき其の夜の騒ぎ、手捷う逃げ隠れなされた、お前方は順禮の功德、此方は一人は病人なり、男とては有るに甲斐なき年寄、逃けるも隠れるも心に任せず、取違へた其のお子は、其の夜に敢なく成り給ふ。」と聞いて悔り、「とは何故に、とは如何に。」と、

餘りの事に泣きもせず、仰天すること道理なれ。一人の身の仇なりと、兼ては聞けど其の夜の悲しさ、能うも今日までは存へし、言譯ながらの物語、聞いて恨みを晴れてたべ、高うは言はれぬ事ながら、連れの女中と申すは私の御主人、騒ぎに取違へしとは思ひも寄らぬ、若君は猶大切と私がかき抱き、御病人の女中は親が手を引き、一度は旅籠屋の愛目は遁れ出でたれども、追懸くる武士の大勢、氣は焚喰と防いでも、何を言ふも老人の、言ひ甲斐なく討死し、若君は奪ひ取られ、氣も狂亂の様になつて、女中もほつたらかし、大事の若君取り返さんと驅け廻る、月なき夜半の葉隠れ、尋ね廻る笹垣の陰、サア爰にこそ若君は有れと、とり上げて見たれば、悲しやお首が最う無かつた、能く見れば若君でない、證據は此の笈摺、騒ぎの紛れにとり違へしな、扱は若君のお命に恙なかりけりと、一度は安堵せしが、代りを戻さねば取り返されぬ若君、もとゝへ取り戻す種になる、人の大事の子を殺し、何を代りに若君を取り戻さう、悲しい事を仕やつたと、それを苦に病み、主君の女中も、其の座で果なくなり給ひ、悲しみやら苦しみやら、私一人がせたらおうた身の因果、此の笈摺をしるべにて尋ね参りしは、お果てなされたお子の事は諦めて、此方の若君を戻して下さるゝ様の御願ひ、大事にかけてお世話なされたと、物語聞くに付け、面目ないやら悲しいやら、あぢきなき身の上を、思ひやつてたべ親子御様。」と、かつばと伏して泣きければ、祖父は聲こそ立たねども、涙を老いに嚙

み交せて、咽につまれば咽せ返り、身も浮く様に泣きければ、娘は心も亂る、許り、空しき笈摺手に取つて、「やれ榎松よ母なるは、昨夜の夢にまざくと、前の父様に抱かれて、天王寺参り仕やると見たは、日こそ多けれ、父御の三年の祥月なり、命日の今日の日、便り聞く告げでこそ有りつらん、夫れとは知らぬ凡夫の浅ましき、今日は連れて来るか、明日は戻りやるかと、待つて許り居た物を、大きな災難にあうて、笈摺に書いた詮もない、是れが何の二世安樂、順禮も充にはならぬ、観音様も腑甲斐ない、恨めしや懐かしや、哀れ此の事が夢で有つてくれかし。」と、顔に當て抱き締めて、聲をはかりに身悶えし、前後不覺に泣きけるたる。「娘ほえまい、泣けば榎松が戻るか、よまひ言いや、二度坊主めに逢はれるか、兼て愚癡なと祖父が叱るを如何聞いて。」と、言ふ詞に縋り付き、「夫れく斯う申す、私も女子ぢやが、愚癡では濟まぬ、祖父様の仰しやる通り、如何程お歎きなされたとて、榎松様のお歸りなされるといふではなし、再び逢はる、といふではなし、さつぱりと思召し諦めて、此方の若君をお戻しなさつて下さつたら、ア、有り難い、忝いと、悦ぶ私が心が何處へ往かう、榎松様の未來の爲には、佛千體寺千軒、千部萬部の經陀羅尼、千僧萬僧の供養なされたより。」女子黙れ、何の頬の皮でがやく、願叩く、恥を知れやい、我が子を我が育つるには、少々の怪我させても、不調法が有つても、親丈で濟めども、人の子にはな、義理も有り情も有る、主君の若君のとおいやるか

らは、夫れ知らぬまんざらの賤しい人でもなささうな、此のおれは親代々舵柄を取つて、其の日暮しの身なれども、お天道様が正直、大事にかけて置いた其方の子見せうか、いや見せまい、見やつたら目玉がでんぐりかへらうぞ、人の子をいたはるは、此方の子をいたはつて貰ふかはり、大抵大事にかけたと思ふかい、コリヤそんなら又なぜ尋ねて来ぬと、減らず口ぬかさうが、尋ねて往かうにも、何知るべの手が、りはなし、其方には笈摺に所書が有る、今日は連れて来てとり換へるか、明日は連れて来て下さるか、逢つたら何と禮いはうと、明けても暮れても待つて許り、コレ此の襖を見をれ、かはいや榎松が下向に買ふというたを聞き分けず、無理に買うて、三井寺三界持つて歩いて嬉しがつた、鬼の念佛に餓鬼けほう殿の頭へ、梯子さいて月代剃る大津繪、藤の花のおやまも買ひをらず、けほう殿の繪を買つたは、あの様に髭の白髪になるまで、長生しをる瑞相、鬼の様に達者で金持つて、世界の人を餓鬼の様に這ひ屈ましをらう吉左右ぢや、目出度い、戻りをつて見をつたら、嘸悦ばうと張つて置いて待つたに、思へば梯子はけほう天窓の下り坂、鬼の傍に這ひつくばふ餓鬼になつて、お念佛で助かる様になりをつたか、思へば思ひ廻す程、身も世もあらぬ、能う大それた目にあはせたな、ア、夫れに何ぢや、思ひ諦めて若君を戻して下され、町人でこそ有れ、孫が敵、首にして戻さうぞ。」と、突つ立ち上る。「なう悲しや。」と、取付くお筆を押し退け反ね退け、納戸の障子さつと明くれ

ば、這は如何に松右衛門、若君を小脇にかい込み、刀ほつ込み力士立ち。お筆驚き、「ヤア此方様は彼の樋口の。」「コリヤ、ウム聞えた、最前歸りがけ、下の樋の口で、ちらと見た女中よな、若君は身が手に入つて氣遣ひなし、言うてよければ身が名乗る、ノ合點か、必ず樋の口を、樋口などと魚相言ふまいぞ。」と、目配で知らせば打點頭き、靜まる女聽かぬ祖父、「松右衛門出來したりな、先刻にからのもやくや、寢られはせまい聞いたで有らう、其方が爲にも子の敵、其の子骸寸斷々々に切り刻んで女に渡せ。」「イヤ左様は致すまい。」「何故致すまい。」「サア夫れは。」「サア夫れとは、エ水臭い、言はいでも知れた、汝が胤を分けぬ榊松が、敵ぢやによつて致さぬな、其の根性では祖父が儘にもさしやせまい、最う破れかぶれぢや、俺が言ふ様にせぬからは、親でも子でもない、娘其處ら驅け廻つて、若い者大勢呼んで來い。」と氣をせいたり。「ヤレ待て女房、人を集むるまでもなし、親父様如何有つても、榊松が敵、此の子を存分になさるゝか。」「くどい。」「ハア是非もなし、此の上は我が名も語り仔細を明した上の事。」と、若君をお筆に抱かせ、上座に直し、「權四郎頭が高い、天地轟く鳴る雷のごとく、お姿は見すとも、定めて音にも聞きつらん、是れこそ朝日將軍義仲公の御公達駒若君、斯く申す我は樋口次郎兼光よ。」と言ふに、親子は荒肝とられ、呆れ果てたる許りなり。樋口お筆に打向ひ、「扱々女のかひくしく、跡々まで御先途を見届くる神妙さ、山吹御前も思ひ寄り

ぬ御最期、御身が父の隼人も敢なく討死したりとな、力落し思ひやる、夫れに付けてもかくて有る、樋口が身の上不審、若君の爲には祖伯父ながら、多田藏人行家といふ、無道人を誅伐せよとの御意を受け、河内國へ出陣の跡、鎌倉勢を引受け、粟津の一戦、誤りなき御身をやみく／＼と、御生害遂け給ひし我が君の、御最期の鬱憤直に驅け入り、一軍とは存せしかど、思へば重き主君の仇、術を以て範頼義經を討ちとり、亡君に手向け奉らんと、此の家に入増し、逆鱗を言ひ立て、早梶原に近付き義經が乗船の船頭は松右衛門と事極まる、追付本意を遂ぐる様になるに付け、此の若君の御在所は何國、如何ならせ給ふと心苦しき折も折、最前よりの物語、障子越しに聞くに付け、見れば見る程面裏れ給へども、紛ひもなき駒若君、扱は思ひ設けず願はずして、所こそ有れ日こそ有れ、其の夜一つ所に泊り合はせ、取換へられて助かり給ふ若君は御運強く、殺されし榊松は、樋口が假の子と呼ばれ、御身代りに立つたるは、二心なき某が忠臣の存念、天の冥慮に相叶ひ、血を分けぬ子が子となつて、忠義を立てし其の嬉しさ、何に類の有るべきぞ、是れも誰が蔭親父様、子ならぬ我を子となされ、親ならぬ我を親とする榊松、恩も有り義理も有る、餘所外の子ととり違へての敵ならば、其處に御堪忍なされうが、女房がよしにと申すとも、其の敵安穩に置くべきか、親父様の御歎き、我も不便さは身に迫れども、相人に取られぬ主君の若君、弓矢取る身の上には、願うてもなき御身代り、祖父親の名

ほりと先づやりませうぞや。」「オ、とも斯くも。」と、皆川岸に下り立つて、繋ける手船の渡海作り、纜解き捨て飛び乗り、「ナウ松右殿、舟で妻子を養ひながら、恥かしいが終に逆船と言ふ事は。」
 「オ、知らぬ筈、何事も己次第をしへてやる、サア九郎作と又六は、面舵取舵の艦船を立てた、富藏是れへお出でなされ、おれが爲る様に艦を立てた、コレ皆の衆、此の様に舳から艦へ向けて艦を立てる、是れを逆船といふわいなう、總じて陸の戦ひは、敵も味方も馬上の働き、驅けんと思へば驅け、退かんと思へば退く事も、自由氣に見ゆれども、舟といふ物は又格別、知つての通り汐に連れ、風に誘はれ、船拍子立てて押す時は、行く事も早けれど、乗り戻さんと思ふ時は、おも舵取舵の風波を考へ、取舵柄の手中、舟をくるりと本の如く、押し廻して漕ぎ戻す、夫れさへ満す汐退く汐にもちかうて、舟に過ち有る時は、八萬奈落の憂目を見、いと可愛妻子に、再び逢はれぬぢやないか。」
 「いかにも左様ぢや。」「其の憂目を見まい爲の此の逆船、サア其の艦の艦を押しした。」「おつ。」と心得、やッしッし、し、やッしッし三段許り漕ぎ出す、「サア斯う舟を漕ぎ寄せて、追ひつ捲つつ戦ふ時、謀に乗せらるゝか、敵に新手が加はるか、スハ負軍と見る時は、舟押し廻すまでもなく、コレ此の逆船押立てて、富藏合點か。」「合點ぢや。」「やッしッし、し、やッし、元の所へ漕ぎ戻す。隙を窺ひ富藏九郎作、擢押取り、松右衛門が諸膝難いで打ち倒さんと、右左よりはつしと打つ。心得た

りと踊り越え、陸へひらりと飛び上れば、三人續いて驅け上り、「ヤア卑怯なり松右衛門、汝木曾が郎等樋口次郎兼光といふ事、梶原殿能く御存知なされ、逆船の稽古に事寄せて、擗め捕り連れ來れと我に仰せつけられた、尋常に腕廻すか、打ちのめして繩かけうか、腕を廻せ。」と嘗つたり。樋口からからと打笑ひ、「推量に違はぬ上は何をか包まん、朝日將軍義仲の御内において、四天王の隨一と呼ばれたる樋口次郎兼光、汝等風情が擗め捕らんとは、眞物付けたる一番碇、蟻の引くに異ならず、ならば手柄に擗めて見よ。」「ヤアしやらくさい廣言跡で言へ。」と、擢振り上げ、なぐり立つるを事ともせず、搔潜つて引奪り、先に進みし富藏が、頭微塵に打碎けば、「一人では叶はぬぞ、二人蒐つて手に餘らば、打殺せ。」と立別れ、はつしと打つ。さしつたりと開く身に、擢と擢とは相打に、互の眉間あいたしこ、躊躇ふ隙につつと入り、擢引奪つて捨てたりける。組んで捕らんと無理無三、とり付く二人を引寄せ、力に任せえいんと、踏み碎く天窓の皿、微塵に碎け死してけり。「サア安からぬ若君の一大事、何とせん、我が身を如何に。」と躊躇ふ胸に、ひつしと響く鐘太鼓、數百人の喚く聲、「這は如何に。」と、驚く中に心付き、屈竟の物見櫓ごさんなれと、驅け上る門の松、顔にべつたり蜘蛛の巣や、松葉の針であいたしこ、目ごす許りに暗からぬ、茂る梢の朧月、四方をきつと見渡せば、北は海老江長柄の地、東は川崎天満村、南は津村三つの濱、西は源氏の陣所々々、人ならぬ所もなく、天

の焦せる篝の光、扱は樋口を洩らすまじ、取逃さじとの手配りよな、さも有れ如何にと飛んで下り、
 「女房共親父様々々々」と呼び立つる。「イエ父様は納戸の壁を毀つて、何方へやら行かしたやんした。」
 「ヤア壁毀つてうせたとは、ムウ讀めた、訴人にうせたな、財寶をむさほつて訴人する、兼ての氣質
 ではなければども、樋松が仇を忘れ兼ね、夫れでうせたか、ハア樋口程の武士が、舟玉の誓言に氣を奪
 はれ心を緩し、飼犬に手をくはれた、エ、口惜しや無念や」と、拳を握り齒を鳴らし、しをれぬ眼に
 泣く涙、磨き立てたる鏡の面、水を灑ぐが如くなり。「お腹立は、理ながら、父様に限つてよもや左様
 では有るまい。」と、言ひ宥むる折こそ有れ、組の捕手の腰明、武威輝かす高提灯、畠山、莊司重忠、
 権四郎に案内させて見えければ、娘は夫れと見、「コレ父様恨めしい。」と、言はせもあへず、「訴人の恨
 みか言ふなく、おれが訴人せいで松右衛門を樋口次郎とは、梶原殿が能く御存知なされて、富藏
 や九郎作に、搦め捕らさうとなされたぢやないか、夫れ許りぢやない四方八方とり圍んで、樋口が命
 は籠の鳥、何ほ助けうと思つても助からぬ、おれが秩父様へ訴人したは、樋松めが事で。」「サア其の
 樋松の事を言うて、松右衛門殿が腹立てて。」「何の腹立てる事が有る、親子といふ名に繋がれて、孫
 めが親と一緒に、彼方者になりをらうかと悲しさに、あれば樋口が子ではござりませぬ、死んだ前の
 入婿の、ナ松右衛門が子で、ナ合點がいたか、ほんの親子でござらぬからは、訴人致したかはり、孫

めが命をお助けなされ下されと願うたれば、段々聞召し分けられ、天下晴れて孫めが命は、オ、慮外
 ながら此の祖父が助けた、夫れに何ぢや、樋口が腹立てた、ヤイ汝が子でもない、主君でもない、若
 君でもない、大事の、おれが孫と一緒に殺して、侍が立つか、若い其の大きな眼にも、祖父が碎
 く心の数々は見えまいぞ、恨めしいと吐す汝等が、けつく祖父は恨めしい。」と、氣を急き上げて曇り
 聲、能う訴人なされた、有り難しとも過分とも、言はぬ詞は言ふ百倍、嬉し涙にくれけるが、すつと
 立つて重忠の傍近く、「天晴御邊が梶原ならば、太刀の目釘の續かん程、切死に死なんすれども、粟津
 の軍、妹、巴が身の上まで、志、有りしと聞く重忠殿、情に刃向ふ刃はなし、腹十文字に搔切つて、
 首を御邊に參らす。」と、言はせも果てず、「ヤア樋口、死首を取つて手柄にする重忠ならず、とても叶
 はぬと覺悟あらば、尋常に繩蒐られよ。」「いや、運盡きて腹切るは勇士の習ひ、繩蒐れとは此
 の樋口に、生恥かかせん結構な、仁義有る重忠の詞とも覺えず。」「イヤこれ樋口、木曾殿の御内に、
 四天王の随一と呼ばれ、亡君の仇を報はん爲、権四郎が婿となつて、弓矢に勝る船權を取つて、大將
 の舟を覆し、鑿しにせんす、謀、恐ろしし頼もしし、晋の豫讓は、主の智伯が仇を報ぜん、御
 邊が如く姿を扮し、敵、襄子を狙ふ其の志を深く感じ、著たる所の衣服を脱いで豫讓に與へ、其の
 衣を切らせて彼が忠義を立てさせしは、敵ながらも襄子が情、木曾殿叛逆ならざる事は、書置に顯は

れ、御最期今更悔むに甲斐なし、主人に科なき樋口次郎、全く恥を與ふるにあらす、忠義武勇を惜し
 み給ふ、大將義經の心を察し、重忠が繩かくる。」と、突つと寄つて、樋口が肘捻ち上ぐれば、莞爾と
 笑ひ、「關八州に隠れなき勇力の重忠殿、力づくには劣らぬ樋口、取られし此の腕、もぎ放すは易けれ
 ど、智仁兼備の力には及びもない事、相手になられず、兎も角も計らはられよ。」と、弓手の腕を押し
 廻せば、「ヤア愚か、忠義厚き樋口殿の力に重忠が及ばんや、大手の大將範頼公、搦手の大將義經
 公、兩大將の御仁政、文武二つの力を以て縛むる此の繩ぞ。」と、かくるも掛るも勇者と勇者、仁義
 に搦む高手小手、繩付を引立てさせ、「コリヤ女、樋口殿の血こそ分けね、樋松とやらんは大切な子で
 ないか、暇乞を。」と有りければ、お芳は泣く、納戸に臥したる子を抱き上げ、「コレなう暫し假初
 も、親子と言ひし此の世の別れ、コレ顔見せて。」と差寄れば、「ハッア樋松に暇乞ひとは、四相を悟る
 重忠の御情、祖父の願ひを聞き分け給ひ、助けおかる、忝さ、誰彼の情も忘れぬ。コレ樋松、父と
 言はずに暇乞ひ。」樋口々々、樋口さらば。」と稚子の、誰教へねと呼子鳥、我は名残も鴛鴦の番離る
 る憂き思ひ、やらんくと縋り付く。「娘よ泣えな、何ほやらんくと、商賣の舟唄で、留めても留ら
 ぬ、ア、悲しや、假へ死んでも地獄へはやらん、極樂へやる救世の舟唄、思ひ切つて遣つて退けう。」
 唄汐の満干に此の子が出来たと、孫が身の上案じるな、祖父が預りのんえい、汝が代りに大事

に育てて、えいよほん、ほんほ、眞に何たる因果ぞと、正體もなくどうど伏し、涙に咽ぶ腰折松、
 餘所の千年は知らねども、我が身に辛き有爲無常、老いはとまり若きは逝く、世は倒の逆船の松
 と、朽ちぬ其の名を福島に、枝葉を今は残しける。

第四

山遠うして、雲旅人の跡を埋む、こも名にあふ香島の里、西國の往還とて、賤が家居も賑へり。
 今日天道大日如來、未申の年は御一代の守本尊と、錫杖振り立て家々に、立つ辻法印、謹上さん
 ぐ、再拜さいへいと敬つて白す。伊勢に神明天照皇大神宮と申し奉るは、御本地は大日如來、御眞
 言にはおんあびりた、ていぜいから斯くの如く唱へ奉れば、「オ、手の隙がない、通らしやれ、山伏
 の内へ齋料乞ふは山伏の友喰ひ。」と、言ひつ、女房表に出で、「コレ嗜ましやれ此方の人。」「是れは
 叔、うか、來たればつい内ぢや、ぎえん直しに錫杖を振り立て、今日の天道大日如來も聞えま
 せぬ、餘り今日は儲けがなさに、願は未申の年、一代守るは大きな謔、分限菩薩とくだいせしの金
 持許りを守つて、我等が内には不動様の火焰の様な火が降り、福一萬とは名許り、下用櫃には虚空藏
 菩薩、米が無いとせがまれ、天窗の皿は八幡ほうざう、破鍋に閉蓋の女夫が口を過ぎ兼ね、何と千手

観世音、文殊菩薩の智慧かつて、少と小錢を儲けねば、中々身代た、りんく、たゞるをなすなよこちの女房、敬つて白す。」と喋りける。「コレ法印殿、今日は儲けが有つたやら、徒口をきかしやるの、草臥休めに先端なとこまさう。」と、茶釜の下へ差燻べる、其の日の煙もかつくの、暮しを祈る術もなし、世に憂き事の多き中、お筆は若君駒若殿を樋口次郎が手に渡し、妹千鳥に廻り逢ひ、親の敵を規はんと、上福島より彼方此方と尋ね侘び、香島の里に著きにける。妹が身の上聞く爲には、幸ひの山伏殿ちと御免なりませと内に入り、「私は旅の者、占ひがお頼み申したい。」「オ、能うこそ。」と、女房仕事押遣り、薄くと一服間食せと、詞の鹽に差出せば、しかつべらしく法印「愚僧が占ひは祕傳の投算、或は失物走り人、夢合はせ、夢判じ、相場の高下、相性墨色、薪の雑書、釜の鳴り、犬の長鳴き、鶏の宵鳴き、鳥の行水、親父の夜歩き、息子の看經するまでも、奇妙な見通し、錢次第。」とぞ勧めける。「アイ私はたつた一人の兄弟を尋ぬる者、つい廻り逢ふ手掛りを卜つて下さりませ。」「フウ夫れは餘程むづかしいが、たんできに卜ひませう。」と、風呂敷より算木取り出し、「コレ信を取りませうぞ、ついべりがけする様に、投げた分ではいかぬぞや。」「成程々々、お前の様な見通しに、お目にかかるは仕合。」と、算木投げれば、「オ、よし、ナニ年は何歳ぢや。」「アイ十七八でもござりませうか。」「成程十七八と見える、此方の弟御ぢやの。」「いえ、妹。」「ム、成程算木の面に女と見え

る、何年程逢はしやれぬ。」「五六年も逢ひませぬ。」「成程五六年も逢はぬと見える、此方の尋ぬる心當は何所ぢや。」「アイ人の噂には神崎に勤め奉公。」「オ、勤めともく、コレ見やしやれ、占の面には籠の中の鳥の如しと有れば、郭の外へ一足にても踏みも習はぬと、古い書物に記した上は、勤め的身は籠の中の鳥、妹御は神崎に傾城奉公に疑ひない、何と嚴い見通しか。」「イエ、そりや私が口移しを仰有る許り、郭の中でも何處らに居ようと、方角さして下さりませ。」「ハテ滅相な、夫れが見える程ならば、山伏はしませぬ、相場事にかゝるわいの。ナア、左様ぢやないか、此の在外れを真直に行けば神崎、逗留して尋ねさつしやれ。」「ハア夫れなれば、是非も内儀に包錢、たとへのふしに陰陽師と、辻風防ぐ笠傾け、お筆は彼所へ急ぎ行く。」「ヤ女房共、此のお客は何所へぢや。」「イヤ何方への先の先も言はず今朝からお留守。」「コリヤ悪い病が付いたわい、錢なしの手てんがうちぢやの。」「ハテ鹿相言はしやんな、神崎のお傾城、梅が枝様は得意旦那、其のよしみで誰有らう、梶原様の御總領源太様をあづかり、米薪味噌鹽まで、梅が枝様から仕送り、お歴々の彼方が、そんな事何のいの。」「イヤさうでない、贅はしたし、ちやんは無し、悪氣の付くまいものでもない。」と、噂半ばへ立ち歸る、梶原源太景季、勘當の身の寄せ所、辻法印にかくまはれ、見る陰もなき素紙子一點、門口から笠取つて、「やれ、方々驅け歩き、存じの外草臥れた、法印嘸待つたで有らう。」「何の待ちましよ、急な事

で金がある、才覚頼むと、人に許り世話やかせ、何所にはひつてござました。」「されば、其の才覚に身も歩いた、急な用が出来て来て、梅が枝に逢はねばならぬと言うてから紙子の風體、此の形では如何も行かれぬ。」「ア、此の頃まで召しましたお小袖や羽織はえ。」「女房いふな、夫れは此の法印が頼まれて、七難即滅と曲けて仕廻うた、昇夫鴉婦に、紙花の借錢なしなされたわい、お前もいはれぬ贅張らずと、傾城買には紙子が常跡。」「イヤさうでない、今まで太夫が情にて、見ぐるしい尾も見せず、此の形ではいかれぬ、明日へとも延ばされぬ其の譯を聞いてたも、義經公には一の谷の平家を攻めんと、明日未明に御陣立、源太も此の度高名せでは、父に再び對面ならず、發足と定めしが、彼の産衣の鎧兜、梅が枝に預け置き、夫れが欲しさに右の譯、したが思案も有れば有る物、今朝より尼が崎、大物の浦を駆け廻り、大將義經公一の谷へ御出陣、京都より来る兵糧米、馬の飼料遅なはれば、米麥大豆の差別なく、今日中に香島の里、辻法印が方へ持参せよ、則ち武藏坊辨慶殿、御判居りし證文と引換へ、軍終らば、一倍増しで御返濟と、百姓共をたらせしが、辨慶様のお目に掛り、其の上で御用に立つと、追付爰へ皆來をる、爰が氣の毒、何とぞ急に辨慶を拵へすばなるまい、差詰頼むは頭役、法印辨慶になつてたも。」「ハレやくたいもない、辨慶は兵、愚僧は弱者、七尺豊かの大の法師と、五尺に足らぬちつくり法印、似ても似付かぬお赦しなされ。」「イヤ是れ足を爪立つれば、

四寸や五寸はくろめらる、其の上をまだ繼足して、高足駄で背はくろめる、辨慶が身の所作は、仁王の形でして居りや好い、あれく向うへ百姓共、隙取つては氣の毒。」と、嫌がる法印むりやりに、連れて一間へ入りにける。百姓共はどやくと、蒲簾藁引擔け、「何と太郎兵、彼のお山伏は是れかいの。」「オ、聞き及ぶ辻法印爰ぢや。」と内に入る。「お方様、この内に辨慶様がござるけな、大物の百姓共、お馬の飼料持つて來たと、御家來衆に言うて下され。」「成程々々、辨慶様もお待ち兼ね、どりや其の通り申し上げん。」と立つて行く。景季は法印を辨慶に拵へ立て、一間を立ち出で、「ア百姓共、約束違へず大儀々々、先程も言ひ聞かす通り、源氏の大將判官殿の、御用に立つは汝等が身の大慶、軍終らば一倍増しにて返さる、御判頂戴するは有り難いか。」「ハア有り難うはござれども、只證文より手形より、辨慶様にお目見致し、お直の詞下さる、が、御判よりも慥かな。」「そりや百姓等が願ひに任せ、只今是れへ。」と、反古張の明障子、さつと開き立ち出づる辻法印、歴状すくめの辨慶出立、肩から裾まで束の鬘斗の一枚形、白上に紺染の大衣著、女房がいつちよら帯引つしごいて蜻蛉結び、瘦せたる頬に鍋炭塗り、所斑の武藏坊、長刀代りの金剛杖、竹簀子を踏み轟かす木履の繼足、懐まじう見られんと、ふんばたかつたる其の有様、更に強うは見えざりける。源太は態と兩手をつき、「大物の百姓共、お目見。」と披露して、「こりやく汝等、只今下にお坐りなざる、其

處ら邊へ地ひゞきせう、心得て驚くな。「ハア、はつ。」と恐れ敬ひ、ためつすがめつ、見られて術なき辻法印、見物に出た心地なり。百姓共口々に「何と聞き及うだより、手先なども青しらせ、ひがいな生まれ付き、お背はきよいと高けれど、體に似合はぬ頭が小さい、振賣の飯蛸で、天窓に身の無い辨慶様、あれでも兵様かいの。」と、目引き袖引き咥けば「扱は旦那のお顔のやつれで、誠の辨慶様でないと思ふか、都から段々打續く戰場のお勞れ、殊に此の間はお風を召しておしつらひ、氣むづかしさに態と物もおつしやれぬ、ア、御病氣でなくば旦那の力が見せたいな、アレ見よ、あの右の肘に百人力、左の肘に百人力、夫れ程力持つ者が、辨慶様で有るまいか、あはれやれ米一粒借すまいというて見よ、お腹が立つと總身の力がぶつくと涌き出で、千人でも萬人でも、風に木の葉、鬼に煎餅、めり／＼ひしやり粉微塵。」と、強い揃へを言ひ立つれば、山伏も圖に乗つて、強う見せんと、拳を握り臂を張り、力めば額に黒汗流れ、腕白な手習子が、晝上り見る如くなり。百姓共は頭を下け、「其の様にお強い事を聞く上は、なう皆の衆、何と思はしやる。」「ハテ辨慶様に極まつた、とても事の念晴らしに、今のを問うて見さつしやれ。」「オ、夫れ／＼、私共が在所の物識の話に、辨慶様は書寫にごさつて、御紋はりんほうと聞きましたが見れば御紋は束炭斗、如何した事。」と問ひかけられ、源太もほうど行き詰り、「イヤ何者ぢやわい、僅かな兵糧米を其方達に無心仰有る風體、世

に連れてりんほうの御紋も、貧乏にかはつた。」と、眞顔になつて取りかくれば、「ア、お笑止や、何ほ力が強うても、錢銀には楯づかれぬ、内證聞いておいとしい。」と、藁番蒲簀米俵、めん／＼に持つて出で、「おらは白米一斗五升、大豆八升、麥、稗、小豆、濡手で粟の掴み取り、源太は硯引寄せ手取り早く證文認め、書判しつかと末の世に至りても、大物の浦にとゞまりし、武藏坊辨慶が、借證文とは是れとかや。源太は名宛に引きあはせ、一札渡せば受取つて、「畢竟是れには及ばねども、面々の念の爲、軍終らば一倍増しをお忘れなされて下さるな、御暇申す。」と打連れ立ち、川中ではがれた尼が崎、大物さして立ち歸る。女房は走り出で、「扱もひあいな瞞し様、中程からほぐれが来て、私や危ぶ危ぶ思つて居た、一向に此の法印は始終夢中で遣り付けた。」と、夜著を脱ぎ捨て汗押拭ひ、「ア、仕果せたと思つたれば、どつかりと氣草臥。」「オ、道理々々、首尾能くいたも其方が陰、源太は此の雜穀物、金のかはりに向うへ束ね、身の廻りを受けもどし、片時も郭へ急ぎたし。」「實に御尤も去りながら、持ちも習はぬ肩仕事、凡そ是れでも一石餘り、お一人ではいかぬ／＼、時の用には法印も片はなを仕らん、若しも是れにて不足ならば、辨慶が脱殻の夜著も序に曲けませう。」と、藁番蒲簀差しになひ、一足往ては肩をかへ、二足往ては息をつぎ、香島の里に馬は有れど、君を思へば徒歩跣足、人は戀ともしらけのよねに、浮身を糞すぞ三重世なりけり。爰も名高き難波津に、戀の舟著き数々の、

多かる中に取りわけて、酒酌みかはす神崎の、里の色宿千年屋は、客に絶え間もなかりける。殊に今宵は晴のお客と、書院座敷のはき掃除、亭主が袴、中居が揃への紅も、園生に植ゑて隠れなき、大名客御入りと、表の方賑しく、人目を忍ぶ旅乗物、御供廻も軽々と、地に鼻付けて主が答拜、御出でを待ちや焦れしと、追従輕薄切聲の、切戸口より直に昇き込む奥座敷、梅が枝様へ人走らせ、それお菓子煙草盆、釜をたぎらす音羽山、馳走振とぞ見えにける。唄雪や雲や花ちる嵐、可愛男に偽りなれば、本の心で淡路島、千鳥も今は此の里へ、身をば賣られてやり梅の、名も梅が枝の突出しには、名木竝ぶ方もなく、千年が許に入り來り、亭主立ち出で、「エ、遅い、梅が枝様、今日のお客は東國の去るお大名、初対面から身請の相談、箱入の駿河小判、すつしりとしたお捌き、サア、奥へ。」と言ひければ、「東國とおしやんす其の客の年ばひ、二十許りででつくりと、色の黒い髭男かえ。」「おつとない事でもない事。」「夫れで心が落付いた、私も爰に待合はせ、逢はねばならぬ人が有る。」「おつと合點、そこは我等が請込み、禿衆で座敷を纏めん、お前の御用は、彼の情夫の源太様に。」と間の襖を引立ててこそ入りにける。「此の姉様は何故遅い、杉を迎ひにやつたるに、早う來はなされいで、心せかれや、ア、辛氣。」と、待つに程なく姉お筆、千鳥に逢ふが嬉しさに、足もいそぐ鶺鴒が案内、梅が枝見るより、「なう待ちかねた姉様、先に道で逢ひし時、言ひたい事の數々も、人目を遠慮。」「オ、

そりや姉も同じ事、何から彼から言はうやら、能う健で居てたもつた。」「お前も御無事で嬉しい、久便りも聞きませぬが、爺様もお健にある、矢張桂の里にお住みなされてござるかえ、御持病は起らぬか。」と、問ひ掛けられてお筆は涙、「まだ父様の事知らずか。」「知らぬかとは氣遣ひ、如何ぞいな。」「アノ父様は、お果てなされたわいなう。」「エ、。」はつと許りに梅が枝は、少時涙にくれけるが、「アア思へば私は不孝者、父様は息災な健で御座ると思ふから、我が身の戀に跡先忘れ、未だ面倒見届けうと、約束せしお人が、不慮に勘當受け給ふ、男の爲に此の勤め、身の淫らに親の事、思はなんだ罰があたつて、命日忌日が何時ぢややら、知らずに暮した不孝の罪、姉様こらへて父様のお位牌へ、詫言をして下さんせ。」と、わつと叫べば、「オ、悔みは道理、其の上はまだ悲しきは、お煩ひでも有る事か、刃にかゝり果て給ふ、其の様子は自らが木曾殿に宮仕、假初ならぬ御主人の御臺若君諸共、父の方にかくまひしが、桂の里にも居る事叶はず、都を出でて大津の泊り、追手の者が寐込へ切り込み、暗がり紛れうろたへて、相宿の順禮の子と若君を取り違へた、其の兎相が御運の強さ、先の子は殺され、若君は恙なく、慥かな人に渡せしが、悲しいは母御様、其の場でお果て、隼人様も敢なき最期、親の敵が討ちたさに其方の行方、知邊の人に聞いて尋ねし此の神崎、廻り逢うたは姉妹の縁の深さ、女でこそ有らうすとも、姉妹が心を合はせ本望遂げう、姉が力になつてたも、頼むは妹許りぞ。」と、

語るを聞くも涙なる。「なう姉様、悲しい中にも、敵を討つが梅が枝が、父様への言譯、其のマア敵は誰でござんすえ。」ア、聲が高い、壁に耳、諸萬人の入り込む色里、敵に洩れては一大事。」と、話の半ばへ亭主驅け出で、「サア梅が枝、早う、お前の背丈金積んで身請の相談、座敷は金で眩い、其處を不勤めになさる、は如何した心底、是非にお供。」と手を取れば、「ア、最う其處へ行くと言ふに聞けない、コレ姉様、今は何も話されぬ、後に必ず来て下さんせ。」成程々々、今話した事、是非に今宵は延ばされず、其の用意して待つて居や、後に、と約束堅め、お筆は旅宿へ立ち歸る。「サア太夫様のお出での様子、お座敷へ注進。」と、きほひ掛つて走り行く。「シヤほんに何ちやの、此の梅が枝が心も知らず、身請々々と取持ち顔、厭らしい、夫れはさうと源太様、暮方からお越しなされと、香島まで文やつたに、なぜ遅いことぢやまで、早う逢ひたや顔見たや。」逢はば何うして斯うしてと、煙草引寄せ薫らす、胸の思ひの日に千度、夜毎々々に通ひ来る梶原源太景季、心を盡せし身のまはり、大盡小袖長羽織、焙烙頭巾紫の、色に引かる、揚屋町、千年が奥を窺へば、己を待つのか疊算丁度能い首尾幸ひと、すつと通れば梅が枝は、火燧にとんと身を背け、煙競へん淺間山と、反らさぬ顔で吹く煙管。「コレ唄所ぢやない來たわいの、何が機嫌に入らぬやら、滅切と持たせ振、大名客の襟に付き、御勿體でえすか、我等が様な浪人の、饑びた袴にはつかれまい。」と、すんど立つを、「待

たしやんせ、座敷許りを勤める筈で、今日爰へ貰はれたは、文で知らせて合點ぢやないかえ、色も戀も打越して、心底づくの二人が中、口舌所ぢやござんすまい。お前と一體斯う成つたは、竝大抵の事かいな、わしも言ふ事たんと有る。」と、袖から袖へ手を入れ、ちつと引寄せ引締めて、「遅う來ながら其のいぶり、憎い男。」と目に脆き、涙ぞ戀の慣はしなり。「最うよい泣きやんな疑ひ晴れた、叔其方に言ふ事有り、今夜七つの出汐に、父を初め弟の平次景高、一の谷へ出陣、某も能き時節、軍勢に紛れ下るに付き、其方に預けた産衣の鎧、請取りに來たわいの。」と、聞くにはつと當惑の、色目見て取る景季、「いや、氣遣ひ仕やるな、長う別れる事でもなし、是非今度行かねばならず、おことも豫て知る通り、もと某は頼朝卿の烏帽子子、夫れを功に勘當の詫せぬかと、父の思はく世の人口、此の度平家と戦はば、分捕り高名譽を顯はし、今の難儀を昔がたり、悦んでたも梅が枝。」と、何心なく語るにぞ、思ひ設けし事ながら、俄にはつと胸いたみ、「其の鎧のこと聞くと心の苦しみ。」「シテ其の鎧が何とした。」「わたしが方には疾うからぬ。」「ヤア、と、源太も聞くより狂氣の如く、身を揉みあせり、「様子が有らう、仔細を語れ。」と氣をいらてば、「ソレ其の様に浮世の事に疎いのが大名の懐子、浪人の中、苦勞させまいと此の神崎へ身を賣り、突出しの其の日より、お前を客の名充にして、皆わたしが身揚、譬へ世に有る人でも、里の金にはつまるもならひ、まして勤めの身な

れば、金のなる木は有るまいし、はえる土は持つまいし、お主の勘當赦りるまでと、いつもの揚屋に呑み込ませ、積り／＼し揚代三百兩の金の代りに、其の鎧はやつたわいな。」「扱は其の金がなければ、鎧は源太が手に入らぬか、ハア。」はつとばかりに當惑し、暫し詞もなかりしが、「元此の鎧は頼朝卿に拜領、家にも身にもかへざるを、しなしたり残念や、今は悔みて返らず。」と、胸押寛け刀を取れば、梅が枝あわて押留め、「こりやまあどう狼狽へてぢや、死んでも大事な。」「イヤ／＼今夜の出陣を外れ、一生埋木となり、のたれ死せんより只今切腹、そこ放せ。」「サア／＼其の鎧さへ手に入れば、お前の望みは叶ふでないか、シテ其の金は如何して調へると御不審も立たう、そこがお前と談合づく、奥の客に身を任せたらしなば、二百兩や三百兩の金は自由。」「扱は己故身を汗すか。」「夫の難儀には換へられぬ。」「不便の者の心やな、譬へ死んでも忘れぬ。」と涙ぐめば、「ア、女房に何の禮、お前が爰にござつては、客を騙すに心がおかれる。」「オ、尤も／＼、後に來うぞや、首尾よう仕や、が氣を揉んで持病の瘡、借錢の代りに頼おこらしたもんな。」と、わかれてこそは歸りけれ。跡見送りて梅が枝は、暫し涙にくれけるが、「必ず氣遣ひなさるゝな、エ、わたしが心充の有るといつたは皆誠、お前の命が助けたい許りぢやわいな、何の好みもない奥の客が、三百兩の金くれうぞ、今宵中に調へねば、鎧も戻らず、源太様の望みも叶はず、金ならたつた三百兩で、可愛い男を殺すか、ア

ア金がほしいなア。」「奥二八十六で、文付けられて、二九の十八でつい其の心、四五の二十なら、一期に一度、私や帶とかぬ。エ、なんぢやの、人の心も知らず、面白さうに唄ひくつさる、あの唄を聞くに付けても、源太様に馴れ染め館を立ち退き、君傾城になりさがつても、一度客に帶とかず、一日なりと夫婦にならうと、思ひ思はれた女房を振り捨て、此の度の軍に譽を取り、勘當が赦されたいと思召す、男の心はふんな物ぢや、何かに付けて女程、思ひ切りのないものはない、男故なら勤めするも厭はねど、又何の様な悲しいめを見ようも知れぬ、夫れも金故、何をいうても三百兩の金がほしい、わしや帶解かぬ、二十なら四五の、四五の二十なら、一期に一度、わしや帶とかぬ、かへらぬ昔戀ひ忍ぶ、ほんに夫れよ、あの客殺して身請の金盗まう、イヤ／＼／＼、若し仕損じ殺されては、父様の敵も討たれず、ア、どうせうな、最早日本國中に梅が枝が、祈る神も佛もないかハア、オ、夫れよ夫故には石となつたる女も有り、我は賤しき流れの身なれど、一念は誰に劣らん、巖となれる手水鉢水結び上げ口嗽ぎ、伏し拜み／＼、人に知らせじ聞かせじと、柄杓押取り、傳へ聞く無間の鐘をつけば、有徳自在心の儘、是れより小夜の中山へ、遙かの道は隔たれど、思ひ詰めたる我が念力、此の手水鉢を鐘となぞらへ、石にもせよ、金にもせよ、志す所は無間の鐘、此の世はひるにせめられ、未來永々無間墮獄の業を受くとも、だんない／＼大事ない、海川にすたれる金、一つ所へ寄せ給へ、無

間の鐘と観念す、面色忽ち紅梅の、花はちりちり、心も髪も、逆立ち上り、柄杓持つ手も身も顫はれ、既に打たんと振り上ぐる、二階の障子の内よりも、其の金こゝにと三百兩、ばらりくと投げ出す、深山嵐に山吹の、花吹き散らす、三重如くにて、爰に三兩、かしこに五兩、是れは夢か現かや、どなたか知らぬが此の御恩、死んでも忘れぬくと、嬉しいやら怖いやら、拾ひ集める心もそぞろ、袖引き断り三百兩、包むに餘る悦び涙、鎧代りの此の金と、押し戴きく、勇み勇んで、三重走り行く。梶原源太景季、首尾か不首尾の二筋を、只一筋に揚屋町、奥はさわぎの最中、禿がな出よかしたと、奥の吉左右聞きまでは、暫し待つ間も千年屋の、首尾を窺ふ姉お筆、今宵の中、姉妹一緒に敵討たんと思ひ込み、小袿凛々しく鉢巻しめ、梅が枝に逢ふまでと、飛石傳ひ細路次の、間の切戸に身を密め、今や出つると待ち居たる。走り躓き梅が枝は、産衣の鎧を持たせ、息を切つて駆け戻り、かしこにどつかと鎧櫃、下せばとつかは立ち歸る、景季見るより飛び立つ許り、「ヤレ出かした、いかい働き、源太が武運に盡きざるも、弓矢神の御加護」と、押し戴き、「出陣の刻限七つには間も有るまじ、是れより直に出陣、目出たう歸り對面せう、無事で勤めや、さらばや」と、立つを引き留め、「奥の客の情にて金を調べ、鎧を取ると暇乞もそこく、せめて暫しが中なりと、わしにたんのうさせたがよい、殊に又お前の耳へ、入れねばならぬ事が有る、マア下に居て聞いて下んせ、今日久振で姉様にお目にか

かり、話を聞けば父様は、大津にて、切られてお果てなされたといふ、其の敵討つ相談に姉様も見える筈」と、聞いて源太もはつと驚き、「シテく、其の敵の名は何とく」と、「オ、其の敵の假名實名わらはが言うて聞かさう」と、めつかり切戸引外し、つつと入る姉のお筆、「なう好い所へ姉様、幸ひあなたとお近付」と、妹黙りや、近付にならないでも、名は能う聞いた其方の夫、サアく、梅が枝、源太殿に隙取つた。「エ、エ」とは如何ぢや、親隼人殿を討つたる、敵の子には添はれまい。「そんなりや父様討つたのは。」「ハテ知れた事梶原平三。」「アノ景時様かえ、ハア。」はつと許りに詞もなし。「其の又父景時殿を親の敵といふ慥かな證據、言へ聞かう。」「オ、有るともく、木曾殿の御臺若君御供申し、大津の宿にて梶原が討たせしは、姉妹の者が父、鎌田隼人清次殿、イヤ驚くまい源太殿、知らぬ顔はしらしくしい、後暗い、さもししい、サアく、妹縁切つた。」と、いへど答へも泣い噓り、「扱は互の戀にからまれ、親を夫に見かへるのか。」「イエさうではなけれども、因果な縁を結び初め、今更何となるもの。」と、かつばと伏して泣き居たる。景季も突つ立ち上り、「父を敵と狙ふ汝等、其の方から望まいでも、此方から隙くれた、出くはしたを幸ひ、此の場で返りうちにすべきを、見遁すは今までの好み、女の業には討たれぬ敵と観念し、尼法師にも様をかへ、親隼人が跡弔へ。」と詞尖に言ひ放せば、お筆はくわつとせき上げ、「身不肖なれども鎌田が娘、腰拔と申うてか、但し女童の刀で

景時は切れまいかの、サア切れぬか切れるか、鹽梅見せう源太殿、イヤ相手にならぬはおくれたか。」と、詰め寄せ、打ちならす鐔音、七つの鐘の胸先に、響き渡れば南無三寶、はや出陣の刻限と、鎧提げ立ち上るを、「どこへ、我々が付け狙ふを、こなたに知られた上からは、軋うは討たれまじ、景時の代りに不足なれども、親子は一體、敵の片われ、一寸も動かさぬ。」と、詰め寄せれば梅が枝も、一人は姊、一人は夫、彼方此方を思ひやり、うろく立つたる所に、何處よりも白羽の矢、狙ひのつほはお筆が胸板、はつしと當ればかつばと伏す。「なう悲しや。」と、あわて立ち寄る梅が枝が、腰の番を二の矢に射られ、はつと許り驚きながら、姉妹互に顔見合はせ、「姉様に過ちはないか。」「其方に怪我はなかつたか、是れは。」と驚き取り上げ見れば、矢の根もなき二本の箒、何者の所爲ぞと、奥を見入つて立つたる所に、「其の射人爰に。」と、一間の障子さつと開き、滋籐の弓携へ、しづくと立ち出づるは、梶原平三景時が妻の延壽。源太見るより、「ヤア母人、面目もなき御對面。」と、疊に平伏し蹲る。母は我が子に目もかけず、しとやかに座に著き、「珍らしや千鳥、以前は自らが召使の腰元、今は名もかはつて梅が枝といふ流れの身、其方には此の母が段々禮をいはねばならず、そも鎌倉を立ち退いてより傾城に身を沈め、源太を育む心ざしを聞くより、厭に勤めはさせられず、遙々と難波に上り、そなたを身請せん爲、此の揚屋へ来て様子を聞けば、折しも源太は勘當の詫の綱にもと、

一の谷へ出陣、思ひも寄らず産衣の、鎧を揚錢の代りに取られ、既に我が子も腹を切るべき、難儀となるを身に引受け、世の雑談に言ひふらせし無間の鐘を撞いてなりとも、源太が望みを叶へたいと、我が身を捨てて勞る心底、母は障子のあちらにて、残らず聞いて居たわいの、我が子に心を盡す梅が枝、何と無間に沈められう、ひるの地獄へ落されう、最前金を三百兩やつたるも此の延壽、勘當の子に貢ぐ金、母が面は合はされず、顔も名も包みしが、心はのこらすうち明す。」と、語りも敢へず泣き居たる。「扱は奥のお客といふも、奥様お前で有つたか。」と、驚く妹を突き退け、お筆は傍へつと寄り、「夫れ程恩有る梅が枝に、何で矢を射さしやつた、察する所、此方衆親子が言ひ合はせ、返りうちにする所存で、射とめたと思はしやるか、箒許りで射られしは姉妹が運の強さ、コレ天道様が明らかかなによつて、非道の劍は身に立たぬ、何と非道で有るまいか。」「イヤ非道にもせよ、道理にもせよ、現在夫の景時殿を付け狙ふ二人をば、即座に射留めしは自らが手柄、夫への忠節、武士の妻になつた役、鐵をぬいて箒許り射かけしは、梅が枝への恩返し、延壽が心底見られよ。」と、胸押寛け二本の鐵突き立てんとする所を、源太驅け寄り、「何故の御自害。」と、御手にすがり押しむ。「何故とはそちが可愛さ、景時殿が大切さ、なうお筆姉妹の衆、わらはが夫子を思ふに付け、親を討たれ、無念に有らう、口惜しからう、親の代りに景季を討たうとは尤も、さりながら鎌田殿を討ちたるは、意趣切り

闇打の業でもなく、木曾の落人山吹親子を連れて退いたは、鎌田にもせよ誰にもせよ、見付け次第に討ち取つたるは鎌倉殿への忠節、番場忠太が手にかけしは、景時殿へ又忠節、草葉の陰の隼人殿、よも恨みとも思はずまじ、爰をよう聞き分け、延壽が自害で敵討を濟め、一刻も早う源太を出陣さして下され、今度の軍に手柄をして、宇治川の恥辱を雪がねば、最早一生景季は勘當の身で朽ち果つる、夫れが可愛い不便にござる、武士の夫に連添ふは、義によつて命を捨つる、夫れはまだも惜しからう、子故には此の體一分だめしにためされても、命はちつとも惜しうない、サアとめずとも死なしてくれ。」と、氣をもみ身をもみ聲を上げ、子は斯程にも思ふまいと、かつばと伏して泣き居たる。景季は一心不亂、母の慈悲心肝にしみ、「我故御心を苦しむる、不孝の罪は子に報い、此の身は武運に盡き果てむ。」と、悔むを聞いて梅が枝、「私が心も推量して下さりませ、敵を討たでは不孝となり、討てば夫婦の縁が切れる、所詮此の身を姉と夫へ引分け、死なうと思ひ定めし。」と、歎けばお筆も涙ぐみ、「今のお詞を聞くにつけ、父の古主は鎌倉殿、夫れに背く木曾殿の御臺若君、わらはが縁にてかまひ、夫れ故に討たれ給ふは古主の罰、不忠させしも自ら故、殊に番場が所爲と有れば、親子御共に敵でない、道を立て誠を盡す延壽様に、過ちさせて好い物か、此の上の願ひには、今までの通り此の妹、御不便頼む源太様。」「オ、聞き分けてさへ下さるれば、梅が枝は願、嬉しやく、是れで夫も安穩、源

太の望みも叶ふといふは、一筋ならず二筋の此の簀、夫を狙ふ姉妹を、此の矢で射とめ命を助け、夫婦中よう添ひ遂けて、梶原の家を再び興す此の矢なれば、おろそかには成り難し、先祖鎌倉権五郎景政より、家の紋は三つ大の字に定まれども、今よりは二筋の此の簀、梶原が家の定紋、譽を世上に顯はせ。」と、義を立てとほす詞の張弓、梶原が矢筈の紋、此の時よりとしられけり。源太は悦び、「はやお暇賜はらん。」と、突つ立ち上れば、「オ、夫れく、片時も早う出陣の用意々々。」と、皆立ち寄つて鎧櫃、武運も開くる産衣の、鎧直垂小手脚當、上帯引締め梅が枝が、結ぶ妹春の忍びの緒、兜打物夫れ夫れと、箆かき負ひ装扮つたる、骨柄勇々しく見えにける。名残惜しげに梅が枝も、「延壽様のお詞で、夫婦の固めはたつた今、假へ此の身は別る、とも、我が名は夫の陰身に添ひ、出陣の御供。」と、筒に生けたる紅梅を、一枝手折り箆にさせば、元來若武者にあひあふ若木の梅が枝が、互に無事と目で知らせ、うなづく度にもちる梅の、匂ひは袖にのこりける。「適れ武者振類なや。」と、母は悦び兩手を上げ、「今度の軍に花も源太も、われ魁けんく」と、勝つ色見せて父の勲氣を赦されい、冥加盡きなば討死せよ、生きて歸るは不孝ぞ。」と、涙ながら教訓の、慈愛の詞、忝や、「我も平家と戦はんに、花箆こそ能き敵と、多勢がなかに取り込めなば、太刀真向にかさしの花の、ちりくばつと追ひ散らし、向ふ者を拜み打ち、又廻りあはば車切り、蜘蛛、かくなは、十文字、鶴翼、飛行の秘術を盡し譽

を取り、其の時母のお笑ひ顔、見せうぞいさふれ、早お暇」と、勇み勇んで手束弓、矢筈の紋と景季が、文武は古今に香しく、花有り實有る武士と、語り傳へて其の名をば、箭の梅と末の代に、譽を永く留めけり。

第五

源平互に攻め戦ふ、生田の大手を打ち敗らんと、梶原平三景時、次男平次景高、無二無三に切つて入り、敵數多切り散らし、太刀のほめきを冷さんと、攻口少し引き退き、一息ついて立つたる所に、後陣のかたより番場忠太、逸散にかけ來り、「搦手の大將義經、平家の本陣、須磨の城を攻めんと有つて、鐵柵が嶺、鶴越、一の谷の逆落し、手ばしかり謀、知らせ申す。」と言はせも果てず、父景時、「ホホよく知らせたり、軍に素早き義經に、高名させては一分立たず、今一度敵陣へ切つて入り、此の大手を打ち破り、義經に鼻あかせん、氣を弛ますな者共やつ。」と下知の半ばへ、梶原が物見の細作、敵陣よりかけ戻り、「只今平家の城中を窺ふ所に、梶原やらぬ遁さぬと、戦の真最中、御父子の外に梶原と名乗る者の候や、不審なり。」と注進す。平次景高眉を擡め、「敵にもせよ、味方にもせよ、梶原が名字を名乗るは、我々親子の外にはない筈、鬼神も恐る、梶原の、苗氏を盗み敵を感さん爲なるべし、

何にもせよ憎い仕方、景高實舌を糺さん。」と、かけ行くを暫しと止め、「梶原と名乗るは外ならず、兄の源太と覺ゆるなり、宇治川の恥を雪がん爲、やさしくも先驅せしな、よし誰にもせよ、其の圖に乗つて此の城郭を打ち破らん、續けや續け。」と逸散に、城中さして三重生田の森、梶原源太景季平家の多勢と打ち戦ひ、今を盛りの梅の大木、小楯に取つて控ふれば、平家の軍兵菊池の一黨、遁さじやらじと追取り巻く。「ヤア物々しや我には合はぬ敵なれど、菊池と聞けば名にめでて、花に縁有る草と木の、生田の梅も箭の花もちり懸つて面白や、八騎を相手に早咲きの、梅も源太も魁に、勝色爰に未開紅、飛鳥の飛梅秘術を盡し、今日の軍の好文木。」と、切つて廻れば白梅變じて紅梅の、血汐流れて敵も怯まぬ槍梅に、兜も打ち落されて大わらはの、姿となつて引くな引かじと春風に、花をちらして三重戦ひける。景季は事ともせず、百術千慮の手を碎き、袈裟切豎割腰車、切り伏せし、塵し、恐れて寄付く敵もなし。汀の方より四五十騎、眞砂を蹴立て驅け來る、すはや敵よと太刀取直し、近づくを能く見れば、父の平三景時なり。源太は見るより大地に平伏し、恐れ入つたる風情なり。遺が義強き景時も、久振の我が子の顔、見る目の中に涙を浮め、「やをれ景季、汝が所存も母延壽が物語にて聞きたるが、武士の身に取つては忠孝の二つ、何れに愚かはなけれども、尤も重きは君命、そこを辨へざるは武士の若氣、勘當したるも汝が心を勵ます爲の母の慈悲、合點がいたか景季、今こそ

父が實の子。」と、手を取つて引立て、物具の塵打ち拂へば、「叔は源太が御勘當御赦免とや。」と言ふにや及ぶ、汝が今日此の城中に踏み留まり、平家の多勢を切り靡け、菊池が一黨討ち取つたるは、宇治川の先陣に勝つたる高名、此の勢ひに乗つて落ち行く平家を討ち留めん、いざ来い源太跡に續けや者共。」と親子主従勇みに勇み汀をさして追つて行く。梶原が二度の驅とは今此の時と知られる。搦手の大將軍九郎判官義經公、一の谷の大敵を逆落しの一戦に攻め破り、平家の一門或は討たれ或は四國に落ち行けば、鎧の袖に勝色見せ、軍の勢れを晴らさんと、花に屯の名大將下知に靡かぬ草もなし。かかる所へ畠山次郎重忠、樋口次郎を高手に縛め、御前近くひき居れば、跡についで梅が枝兄弟、權四郎若君をかき抱き、「道々も申し上ぐる通り、樋口殿をお助け有る様にお取りなし、秩父様のお情」と、鎧の袖に取付き縋るを目もやらす御前に向ひ、「仰せに隨ひ樋口が罪科法皇の叡間に達し候へば、主の爲に仇を報ぜん」と計る忠臣の心、強ち罪科とも言ひ難し、去りながら、勇者は勇者の掟に任せともかうも、義經が心の儘に計らふべしとの院宣故、重ねて召し具し候。」と申し上ぐれば、「さればこそ、恐れながら法皇の叡慮、我が思ふ所、恰も符合を合はせたる如し、今彼を罪科せば、此の後主君の爲に、仇を報ぜんと思ふ忠臣の道絶え果て、弓矢の道を失ふ道理、樋口が命は助くべし。早繩解け。」と宣へば、「イヤなう義經殿、いはれぬ弓矢の道を言ひ立て我を助け、兼て中好からぬと聞く

梶原などが讒言に遇ひ、鎌倉殿と中違うて、後悔ばしし給ふな、よつく分別せられよ。」と、死を願ふぬ志、義經打笑はせ給ひ、「天下の政は小鮮を煮るが如し、梶原づれが讒言を聞き入れ、義經と中違ふ鎌倉殿ならば、夫れこそ日本弓矢の破滅、助けよといはぬ許りの法皇の院宣、残更義仲内宛に残されし、謀叛ならぬ最期の一透明らかなれば、汝にかかる科はなし、彌命助けるぞ、殊に汝が子ならぬ子の穂松十五歳になるまで、權四郎とやらん随分勞り守り育てよ、鎌倉表は此の義經が勳功にかへても、宜しく事を計らふべし。」と、始め番ひし秩父の詞、未然に察する名將の、恩義に繩も打解けて、お筆兄弟樋口が悦び、權四郎有難涙、若君抱きいそぐと、福島さして立歸る。梶原平三景時親子三人番場忠太を引具し、後れ馳せにかけ付け、「扱こそ樋口が縛めとかれしな、勇士は勇士の計らひにせよとの院宣、私に繩を解かれしは鎌倉殿を踏み付ける仕方、但しは我が身を勇者と高振つての所業か、大將顔を振舞うての所業ならば、此の景時も侍大將なぜ談合は召されぬ、忠太よつて樋口次郎に繩かけよ。」と、いはせも立てず義經公、大きに面色變らせ給ひ、「樋口を助け誤りならば義經が腹切るまでのこと、一度ならず二度ならず過言の振舞赦されず。」と、太刀に御手をかけ給へば、景時も膝立て直し、「御邊が首に景時が太刀は立たぬものか、サア抜かれよ相手にならん。」と詰め寄れば、秩父は君を押圍ふ。父は源太が押隔て、「秩父殿御前のお執成し。」と言ふにや及ぶ大事を前に置きなが

ら、争ひは善悪共に皆非なり、景時を引立てられよ。」と承る。「と無二無三、連れて御前を立ちにける。此の體を見て平次景高、「エ、生温い兄の采配、親父の代りに相手になる、サア義経殿。」と詰め寄る所を、樋口すかさず飛び蒐り、景高が袷かき掴み引擔いでどうど投げ付ければ、是れはと立寄る番場忠太、首筋攔んで動かさず、「コレ、兄弟、父隼人を討つたるは此奴と聞く、親の敵今討て。」と力に任せ打付ければ、兄弟嬉しさ飛び立つ許り、「親の敵覺えたか。」と、起しも立てず、「寸々に切つたかでかしたく、此奴はおれが苛まん。」と、胴骨踏まへて首ふつと捻ぢ切り、「鎌倉殿の寵臣梶原が倅を我が手にかけ、生害遂ぐる上からは、我を助け給ひし、義経の御身に後難もなく、誰々に難儀も懸らず、返すく血を分けぬ倅が事、義経公重忠の御憐愍頼み奉る。」と、言ふより早く太刀取り直し、我と我が首えい／＼とかき落す、忠義の最後ぞ潔き。各勇士の心を感じ諸卒を従へ御凱陣、平家の大敵悉く八島の外へ切り靡け、日出たき春に咲き榮え、勝色見する籐の梅、源氏は益逆鱗の松、榮えは千年の若緑、竹の齡は萬々歳、神と君との道直に、治まる御代こそ日出たけれ。

ひらがな盛衰記終

菅原傳授手習鑑

竹田出雲

菅原傳授手習鑑

第一

蒼々たる姑射の松、化して婬約の美人と顯はれ、珊珊たる羅浮山の梅、夢に清麗の佳人となる、皆是れ擬議して變化をなす、豈誠の木精ならんや。唐土許りか日の本にも、人を以て名付くるに、松と呼び梅といひ、或は櫻に准ふれば、花にも情天満、大自在天神の御自愛有りし御神詠、末世に傳へて有り難し。此の神未だ人臣に在らず時、菅原の道真と申し奉り、文學に達し、筆道の奥儀を極め給へば、才學智徳兼ね備はり、右大臣に推任有り、權威に漫る左大臣、藤原の時平に座を列ね菅丞相と敬はれ、君を守護し奉らる、延喜の御代ぞ豊かなる。然るに主上此の程より、御風の心地とて、病の牀に臥したまふ。天顔を伺ひ奉らんと、御弟宮無品齋世親王、参内の御ともには、院の廳の官人判官代輝國、階下に伺候仕れば、席を正して丞相に打向はせ給ひ、「今朝院参致せし所、法皇仰せ有るやうは、當今の御惱日を追つて快然ならず、急ぎ齋世に参内し、龍顔を拜し、御様子有の儘に告げ知らせよと、判官代を相添へらる。御様體いかゞ渡らせ給ふやらん。」菅丞相正笏有り、

「さして御變りもなく候、委しくは道眞に御尋ね有らんよりは、直に天氣を伺ひ給へ。」然らば左様に致さん。」と時平にも挨拶有り、常寧殿に入り給ふ。かかる所へ式部省の下司、春藤立蕃允友景罷り出で、庭上に頭を下け、「今度、渤海國より來朝せし唐僧、天蘭敬が願ひには、唐土の徽宋皇帝當今の聖徳を傳へ聞き、何卒天顔を拜し奉り、御姿を畫に寫し歸國せよ、其の畫を則ち日本の帝と思ひ、對面せんとの望みにつき、數々の饋り物、則ち是れに候。」と庭上に飾らすれば、菅丞相聞き給ひ、「コハ珍らかなる唐僧が願ひ、當今延喜の帝、聖王にて在す事隠れなく、御姿を拜せんと、唐の帝の望みは、實に我が國の譽なれども、折悪しく天子の御惱、有の儘に言ひ聞かせ、音物も唐僧も、唐土へ歸されんや、時平の料簡在すか。」と、仰せに冠打振りて、「さうでない道眞、御病氣と申し聞かしても、よも實には思ふまじ。延喜の帝は聖王でも、跋か瞎か缺唇か蹇か、天皇らしうない形故、病氣といふは間に合はせと、いはる、は日本の疵。面倒な事はさんより、御形代を拵へ、天皇と偽つて唐僧に拜さすれば、何事無う事は濟む、誰彼といはんより、此の時平が代りを勤め、衰龍の御衣を著し、天子になつて對面せん。」と一口に言ひはなす、謀叛の萌しぞ恐ろしき。判官代輝國、階の下につつとより、「こと新しき嚴命、唐土の天蘭敬は、時平公の御姿を寫しにはまるるまじ、昔あがつて願廣く、頰骨高き延喜の帝、唐僧がよも吞込むまい、神武以來ひとりの惡王、武烈天皇の名代な

らば、時平公が最究竟、當今の御代りとは、鹿を馬との出損ひ、ハ、御無用。」と嘲笑ふ。「ヤア舌長し輝國、退去れやつ。」と呵りつけ、「ヤア、立蕃、天蘭敬を内裏へ伴へ、天子には此の時平、用意せん。」と立つ所を、菅丞相とめ給ひ、「時平の仰せは天下のため、御形代とはさる事なれども、若しは彼の僧相人にて、君臣の相を能く見るならば、王孫に有らぬ臣下としるべし、其の時いか、仕らん。」と、理窟に時平行き當れば、三善清行す、み出で、「菅丞相の詞とも覺えず、彼の坊主を相人とは餘りな先ぐり、念に念が入り過ぎる、左中辨希世殿、さうぢやないか。」とさし出口、「イヤは是れ念に念を入れてさへ、過ち仕落は有るならん、假初ならぬ唐土人、御對面の事なれば、輕々しく計らはれず。」と、暫しが間御思案有り、「所詮天子の御代り、人臣はなりがたし、幸ひ御同腹の御弟、宮齋世の親王を、今日一日の天子と仰ぎ、御姿畫を唐土まで傳へて恥ぢぬ御粧ひ、此の儀いか。」と理にかなふ、詞に違ふ時平が謀計、目と目を三善清行も、口あんごりと聞き居たる。玉簾深き一間より、伊豫の内侍立ち出で給ひ、「兩臣の御諍ひ、我が君委しく聞召され、朕が代りは齋世の宮と直々の敕詔にて、只今御衣を召し替へ給ふ。此の由申し傳へよとの仰せにて候。」と内侍は奥に入り給ふ。時平は俄にむつと顔、輝國が悦喜の眉、開く扉は日花門、立蕃允が案内にて、渤海國の僧天蘭敬、倭朝に異なる衣の衫、庭に覆ひて畏まる。「ム、唐土の僧天蘭敬とは汝よな、龍顔を寫し奉らんと願ひ、叶

ふは汝が身の大慶、有り難く存じ奉れ。」と時平が指圖に警蹕の、聲諸共に高々と、御簾巻き上ぐる其の内には、弟宮齋世の親王、金巾子の冠正し、御衣爽かに見え給ふ。實に王孫のしるしとて、唐僧始め列座の官人、あつと平伏し敬へり。天蘭敬漸う頭を上げ、玉體を熟と拜し奉り、「ハ、ア天晴聖主候や、我が國の徽宗皇帝、慕はるも理なり。三十二相備はつて、いはん方なき御形、勿體なくも僕が筆に寫し奉らん。」と、用意の畫絹硯箱、檜の木の燒筆さらりと、眉のかゝり額際、見ては寫し書いては拜し、御笏の持たせやう、御衣の召し振ちがひなく、即席書の速かさ、顔輝が子孫か凡ならぬ、畫筆の妙を顯はせり。判官代は差心得、捧物取り納むれば、「重ねて俸祿賜びてんぞ、旅館に歸れ。」と道眞の、下知を請け繼ぐ春藤玄蕃、御暇申させ、唐僧を伴ひてこそ退出す。歸るを待ちて時平大臣、玉座にかけ寄り、齋世の宮の、鬮擲んで引摺り出し、御衣も冠もかなぐり、「唐人が歸つたれば、暫くも著せては置かれぬ。九位でもない、無位無官に著せた装束、此の冠襪れた同然、内裏に置かず我が預る。今日の次第は、右大臣奏聞せられよ、身は退出、罷りかへる。」と御衣冠、奪ひ取つて行かんとす。道眞立つて引き取り給ひ、「聊爾なり時平、救もなき御衣冠、私に持ち歸り、過つて謀叛の名を取りたまふや。」と、何心なく身のためを、いはる、身には胸に釘、頭のがめて閉口す。齋世の宮、菅丞相に向はせ給ひ、「天子ついでの敕詔には、老少不定極まりなし、何時しらぬ

世の中に、名許り残すは其の身の爲、道を残すは末世の爲、妙を得たる筆の道、傳ふべき總領は、女子なれば是非に及ばず、幼なれば弟の、菅秀才にも傳ふまじ、弟子數多有る菅丞相、器量を擇みて筆道の、奥義を授け長き世の、寶とせよとの御事。」と、仰せのなかに左中辨、宮の前へすと出で、「菅丞相の弟子の中、位といひ、器用といひ、希世に上越す手書はなし、幸ひ是れにて傳授有れと御申し付け下さるべし。」と言はせも敢へず、菅丞相莞爾と打笑み、「内裏に有る時は我が傍輩、筆法は我が弟子なれば、此の道において師匠を差置き、我儘の願ひ致されな。」と誠めの詞、嚴々と襟を繕ひ、「敕答には、有り難き君の恵み、我が筆法の大事には、神代の文字を傳ふる故、七日の齋、七座の幣、神道加持に唐倭、文字は何萬何千にも、我が筆道に漏れしはなし。それともしらす此處彼處に、手習ふ子供も皆我が弟子、今日より私宅に閉ぢ籠り、擇み出して器量の弟子に、筆道傳授すべし。」と、宣ふ詞は今の世に、傳へて残る筆道の、道は御名に顯はれて、眞なるかな誠なる、君が御代こそ三重豊かなれ。引捨つる車は松に輪を休め、舍人二人は肘枕、二輛並べし御所車、片方は藤原片方は菅原、道眞公の名代は、左中辨希世、時平公の代參は三善の清行、賀茂明神へ御惱の祈願、神子が湯浴の其の間、眠るむまさは賀茂堤、夢に夢をや結ぶらん。松吹く風に菅原の舍人、梅丸丸目をさまし、「コリヤやい松丸丸、そちが主の時平公は、短氣者でも根が大鳥、名代にわせた清行殿は、短い

くせに根が悪漢、呼び使を請けぬ内、目をさまして往かいでな。「ホウ梅王のいはる、事わいの、此方の主の名代に來た。希世殿こそ大邪人、蓼喰ふ蟲も好きくと、あの和郎を弟子にしたり、代參におこしたりなさる、菅丞相のお心がしりたい。「イヤそりや其方達が、小さい料簡とは違ふ、聖人の胸の廣さは、此方等が身にも覺えの有る事、齋世の宮様の車を挽く、櫻丸とわれとおれと三人は、世に稀な三つ子、顔と心は變つても、著る物は三人一所、ひよんな者産んだと、親父が氣の毒に思つたをお聞きなされ、三つ子は天下泰平の相、舍人にすれば天子の守護と成る、成人さして牛飼に差上げよと、菅丞相様のお執成しで、御扶持まで下され、親四郎九郎殿は、今佐太村の御領分に、御寵愛の梅櫻松を預り、安樂に暮して居らる、其の御寵愛の三木の名を、我々にお付けなされ、おれを兄のお心でか、梅王丸とお呼びなされて召使はる。其方は松王丸、櫻丸は宮の舍人、烏帽子親といふ御恩の御方、家を隔てて奉公するとも、必ず仇疎かに思はぬがよいぞよ。「ア、ぐどくぐどくと長談義説く人、もう齋世の宮もお参りなされ、牛休めに櫻丸も來さうなもの、何ぞ用が有るか。「ハテ佐太村の親父殿から、來月は七十の賀を祝ふ程に、三女夫連で來いと人おこされた、其の事いほうと思つて。「ソリヤ銘々に人が來て、よう知つてゐる。思へは親父殿は、おはずからず子三人と、果報な人では有るわいなア。」と、兄弟話の其の中へ、同じ胤腹一時に、生まれて年も同年同士、ど

れが兄とも弟とも、梅と松とに櫻丸、三幅對の車挽き、木陰に一輛引き捨てて、堤の上から、「是れは是れは二人とも、緩りとして居らる、御神事も早半ば過ぎ、呼び立てられぬ中に行つたらよから。」と、眞顔でいへば梅王丸、「御神事が濟んだら、宮様からお立ちで有るが、其方や又爰へ何しにきた。「イヤ此方の宮様は、神司の方で御休足ある故、お立ちの程がしれぬ。此方衆の乗せて來た御名代の衆は、禁庭の御用が有るとて、立ち騒いで居たぞや、油斷して呵られまい。」と、いふに松王、「いか様役なしの宮様と、時平公のお目鑑で、御用繁き清行様とは違ふ、何時しれぬいざ行こ。」と、車にか、れば、「ヤレ待て松王、清行様がお立ち有れば、此の梅王がお供した、希世の卿も同然、萬一お立ちでない時は、あの大勢の羣集の中へ二輛の車を引きかけて、怪我さしても損ねても、不調法は舍人の誤り、一走り往て様子を見て、取りに歸るまでの事。休んだかはりぢや、サア來い。」と引き連立つて兩人は、宮居の方へ走り行く。跡見送りて櫻丸、「ハ、一ばい食うて往たわく。」と、ひとり言して相圖の手拍手、招けば招かれ戀草の、露踏み分けて十五六、被の風の優しきは、菅丞相の御娘、刈屋姫とて色も香も、文は父御のお家柄、口説き落して宮様に、逢はせませんと跡につく、供は八重とて花めきし、櫻丸が自慢の女房、先へ廻りて、「コレこちらのお人、首尾はよいか。」と問へば點頭き、「よいともよいとも、今日此の賀茂堤はお車の休み所、人止して一人も通さぬ、鼠の子もない所と思ひ、

宮様をそびき出して來た所に、梅王や松王が、どんぐり目玉にほつと草臥、一生につかぬ謔をまた吐いて、まんまと散らして仕舞うた。姫君様恥かしさうな顔せずとも、お出でく、ドリヤ開帳仕らう。」と、車の御簾を引き上げれば、齋世の宮は面はゆけに、姫は猶しも顔見合はせ、につと笑うて袖覆ふ。「サア爰らが下々と違うて、飛び付かして輕業もさせ難い、女房ども暗闇にしたいなア。」何のいな、晝ぢやとて結構な車の内。「エ、すばやい奴では有るぞ、我等は暫しお暇。」と木陰へはひれば、「それく、こんな時には男は邪魔、サお姫様、申し上げたい事有らば、遠慮なしに仰有れ。」と、突き遣られて刈屋姫、「千束の文のお返事に、首尾あらばとの御すさみ、有り難いやら嬉しいやら、今日此の首尾待ち兼ねて、お呵り受けに参りし。」と、袂はへて宣へば、齋世の宮も十七の、いとまだ若き初戀に、何と言ひ寄る品もなう、「櫻丸がいか世話、文見る度にいやまさり、逢ひたかつたに能うこそく、嘸春風で寒かる。」と、仰せは姫の身にこたへ、春風よりも戀風が、ぞつと身にしむ許りなり。車のかけより櫻丸、ぬつと首出し、「コリヤ女房、我が身抓つて人の痛さ、おりや先刻から死脈が打つ、早う配劑仕をらぬか。」とせり立てられて、「オそれく、春風でお寒いと仰しやる。憚りながら御車を、暫しの内の風凌ぎ、御免有りて。」と姫君を無理に抱き上げ押し入るれば、「アコレ、是れは何しやる、勿體ない。」と云ひつゝも、車の内へ入り給へば、羞心得て櫻丸、「さらば閉帳。」と御簾

おろす、内には宮の御聲にて、「嬉しいぞや。」とのお詞と、「神詣の御車で、罰が當るとシヤ儘よ。」の睦言、聞いて夫婦は飛び退き、「女房ども、堪らぬく、鄰近しうて、ひよんな寶を設けた。」と身悶えすれば、「オこれ聞えるわいの、お二人共に御機嫌よう、嬉しい事ではござんせんか。」「イヤもう餘り御機嫌が能う過ぎて、近所まで難儀がかつた、とはいふものの、有様はそちが働き、ようマア尋ね逢うたな。」「こなさんの教への通り、内裏上臈の形にやつし、社家の内へすつといて、姫君のお傍へ通り、櫻丸が女房八重でござりますると申し上げたれば、あなたにも待ち兼ねてござつたかして、ようおぢやつた、もういこかと、腰元衆を待たして置いて、裏道から忍んでお出で。」「オ、其の筈く、この中から手廻して、菅丞相様の筆法傳授に、とりこもつてござるを幸ひ、お袋様へ神參とねがはせ、お供の衆には口薬、水撒くやうに飲まして置いた。ヤ其の水で思ひ出した、追付お手洗が入るぞよ。」「何いはんすやら、あのおほこな御二人、うまいやつでは有り、手洗は愚か、お行水が入るもしれぬ。」「そんならつい此の川水を。」「ア、いや、コリヤ雨あがりて堤が滑る。怪我さしては晩からおれが不自由な、神前の水汲んで來い。」「ソリヤマア如何やら勿體ない。」「大事なく、王は十善神は九善、其の王様の弟御、九善かたしぢや往て來い。」と、せり立てられて女房は、神前さして汲みに行く。跡は氣休め一休みと思ふ所へ三善の清行、官人仕丁に十手持たせ、裝束巻き上げ驅け來り、「ヤ

ア夫れにをる櫻丸、おのれ最前齋世の宮を、奉幣も濟まぬ中連れ退いたとの風聞、何國へ供した、サ
 アぬかせ。」とせちがひか、れば、「存せぬく、下として上の事、其方をとつくとお尋ね。」と言はせも
 立てず、「ヤアぬかすまい、兼ておのれが取持にて、物くさいこと聞いて居る。取分け今日は、御惱平
 癒の神いさめ、其の場所へ来て不淨が有ると、親王でも東宮でも、急度捕へて罪に行ふ。有様にぬか
 さずば、引捕へて拷問する、それ繩かけよ。」と下知の下、おつ取り巻くを身構へし、「知らぬというた
 ら金輪際、奈落の底から天まで知らぬ。聊爾召さるとかたつばし、下手のお鞠の蹴てく蹴踏む、足
 の鹽梅見せうか。」と、ぐつと踏み出す兩足は、顔に似合はぬ古木なり。「シヤ下郎めが味をやる、最前
 から見る所が、車の内に人こそ有れ、御簾引斷り檢めよ。」と、いふに隨ひ立ち寄る所を、首筋掴んで
 投げ退けく、「車は舍人が預り物、命が有らば寄つて見よ。」と、蒐るを蹴飛ばし反ね飛ばし、十手も
 ぎ取りかたつばし、薙ぎ立てく追うて行く、其の間に宮と姫君は、人に見られて叶はじと、車の内
 より飛びおりく、さすが若氣の一筋に、遁れて旅のかり衣、何國ともなく落ち給ふ。隙間を見て清
 行が、取つて返して車の内、引き明け見ればうちは空殻、「南無三寶、見違へた、舍人めが戻つたら、
 大抵では有るまい。」と、下道さして逃ぐる跡、間もなく驅け来る櫻丸、御二方の見えぬに惚り、車を
 見れば宮の書置、何々、見付けられて辱めを請けうより、立ち退くと有る文章に、ハツト驚き胸は

板、「イデ追付いて御供。」と、驅け行く向うへ女房八重、「サア是れお手洗汲んで来た。」と、みせるを反
 ね退け、「ナニ手洗所か、清行めが車の内、詮議せんと来りしゆる、見付けられじと二方は、何國とも
 無う落ちなされた。」「ヤアそりやマア真か。」と女房は、びつくりぐわつたり水桶落し、「シテまあ此方
 は、こりやどこへ。」「ヤア何處所か、元姫君は菅家の御養子、實母は河内土師の里、菅丞相の御伯
 母君、先づ此方へ志し跡を慕ひ奉る。汝はこの御車を、宮の御所へ引いて行け、捨て置いては後
 日の咎め。」「成程さうぢや、こな様の姿に扮して引いて行こ、ドレ白張。」と請取つて、「あと案じすと
 も行かしやんせ。」「オ、合點。」と白砂蹴立てて、飛ぶが如くに驅けり行く。八重は臆て、夫の姿白
 張肩に引掛けて、車の牛を引き直し、させいほうせい精一ばい、引けども遅き牛の足、エ鈍くさいと
 後から、おせば車もくるくると、廻る月日は不成就日か、お二人様のくる日か、夫の爲には十方暮、
 鬼宿車を押しかけて、天赦天一天上の、お首尾もよかれ神よしと、祈る心は八專の、黒日に間日の斑
 牛、追ひ立ててこそ三重立ち歸る。上根と稽古と好きと三つの中、好きこそ物の上手とは、藝能修行
 教への金言、公務の暇あけくれに、好ませ給へる道真公、堂上堂下はいふに及ばず、武家町人に至る
 まで、風儀を慕ふ御門人、數も限りもなき中に、左中辨平、希世、手習稽古ふる兄弟子、今度筆法御
 傳授は、差詰我等に極まりしと、勝手覚えし御殿の眞中、朝の夜から机を直し、煙草よ茶よと呼び立

つる、聲もとゞかぬ奥勤、女中頭が聞きとがめ、「コレお次に誰も居やらぬか、希世様の御用が有る。」と、呼び次ぐ局に不足顔、「コレ手の皮がひりつく程叩いてもし、らしん、ムウ合點、顔出しせぬは毎日來るを面倒がり、言ひ合はせて鼻あかすのか。けふで七日此の手習、おれが爲許りぢやない、御子の菅秀才は年弱七つ。傳授所へ行かぬによつて、此の希世が傳授して、菅秀才の成人以後、身共から又傳授。さすれば主の奉公も同じ事、ハツボというて廻る筈、總じて此方がなまぬるこい。」「コレ勝野よう心得や、そなた衆の不調法、こける所は局が迷惑。何おつしやろとあい／＼とナ、申し希世様、成程さうちや、よい料簡。毎日々々氣を詰めるも、菅原の家の爲、今日も又此の清書、お目にかけて。」と差し出す。「イヤけふは御赦され。」「赦せとはなせ／＼。」「ハアテ幾度お目にかけても、丞相様の氣に入らぬは、お手の業ではござるまい。取次の仕様の悪さ、手代りにけふは勝野。」「イヤ是れ左様はならぬ、筆法傳授も神道の祕密事。學問所の注連が目に見えぬか、油濃い女子はやられぬ。昨日までは氣に入らずと、此の清書は格別、筆先に肉を持たせ、天晴骨髄を書き得たれば、傳授はする／＼申し切つて、往てたもれ。」とたのむに是非なく立つて行く。「コレ勝野、局のいはれた、あゝあゝを合點か。」「アイ心得てをりまする。」「エ、忝い、幸ひ傍に人もなし、福徳の三年め、屏風のかげでついちよ／＼。」と取る手を振り切り、「エ、いやらしい、無體なことなざる、と聲立てるが

合點か。」「オ、合點ぢや、聲立てるが怖いとて、しかけた戀人叶ひをれ。」と、ほうど抱かへて連れて行く。「アレ／＼申し。」「申しとは誰に申し。」「ア、御臺様や若君様、まうしく／＼。」といふ聲の、もれ聞えてや、菅丞相の御臺所、若君の御手を引き立ち出で給へば、希世は仰天「是れは／＼悪い所へよう御出で。」と、手持不沙汰も減らず口、「勝野に癩の療治を頼まれ、取りにか、つて斯くの仕合。御臺にも御存じの如く、萬能に達せし某、世に希な器用者として、希世とつけた親どもが自慢の名。其の例は此の若君、年よりは御發明、菅秀才と呼び給ふも、秀はひいつる、才は才智の才を取つて、菅家の公達菅秀才、あら／＼いはれ斯くの如し。我等は餘り器用過ぎ、取り損うた按摩のしだら、御臺所の思召しが。」「ア、其の言譯に及びませぬ、日頃の行儀知つて居る、そんな疑ひ何のいな。」と、物に障らぬ御挨拶、「ア、夫れ聞いて落付いた、今のしだらの手ながら、お尋ね申す事が有る。御息女の刈屋姫齋世の君と、にやほやした世間の取沙汰、今日で七日相詰める、御所には何の沙汰もない。虚説かと存すれば、刈屋姫の御殿は明家、御詮議もなされぬは親御達も合點の上、缺落でなござるか。」と、問はる、辛さは御臺所、暫し返事もなかりしが、「隠しても隠されぬ、性なき人の口の端に、かゝるも是非なき刈屋姫、齋世の君は猶もつて大切なお身の上、互に忍ぶ戀路の車、廻り逢瀬もそこそこに、事顯はれしを恥かしく思召され、御所へお歸りなされぬものと、却つて常の御方ならねば、

宮様附々の人々が、それなりけりにして置くまい。又此方の娘の事は、希世様知つての通り、本の母様は河内國、土師村の覺壽様とて、連合の爲には伯母御様。菅秀才を設けぬ先乞ひ請けて養子娘、此の御所へは戻られず、伯母様方へと心付き、自らが内證で尋ねに人を遣はした。此の一落は今日が日まで、態と父御へ知らしませぬ。夫れも何故敢て、筆法傳授七日の中、參内止めてとり籠り、世の取沙汰は何にも知らず、傳授も過ぎて聞き給はば、嘸やびつくり仕給はんと、彼方此方を思ひやる、心を推量してたべ」と、案じ給ふぞ理なる。内立關の奏者番、一聞此方に畏まり、「先年お館に相勤めし武部源藏定胤、尋ね參れとの仰せにより、此の閒所々方々吟味致して、漸う只今夫婦一所に參りたり、是れへ通し申さんや」と伺へば、御臺所、「オ、待ち兼ねし源藏夫婦、早々此處へ參れといへ。コレ菅秀才、源藏に逢ふ閒、爰に居ては氣が盡けう、勝野を奥へ連れて往て、機嫌能う遊ばつしやれ、希世様にも暫しが閒」「此處に居て邪魔にならば、所替へ仕らん」と、つゞいて奥にぞ入りける。人知れずと思ひ初めしが主親の、不興を請ける種と成り、夫婦が二世の契りより、三世の御恩辨へぬ、不義より御所を追ひ出され、さむい暮しを素浪人、尾羽打枯れし武部夫婦、今日のお召は心の優曇華、開く襖の内外まで、勝手は今に忘れねど、身の誤りに氣遅れし、膝もわなく窺ひ足、御臺の御座を見るよりも、ハット畏れて飛びしさり、蹲りたる許りなり。「ヤア珍らしい源藏夫婦、

連合の氣に背き、此の御所を出やつたを、かぞへればもう四年。日頃人を捨て給はず、慈悲深い程きつさもきつい、思ひ切つてはいかな事、見返らぬ夫のお心、叶はぬ事と思ひの外、源藏に參れと有る御用の様子、何かは知らぬが氣遣ひな事では有るまい、定めて吉左右。ヤア自らがいふ事許り、嘸待ち兼ねてござるで有る。源藏夫婦が參りしと、誰そ奥へおしらせ申しや。サア二人共に顔も上げ、近う寄りや、ハアテ遠慮に及ばぬ、近うく。年月の浪人住居、渡世が苦になつたか、昔の面影どこへやら、源藏が著て居やるは、荒々しき下々の著物。戸浪はそれに引替へて、小袖の縫箔、遣に女子の嗜みか、二人の中に子も出來たか」と、問はれて戸浪は有りがた涙、「冥加至極もないお詞、主人のお目を眩ませし、罰が當つて苦勞の世渡り、夫婦が著替も一つ賣り、二つも三つも朝夕の、煙の代に成しはてし。漸う残せし此の小袖は、御臺様の下されし、御恩を忘れぬ賣り残り、髪飾りの鼈甲も、いつかは杵の引櫛と、變り果てたる共稼ぎ。連合は布子の上、糊立たぬ麻上下も、けふ一日の損料借り、ア、おはもじ。お上に御存じないことまで、身の恥顯はす鑢刀、今日まで人手に渡さぬ武士の冥加。「アイ女房が申し上げます通り、此の態に成りさがれば、一入昔の不義放埒、思ひ廻せば主人の罰、悔むに爲方なき仕合」と、夫婦諸共おろく涙、折柄局は奥より立ち出で、「お學問所へ召しますは源藏殿只一人、御用濟んでお手の鳴るまで、御臺様にもお出ではならぬとの、仰せられでござりま

す。「成程々々、心得た、源藏は局と同道、戸浪はこちへ。」と入り給ふ。只今御前へ召し出さるゝ、源藏が身の嬉しさ怖さ。局は斯くと申し上げ、立てたる障子明け渡せば、恭しく注連引きはへ、常にかはりし白木の机、欣然として坐し給ふ。凡人ならざる御有様、畏れ敬ふ源藏が、五體の汗は布子を通し、肩衣絞る許りなり。やゝ有つて仰せには、「さりがたき仔細有つて、汝が行方を尋ねしに、住所定かならず、漸うきのふ在家を求め、今の對面満足せり。其方儀は幼少より我が膝元に奉公し、天性好いたる筆の道、好くに上り習ふに覚え、古き弟子ども追ひ抜き、あつばれ手書になるべしと、思ひの外に主従の、縁まで切つて其の風體、筆取る事も忘れつらん。」と、仰せに猶も恐れ入り、「御返答申すは憚りながら、前髪立の時分より、お傍ちかう召仕はれ、手を書く事は藝の司、書けよ習へと御意なされ、御奉公の間々、書き覺えたと申すも慮外、蚯蚓ののたくつた様に書く手でも、藝は身を助けるとやら浪人の業藝、鳴瀧村で子供を集め、手習指南仕り、今日まで夫婦が命毛、筆先に助けられ、清書の直し字、毎日書けども上らぬ手跡。御尋ねに預る程、身の不器用と御勘當、悔むに爲方なき仕合。」と、歎くを熟聞召し、「子供に指南致すとは、賤しからざる世の營み。筆の冥加藝の徳、申す所に偽りなくば手跡も變らじ、改むるに及ばねども、爰にて書かせ、道真が所存は後にて言ひ聞かさん。認め置いたる眞字と假字、詩歌を手本に寫し見よ。」と、白木の机御手づから差寄せ給へば、「ハ

アはつ。」と先へは出でず跡すさり、志根惡の左中辨物陰よりすつと出で、「コリヤ源藏、様子残らずあれからたちきく、師匠の指圖は兔も角も、辭退申して出る筈が、兩手をついて目をましくし、臺の所作がらするは、書いても見様と思ふ氣か、それは覺太い叶はぬ事。」「ハアお馴染と有つて忝い、希世様のお詞に、一つも違はぬ役に立たず、併し身の分際を顧みぬ、源藏めでもござりもせぬ。只今是れにて書けと有る、お手本書いて可いやら悪いやら、跡先の様子も存せず、四年以來在所住居、くさ墨に三文筆、書き出しや反古の裏に書けならば場打もせまい。其の結構な机に墨筆、大鷹檀紙の位に負け、一字一點いかなく。」「ホ、好い料簡、いかぬと知つて何故立たぬ。」「サア其處でござります、御勘當の私、御意に甘えた身の願ひ、お執成し頼み上げます。」「ムウそれで聞えた、詫言はしてやろが、今はならぬといふ其の仔細、引抓んで話して聞けう。此の度帝の仰せには、存命不定の世の中、生死の道には老若差別はなけれども、マア年寄から死ぬるが順道、菅丞相は當年五十二、天命を知るといふ齡も過ぎ、寄る年を惜しませ給ひ、唐まで響むる菅原の一流、是れまで傳授の弟子もなし、一代限りで絶やすは残念、手を選んで傳授せいと、敕諭で、七日の潔齋、殊のほかお取込み、事済んでから願うてやろ。」「ハア様子段々承れば、御大慶な敕諭。」「サア其の敕諭も大慶も、知れたこと云はずとも、早々歸れ。」とせり立つる。「イヤ立つな源藏、いひつけた手本只今書け。」

と、仰せは武部が身の大慶、希世は偏執むしやくしや腹、立ち寄る源藏院み付け、「わりや兄弟子に遠慮もせず、書かうと思つて出しやばるか。」「ホ、お笑ひ有つても恥かしからず、御免なれ。」と机にかり、手本を取つて押し戴き、心臆せず摺る墨の、色も勻ひも馨しき、筆の冥加ぞ有り難き。希世傍へすり寄つて、「わが様な横著者は、手本の上を透き寫し、其の手目は身がさせぬ、恥と天窗はかき次第、身のさまの恥類、わりや何とも思はぬか。温袍の上に汗れ袴、机に直つて居るさまは、貧乏寺の講中奉加場の帳付けに其の儘、無縁法界を書くなよ。」と、悪口たらん言ひちらし、怪我のふりにて机を動かし、肘に障つて邪魔するも、構はず咎めず手本の詩歌、心よく書きおほせ、机も共に御前に直し、しさつて頭をさけ居たる。丞相清書を取り上げ給ひ、「鑽沙草只三分許、跨樹霞纒半段餘、是れは我が作れる詩、きのふこそ年は暮れしか春霞春日の山に早立ちにけり、是れは又人丸の詠歌、何れも早春の心を詠み適へり。假名といひ眞字といひ、是れに勝れし筆や有らん、出來したり出來したり、總じて筆の傳授といつば、永字八法筆格の十六點、名をそれ／＼にいふに及ばず、人のしる所、菅原の一流は心を傳ふる神道口傳、七日も満つる今日只今、神慮にも叶ひし源藏。」と御悦びは限りなし。「ハア有り難や忝い、筆法御傳授有るからは、御勘當も赦され、前に變らぬ御主人様。」「ヤア主人とは誰を主人、傳授は傳授勘當は勘當、格別の沙汰なれば、不届なる汝なれども、能

書なれば捨て置かれず。私の意趣は意趣、筆は筆の道を立つる、道眞が心の潔白、叔聞に達しても依怙とは思召されまい、希世にも疑はれな。勘當は前のごとく、主でなし家來でなし、此の以後對面かなはじ。」と、尖き御聲源藏が、肝に燒鐵ささる、心地、「道理を分けての御意なれども、傳授は外へ遊ばされ、勘當御免。」と泣きわぶる。「こりや源藏が歎くは道理、勘當を赦されねば、傳授しても規模がない。彼が願ひも希世が望みも立つやうの料簡は、傳授と勘當かへ／＼にして遣はされたら、よささうな物のやうに存じまする。」といふ折から、當番の諸大夫罷り出で、「俄の御用これ有る間、只今參内遊ばされよと、瀧口の官人參られし。」と申し上げれば御不審顔、「七日の齋過ぎさる中、御用とは何事、隨身仕丁の用意せよ。」と、装束の間に入り給ふ。參内と聞召し、立ち出で給ふ御臺所、櫛の下に戸浪を押し隠し、人目包みも餘所ながら、お顔をせめて拜ませんと、心づかひは希世が手前、「傳授の様子承れば、お前には遣り多からう。仕合は源藏、さりながら御勘當は赦りぬけな、館の出入も今日限り。かなたこなたを思ひやり、御參内を見送りがてら、夫れで／＼。」と櫛の、下をしらする御目づかひ、夫婦は重々お情の、身にしみ渡る涙、束帶氣高き菅丞相、一間の内より立ち出で給ひ、神道祕文の傳授の一卷、源藏に給はりける當座の面目、御流義末世に傳へる寺小屋の、敬ひ申し奉る、因縁斯くとぞ知られける。「サア傳授濟むからは對面是れまで、罷り歸れ立てよく。」と頻

りの御説。コリヤ源藏、ほえ面かいてももう叶はぬ、腰が抜けて得立たずば引きすり出さん。」と立ち寄る希世、「なうあらけなく仕給ふな、三世の縁の切れ目ぢやもの、立てぬも理歎くも道理、涙とめて御暇乞、見奉れ。」と襦袢の、裾より覗かす戸浪が顔、それぞと推し給へども、しらす顔にて立ち出で給ふ、「何としてかは召されたる、御冠のおのづから、落つるを御手に請けとめ給ひ、「物にも障らす脱けたるは、ハア。」はつと許りに御氣が、り、「イヤそれは源藏が願ひ叶はず落涙致す、落は落つると讀むなれば、其の驗でがな。」「イヤ」然にてはよも有らじ、参内の後知る、事、源藏早く歸されよ。」と、冠正して参内有る。希世はこはく御見送り、御勘當の身の悲しさは、行くに行かれず伸び上り、見やり見送る御後影、御簾にさへられ衝立の、邪魔になるのも天罰と、五體を投げ伏し男泣き、戸浪が悔みは夫の百倍、「こなたは御前のお詞か、り、直にお顔を見さしやつた。私は漸う御臺様の後に隠れてあんじりと、お顔も拜まぬ女房の心、思ひやつても下されぬ、まんがちな一人泣き。同じ科でもこなたは仕合、女子は罪が深いといふ、如何した謂れでなぜ深い、鈍な女子に生まれし。」と、御臺のお傍も憚りなく、果てし涙ぞ憐らしし。希世のさく立ち戻り、「ヤア源藏を歸されぬは、御臺所御油断々々々、一刻も早くほいまくれと、重ねて仰せ付けられた。そこを少し身が料簡、其のかはりには傳授の巻物、讀んで見る望みはない。筆の冥加にあやかる爲、ちよと戴かしてくれんか。」

と、望むに是非なく懐より取り出すを、引つたくり、逸足出して逃げ行くを、どつこいやらぬと源藏が、ほつ蒐けほつ詰め襟髪撫み、引きすり戻してかづき投げ、大の男に一泡吹かせ、傳授の一卷取り返し、「是れを己が引つかけて直垂の羽繕ひ、晝鷲の骨頂め、びくともせば打ち殺す。」と、刀四五寸抜きかくる。「コリヤ源藏聊爾すな、戸浪過ちさするな。」と、お詞か、れば、「エ、くおのれエ、エおのれをな、只助けるも残念な、寺子屋が折檻の机は、こいつが責道具、女房此處へ。」と取るより早く、脊中に机大けなし、兩手を引つばる机の脚、装束の紐引抜き、鴈字絡みに括りつけ、「盗みひろいだ師匠の躰、竹篋の代り扇の親骨、頬に見せしめひりつかせん。」と、打ち立て、「突き飛ばせば、痛さも無念も命のかはり、恥を背負うて歸りける。源藏夫婦手をつかへ、「禁裏の様子承り、歸りたく存すれども、長居は恐れ御臺様、此の上ながら夫婦が事、お捨てなされて下さりますな。」「オ、夫れは心得たが、今行くといふを聞き捨てに、せめて一夜といはれませぬ、命が物種縁も盡きずば又逢はう。モウ行きやるか。」「アイく参りませねば成りませぬでござります。」と、戸浪が涙長潮に、かわく間もなき袖の海、見るめいぢらし夫婦が姿、泣くく御門を三重出でて行く。源藏と引違へ歸る梅王、青息吐息門の臺木に足躓き、かつぱとこけて起きる間も、「待たれぬく侍衆、御大事が發つてきた。科の様子は何かは知らず、使の廳の官人共、丞相様を取り廻し、鐵棒破竹アレく爰へ、御

臺様へ此の様子を。」と館の騷動門外には、鐵棒打ち振り警固の役人、輿にも召させ奉らず、菅丞相の前後を圍み、先にすゝむは時平が加擔人三善の清行、門外に立ちはだかり、「齋世親王刈屋姫、賀茂堤より行方知れず、仔細御詮議なされし所、親王を位に即け、娘を後に立てんとする菅丞相が豫ての企て、其の罪遠島に相極まり、流罪の場所はおつての沙汰、夫れまでは押し込め置き、出口々々に大貫鑑、門の警固は身が家來、荒島主税を付け置く。」と、呼ばはる聲を聞く辛さ、御臺は警固の人目も恥ぢず、走り寄つて、「道眞公コハそもいかなる御事ぞや。齋の間の事、姫が身の上御存じない、いひわけは何故なされぬ。科もない身を漂泊へとの、仰せは聞えぬ恨めしや。」と歎き給へば、「ハア愚かく、道眞虚命かうむれども、君を恨み奉らず、漸う齡傾きし臣が拙き筆跡まで、惜しませ給ふ傳授の敕詮。昨今までは敬慮に叶ひ、けふは逆鱗蒙るとも、皆天命のなす所、先程冠の落ちたるは、殿上の札を削られ、無位無官の身と成るしらせ、今さら悔むは愚かく。是れより配所へ行くにも有らず、見苦しう、歎かれな。」と御臺を遠ざけ給ひける。希世は道より取つてかへし、「清行殿御苦勞千萬、此の和郎の様子承り、弟子の方から師匠をあけ、向後頼むは時平公、菅丞相と一つでない執成し宜しく頼み入る。」「氣づかひ有られな、吞込んだ、作法のとほり菅丞相、内へ追ひ込み門を打て。」「畏まつた。」と荒島主税、割竹振り上げ立ちかゝる。「コレ待つた、其の役目希世が替

つて仕る。」と割竹請取り、「コレ謀叛人殿、今までとは當りがちがふ、時平公へ宗旨を替へた手見せの働き、割竹一つ。」と振り上げれば、血氣の梅王すつと寄り、希世を四五間突き飛ばす。「ヤア下主の慮外者、自滅仕たうて出しやばつたか。」「ハレヤレしれて有る下主呼ばはり、こなたの口から慮外とは腸がよれ返る。其の割竹振り上げて、誰をく。」「オ、サ謀叛人此のわちよを。」「ヤア謀叛とは誰を謀叛、御恩を忘れし人非人、菅丞相にはお構ひなくと、汝に罰は身が當てる。」とまた飛びかゝる梅王丸、御手を指し延べ引き寄せ給ひ、「ヤア小さかしい汝が舉動、敕詮に寄つて斯く成る道眞。希世は扱置き、其の外へも手向ひするは上への恐れ、汝は勿論館の者共、我が詞を用るすば、七生までの勘當ぞ。」と、聞いて希世がこはけも抜け、「コリヤ梅王、して見ぬかい、頬けた許りで腕なしめ。」と、のさばる無念耐へる梅王、是非も情も荒島主税、官人原に追立てられ、悄悄館に入り給ふ、御有様こそ痛はしき。サア、用意の大貫鑑、表と裏へ手分の人數、築地の穴門樋の口まで、暫時の間に打ち付けしは、物忌まはしく見えにけり。清行見廻し、「ハレ能い氣味。出口々々の締りも能いか、築地の屋根を越さうも知れぬ、主税萬端油断すな。暮に及べば希世殿、いざ歸らん。」と打連れて、六七間を打過ぎる。築地の陰に待ち居たる、武部源藏ぬつと出で、希世を一當て悶絶させ、周章てる清行相伴投げ、「スハ狼藉者打ちのめせ、殺せ縛れ。」と犇いたり。武部は戸浪に差添わたり、寄らば切ら

んす勢ひなり。希世は漸う人心地、立ち上つて、「ヤアうぬは源藏め、一度ならず二度ならず、甚いめに合はしたな、うぬがする狼藉、菅丞相がさしたになつて、流罪の仕置が死罪になる。」と、いはせも果てず高笑ひ、「女房アレ聞け、物覚えのない拔作殿、傳授は請けても勘當ゆりぬ、此の源藏には主人がない。梅王は主持ちで、汝奴をさいなまず、怖へて居るかはいさに、名代に投けてこました、名代次に皆撫切り。」と女房諸とも抜き放ち、めつたなぐりの太刀風に、小糠侍、鋸屑公家、吹き立てられて散り失せけり。敵なければ立ち歸る、時節も幸ひ黄昏時、門の扉をとん／＼、叩けば内より咎める聲、「聞き覺えた梅王か。」「さいふは武部源藏殿か。」「殿所かい若い者、油断して居る所でない、扉の釘付踏み破り、御主人達の御供し。」「此の場を退くは安けれど、おことが今も聞く通り、仁義を守る道真公、とあつて讒者が計らひにて、お家の断絶覺束なし。」「御幼少の御若君、夫婦が預り奉らん、所存を立つるはコレ梅王、若君をこつそりと、築地の上から。」「できた／＼源藏殿、お上へいつては得心有るまい。盗み出すがお家のため、さうちや／＼能い料簡、一刻一步も早退きたし、頼む／＼。」といふ間もなく、築地の上から、梅王が心の早咲、勝色見せたる花の容顔、大事の若君怪我さしますまい。」「心得高き築地の屋根、延び上つても届かぬ背たけ、とやせん戸浪を抱き上ぐれば、軒に手とゞく心もとゞく、若君請取り抱きおろし、外と内とに忠臣一人、胸は開けどひらかぬ御門、

荒島主税目早く見つけ、「ヤア盗人の隙は有れど、守人の隙がない、宵観めを手引する、内と外との相盗めら、菅秀才を盗んだ、此の旨注進せん。」と、かけ出す先に源藏立ちふさがつて、「どこへ／＼、おのれをやつてよい物か。」と、討つて蒐れば抜き合はせ、切り結び切りほどき、追つ返しつ二人が勝負、屋根の上から見て居る梅王、棧敷正面眞向二つ、われて命は荒島主税、とゞめに及ばぬ切り捨て切り捨て、危い場所を盗人夫婦、行末榮ゆる菅秀才、若君頼む夫婦の衆、館の父君母君を、頼むぞ梅王心得たと、互に頼み頼まる、忠義々々を書き傳ふる、筆の傳授は寺子屋が、一藝一能名も高き、人の手本と成りにけり。

第二

道行詞の甘替

サア／＼子供衆、買うたり／＼、飴の鳥ちや飴の鳥、それがいやならしる飴鑿切、泣く子の口へは地黄煎玉、扱其の外平野飴、柱の里には桂飴、西の宮には飴の金、其の品々は往て買うたり、拙者が自慢で賣り弘める、櫻飴を買はつしやい、櫻飴々々、櫻々のおのが名を、いへども包む頬かぶり、木綿頭巾に袖なしの、羽織は軽き身なれども、忠義が重き牛飼の、櫻丸はいつぞやより、賀茂の川浪立

ち出でし、齋世の宮と姫君に、漸うと廻り逢ひ、一日二日は我が家にも、忍ぶに何と菅原の、伯母君頼み参らせんと、行くは車の供ならで、跡と先とに打荷ふ、飴の荷箱のかたくに、御二方を入れ参らせ、浮世を土師の里へとて、飴のとりく賣りて行く、こゝろづかひぞ切なけれ。都をば夜を深草に、出でて道はあやなくて、御香の宮に明け渡る、道を芹川淀も越え、町を過ぐれば爰ぞよし、誰かは何と石清水、サアくお出でと荷をおろし、箱を開けばうづ高き、姿あらはに刈屋姫、「暫く拜む日の影に、自なれぬ山や知らぬ里、おもひなくてぞ見まほし。なう宮様。」と有りければ、「さればとよ、そなたの父菅丞相、如何なる事の過りにや、押籠の身となりけるも、我々出でし跡なる故、正しくはしらねども、やがて赦され有りぬべし、冤にも角にも、我が身は今賣る飴の如くにて、傘に覆へる日陰の身、いつかとけなん心ぞ。」と、御仰せに櫻丸、「左様にては候はず、御忍びましますも、飴をば上に君を下、とりも直さずあめが下、しろしめす瑞相にて候。」と、申し上ぐるに宮は猶、勿體なしと身をすべる、野路の畔道をろくくと、蕨が裾に手を入れて、裾ひるがへす裏模様、とめ木に草も芳しき、春の野面に羣れる蝶、袖にとまらば羽摺りて、鏡絶やせしけはひせん。爰に我が名をかりやの里、今苗代の時を得て、民の手業も遠目には、いとめづらかに引鶴の、聲に千歳もかはらじと、契りし今の閨の内、宵よりしめて寝る夜さは、月に出るやら曇るやら、唄枕とる手に寝て解く帯の、

いかいお世話く、枕とる手に寝てとく帯の、いかいお世話く、結ばぬ夢をさませとや、春の風ぬるみし空の、快く、行手の森の人音に、見付けられじと手ばしかく、また忍ばする飴賣が、片手に太鼓片手に撥聲をかしくも拍子どり、こんりやくくくく、是れは天子の始めなされた神武飴とて、神武天皇は飴がお好きで、練らしやりましたる名物飴をば、こちも仕なろて噂等や嫁等が、紅絹の襷をしんどろもんどろかけて、しんどろり、もんどろりと練りやりましたるを、買ふなら今ちやくと賣るこゑの、子供あつめに子の親が、袖の土産を買ひに来て、認める間の取沙汰に、「惜しや都の菅丞相、筑紫へ流され給ふゆゑ、津の國安井に風待して、おはしまするはいたはし。」と、所縁としらす告けて行く、跡の驚き悲しみは、箱の細目に顔許り、「何道眞は左遷とや、父上安井にましますとや、せめてお顔が拜みたい。何卒御船の出ぬ先に、逢はせてたも櫻丸、頼むく。」もしどろにて、わつと許りに泣き給ふ、聲をも人にしらせじと、喇叭の笛に紛らして、夫れより道を横切りに、一荷の涙擔ひ行く、先は何國ぞ津の國の、安井の岸の安からぬ、思ひ重ぬる三重哀れさよ。世につれて、海の面も風騒ぐ、湊に御船とゞめしは、菅原道眞公、終には讒者の舌強く、覺えなき身に罪きはまり、筑紫宰府へ流罪の籠船、津の國安井に著きしかば、警固の武士は、法皇の舊臣院の廳判官代輝國、逢坂増井に陣幕打たせ、見るめ厳しき槍長刀、數多の官人四方を圍ひ、出船を松の下かけに、日和見合はせ

居たりけり。判官代輝國海の面を見渡し、幕絞らせて、丞相の坐す籠輿の下に手をつかへ、「沖の
 様子を窺ふ所に、五三日も御出船の日和とも相見え申さず、此の所に御逗留あらうより、河内國土師
 の里へお越し有つて、伯母君覺壽公とも、御暇乞候へかし。」と、まうし上ぐれば菅丞相、面やつれ
 たる御容顔、物見より顯はし給ひ、「院の御所に使はるれば、上を學ぶ下々まで情有る武士よ。斯く囚
 人と成りし身を、赦し送らば我よりも、おことが罪はいかにせん、思ひ寄らす。」と宣へば、「コハ有り
 がたき御仁心、左程尊き御方の、お爲に成つて咎めにあはば、死後の面目子孫の譽、殊に私わざな
 らず。法皇かねての仰せには、土師の里に伯母有りと聞き及ぶ。若し津の國にて潮待の隙あらば、暇
 乞させよと密々の御おほせ、何憚る事もなし、御心置きなく土師の里へ御出で。」と、す、め申せば菅
 丞相、都の方を打ちながめさせ給ひ、「世に有りがたき法皇の御心や。天子に父母なしといへども、
 現在の御父君、其の御力に及ばずして、斯く囚人となる事は、如何なる罪の報いぞや。はかなの浮世
 や、淺まし身の果てや。」と、三世を悟る御身にも、世を辛しとの御述懐、哀れにも又いたはしし。
 日和見の船頭罷り出で、「今朝の天氣相、まだ二三日も御逗留と存せしに、思ひの外たち直り、風治ま
 り候へば、御出船の御用意。」といふより輝國、「ヤアだまりをろ。たち直るまじき日和、たち直つたと
 ぬかすからは、よき日和の悪しく成るも、汝が眼にかゝるまい。」「イエ〜左様ぢや御座りませぬ、

二八月は船頭のおぐみ時、得手は手の裏かへします。「ソレまだ吐す、左様な手の裏返す日和に、大
 切な流人の船出さる、物か。」「イエサ是れは慥かに。」「ヤア狼狽者、向うの山に雲が懸つて、まだ四
 五日も御出船の日和はない、いらざる汝が奉公ぶり。」と、呵りつくればびつくりし、いかな巧者な船
 頭でも、此の暴風には仕様がなないと、咄き〜入りにける。菅丞相は輝國が志、法皇の御心の有
 り難さに、河内國へ赴かんと、おほせゆたかに安々と、御輿とゞまる所とて、井の字を居ると書きか
 へて、安居の宮と末の世に、仰ぐも神の威徳かや。かかる折から櫻丸、宮姫君を御供申し、先にす、
 んで馳せ來り、「菅丞相御流罪と承り、縁類の者暇乞の願ひ、又一つには科の様子も承りたし、
 御役人へ直談。」と、立ち寄るを數多の官人、「ヤア直談とは慮外者、暇乞とは無法者、油斷ならず。」と
 取り巻くを、それと悟りて輝國、「ヤレ聊爾すな。」と押ししづめ、「科の様子聞きたくば、いうて聞かさ
 う。上より咎めの條々、具にいひ開きたまへども、齋世の宮と刈屋姫、密通の言譯御存じなきとてあ
 かり立たず、是非なく科に落ち給ふ。」と、聞いて悲しく刈屋姫、宮諸共にかけて給ひ、「何我々故囚
 はれとや情なや淺ましや、不義は二人が誤りぞ。流しなりとも切るなりとも、罪に行ひ丞相を助け
 得させよ。父上に逢はせてたべ、助けてたべ、對面させよ。」と二方は泣きさけび給ふにぞ、輝國遙か
 に頭をさけ、「恐れながら御對面有りては、彌丞相の罪重くなる道理、元此のおこりは、去る頃君

天子に成りかはり、御姿を唐僧に寫させしは、菅丞相の計らひ、唐土まで天子と思はせ、我が娘を
 后に立て、外戚とならん下工みと、讒者の舌に懸る内、宮姫を連れ御出奔、彌それと叡聞に達し、
 罪なくして罪に沈む。殊に姫君とは親子の中、是れ天子への畏れ有れば、よもや對面候まじ。冤角
 此の上菅丞相の爲を思召さば、是れより刈屋姫と御縁を切られ、二度禁庭へお歸りあつて、謀叛な
 き趣を仰せわれられ、丞相歸洛を御願ひ候へかし。」と、申し上げれば齋世の宮、「我故罪に沈むも悲
 し。又我をのみ戀ひ慕ひ、付きそひ來たる契りをば、見捨てて何と往なれうぞ。」と啣ちたまへば、姫
 は猶更、「父の爲には怨敵、我を罪して御流罪を、赦してたべん。」と、伏し沈みく、消え入るばか
 りに泣き給へば、媒したる身に取つて、辛さ苦しき櫻丸、骨にも身にもしみ渡り、思へばく我な
 くば、此の戀誰か取持たん。科人は外ならずと、悔めど今更せん方も、涙先だつばかりにて、とかう
 詞もなかりしが、立ち直つて宮のお傍に恐れ入り、「私元は土百姓の倅、御扶持を下され、君の舍人
 を勤めるも、皆菅丞相様のおかけ。其の恩有る方を流罪させ、のめく見ては居られずと、申して
 から我々風情の及ばぬ所、輝國殿の仰せの如く、是れより姫君と御縁をお切りなされ、他人と成つて
 お願ひ有らば、よもや叶はぬ事もござりますまい。再び丞相様御歸洛有つて後、表向の御縁結び、
 暫しの間のお別れ、御聞き入れ下されよ。」と、身にか、つたるせつなさに、土に平伏し願ふにぞ、齋

世の宮は猶涙、「一旦館を出でし身の、面恥かし二度の恥。」と、仰せに輝國詞を返し、「御館へこそお歸
 りなくとも、法皇の御所へお越しあらば、猶以て御願ひのよき便り、ひらに是非に。」と勸むるにぞ、
 冤角涙にくれながら、姫君に指し向ひ、「我が戀草の思ひに迷ひ、丞相の歸洛を願はずば、天道怒り
 給ふべし。契りは盡きず變らねども、親の爲と諦めて、別れてたも刈屋姫。」と、涙と共に宣へば、「こ
 ハ勿體ない、お歎きをかけるも元は自ら故、いつそ焦れて死んだらば、今の思ひは有るまいに、お名
 残惜しや。」と御顔を、見るも涙見らるも、涙片手に、「又逢ふまでは随分まで。」「おまへ様にも御
 機嫌で。」と、跡は涙の縋り泣き、わつと絶え入り給ひける。かかる折節いづれとも、しらぬ女中の乗
 物つらせ、おめす臆せず判官代に指し向ひ、「私事は土師の里立田と申して、菅丞相の伯母の娘」
 と、聞くに嬉しき刈屋姫、「コレ姉様ナウ立田様かいの。」と、取り付き給ふを突き退け勿ね退け、「母の
 覺壽、左遷の様子を聞きおよび、年寄つての悲しみ、御推量下さりませ。」と、いふ内にまた姫は取り
 付き、「其のお歎きが身に取つて、なほ悲しい。」と歎くを振り切り、「何卒此の所の汐待を、土師の里に
 て御一宿あらば、心よく暇乞も致し度き願ひ、あすをもしらぬ老の身の、少しは歎きもとめたく、
 無體な御訴訟。夫宿彌太郎が參る筈なれども、郡役も勤める身で、身勝手な事申すも如何、女の慮外
 は常のことと、不調法も願みずお願ひに參りし。お役人の御料簡、偏に頼み上げます。」と、願へば輝

國、「イヤ一家の願ひ叶はぬ事、大切な囚人、浪打際の一宿心元なく、只今用心の爲、土師の里へ立ち越える一宿は覺壽の許。」と、聞いて嬉しく、「エ、夫れはマア結構な御用心。」と悦びいさむ立田が袖、姫はひかへて、「コレ申しとても事に、父上にお目にかゝる願ひ。」と、頼む袂を振り放し、「恐れ多い丞相様へ、何の顔さけて逢はうと思召すぞ。元あなたに菅秀才といふお子のない先、母様がお前をば葉の上より遣はされ、私が爲に妹でも、今は菅原の姫君様、勿體ない宮様へ戀仕かけて、今此の大事になつたでないか。戀は心の外でもな、是れはあんまり外過ぎて、姉のわしまで人々へ、顔が出されぬ恥かし。」と、叱る心も姉妹のさすが好みと知られける。輿の内には菅丞相態と詞をかけ給はず、事を量るは判官代「ヤア立田殿、今更御意見なき事。コリヤやい櫻丸、何をうつかり、一時も早く宮を法皇の御所へ御供申せ。立田殿は刈屋姫を、御同道は必ず無用ナ合點か、コレサ土師の里の親元へ、急度お預けなされよ。」と、表を立てて心は情、立田が持たせし乗物へ、菅丞相を召しかへさせ、後と先とは警固でかため、御乗物はゆるやかに、常の旅行同然に、輝國が引添うて、土師の里へと急ぎ行く。「ナウ是れ父上、丞相。」と宮諸共に驅け行き給ふを、櫻丸が引きとゞめ、立田が押へて引き分くる、名残盡きせぬ妹脊の別れ、おふきの別れとさすが又、姉が情で引合はず、いとゞ思ひは増井の濱、目は泣き腫らす赤井の水、いつか安居と逢坂の、水のあはれや泣き別れ、さらばくと

三重 聲残る、菅丞相の御別れ、對面有りたき覺壽の願ひ、流人預る判官代輝國の用捨を以て、河内の屋敷へ入り給へば、老の悦び大方ならず、馳走の役人夜晝の、別ちもしらぬいそがしさ、立田の前は船場にて、思はず逢うたる刈屋姫、密かに伴ひ歸れども、家來も多きはしらぬがち、隠し置いたる小座敷の、襖を密と押し開き、「嘸寂しからう、精も盡けう。顔見に來たいは山々なれど、さりとては何や角や、用事の多き、母様の傍放されねばえ參らぬ、今が能い隙、誰も來ぬ氣晴らしにサア爰へ。」と、心遣ひも姉妹の、姉の情を刈屋姫、一間を出づる目は涙、「齋世様に別れてより、段々御世話に預るうへ、父上様にもお目にかゝり、せめて不孝の申譯、夫れも叶はぬ物ならばと、我が身の覺悟きはめても、産の母様覺壽様、今の母様都の弟、親王様の御事は、猶しも忘れぬ忘れ得ぬ、心を推量してたべ。」と、歎けば共に涙ぐみ、「悲しいは道理々々、さりながら、丞相様に逢はぬとて、短氣な事などかんまへて、思ひ出しても下さんすな。母様のお願ひ立つて、此の屋敷に御逗留。どうぞ首尾を見繕ひ、母様のお耳へ入れ、お指圖請けてと、餘所ながら、口むしりかけて見たればな、こちらの思つた坪へはいかず、母様の堅くろしさ、お果てなされた郡領様に、少しも變らぬ行儀作法。我が産んだ子でも人にやれば、先こそ親なれこちは他人、それを親ぢやの娘ぢやと、思ふは町人百姓の、譯をば知らぬ子に甘さと、幸先悪い訴訟もならず、外の事に言ひ紛らし、其の場は濟んでも始終が濟まぬ。

お宿申すも今日で三日、濕氣空も吹き晴れて下り日和に直つたと、船場から注進ゆゑ、今宵八つがお立ちとて、輝國殿の旅宿より、知らせに寄つてお立ちの用意。今やなんとと思ひの外、手詰に成つたがどうして好からう。膝とも談合、コレ泣かずと、好い智慧出して下さんせ。」と、とつとおいの胸算用、後にすつくと宿禰太郎、「よい分別者はれに有り。」「ヤア太郎様いつの間に。」「ム、何時の間にとはコレ立田、連れ添ふ男の目をぬいて、こつそりと取り込んで、だいそれた身の上話。刈屋姫はあなたが妹、藁の上から養子の仔細、知つては居れど京と河内、武家と公家とは位も格別、菅丞相の伯母風吹かし、婿めかしても、いつかなめかれぬ位負け。名許り聞いて逢うたは今、てんと御器量、齋世とやら様とやらが、現様にならしやつたも道理ぢやく。姫の顔見ぬ先は、おれが楊貴妃ぢやくと思つたが、競べて見れば無楊貴妃、そなたの名もかへねばならぬ。」「ソリヤ又何とえ。」「ハテされたお次の前。」「エ、すはく」と出放題、母様へも隠してゐる、此の譯何ともいはしやんすな。」「それは氣遣ひ仕給ふべからず。明日のお立ちしられし、輝國の旅宿へ参り、此の間御逗留、心づかひの一禮申し、いよく刻限相違なく、一番鶏の鳴くのが相圖、申し合はせに往て来いと覺壽のいひつけ、只今参る道で、よい思案が出たら、コレ戻つていはいお次の前。」「アレまだじやらく悪戯口。」「オット閉口いてこう。」と、表の方へ出でて行く。後を見やりて刈屋姫。「彼方がお前のお連合、身の上の

事に取紛れ、お挨拶も得申さぬ。」「ア、これ挨拶はいつでも成る事、こちの願ひは延ばされぬ、ア、どうがな。」と案じ煩ひ、「オ、それく、所詮母様にうたとて、婿の明かぬはしれて有る。連合も留守、母様もお傍にごさらぬ折柄なれば、お前を私が連れて往て、呵られうがどうならうが、後は儘いな。サア此方へ。」と、姫の手を取る後より、「不孝者どつちへ行く。」と、襖ぐわらりと母の覺壽、杖ぶり上げて飛び掛るを、立田ははつと抱きとめ、「お前に明けていはなんだ、隠したお腹が立つならば、此の立田、打ちも擲きもなされませ。此中も宣はせぬか、人にやれば我が子でないと、仰しやつての折檻は、母様とも覚えませぬ。丞相様の御祕藏姫、杖棒あててよいものか、サア自らをく。」と、姫に代つて身を厭はず。「イヤお前に科はない、不孝な自ら打ち給へ。」と、立田を押しやる杖の下、「いややお前は打たされぬ。」「イヤこなさまは。」と折檻の、杖を争ふ姉妹思ひ、老母はなほも怒りの顔色、「コリヤ立田、おりや他人には折檻せぬ、養子にやつた丞相殿は、おれが爲には甥の殿。子にやつた姫は甥孫、親も赦さぬいたづらして、大事のく甥の殿、流され給ふは誰が業。にくうてく、コレ此の杖折れる程擲かねば、丞相殿へ言譯立たぬ。六十に餘つて白髪天窗、連合に別れた時、剃るをそらさぬ立田の前、尻に成つては便りが無い、力がないと留められて、法名許り覺壽と呼ばれ、邪魔に思つた此の白髪、今日といふ今日役に立田、天窗を剃つて衣を著れば、打擲の杖は持たれぬ

わい。傍杖望む立田から。」と、走り寄つてちやうくく、打たる、姉妹打つ母も、ともに涙の荒折檻。「ア、くこれ伯母御前、率爾の折檻仕給ふな。齋世の君の御不便ある、娘に疵ばし付け給ふな。父をゆかしと慕ひくる、刈屋姫に對面せん、是れへ伴ひ給はれ。」と障子の内より丞相の、御聲高き聞ゆるにぞ、老母は杖をかりりと投げ捨て、わつと叫んで臥し轉び、暫し答へもなかりしが、「産の親の打擲は、養ひ親へ立つる義理、養ひ親の慈悲心は、産の親へ立つる義理。あまき詞も打擲も、子に迷うたる親心、逢うてやるとは姫よりも、母が悦び詞には、言ひつくされぬ刈屋姫、結構な親持つた、持つた。」と目に持つた、涙の限り聲限り、二人の娘は何事も、お慈悲くと許りにて、泣くより外の事ぞなき。「コレなう、爰から禮をいはうより、來いと有ればいざ傍へ。」と隔ての襖押し明くれば、菅丞相は見え給はず、逗留の中作られし主の姿の木像許り。コハそもいかにと刈屋姫、「逢うてやらうと宣ひしは、母様の折檻を止めん爲、冤に角不孝な自ら故、お逢ひなされて下されぬか。今物をおつしやつたは、父上に違ひはないに、木で作りし父上様が、但しは物は宣ひしか、又は何所ぞへ隠れてか。」と、立つて見居て見、うろくく。「なう騒がしや刈屋姫、丞相の逗留中、御馳走申すは奥座敷、爰へは餘程間敷も隔たり、先程聲のか、つた時、爰へはどうしてござつたと思ひながら、嬉しさに辨へなく、見れば此の木像許り、次手ながら刈屋姫、話して聞かさう。逗留の中に主の

像、晝いてなりとも作つてなりと、伯母が筐に下されと、願うた日から取り掛り、初手に出來たは打ち破り捨て、二度目に作り立てられしを、同じく是れも打ち碎き、三度目に此の木像作り上げて、仰しやるには、「前の二つは形許り、勢魂もなき木像人。是れは又丞相が魂残す筐」とて、下されし主の姿、物をいふまいともいはれず、帝へのおそれ有れば、逢ひたうても逢はれぬ親子。木とな思ひそ刈屋姫、物仰しやつた父上に、逢やつて嘸嬉しかる、母も本望遂けました。」と、親子三人悦びの、中へのさく立ちかへる、太郎が爺親土師の兵衛、「覺壽是れにおはするか、お客人のお立ちも明朝出立の拵へさぞ取込み。役に立たずとお見舞申し、手傳ひでも仕らうと、参りがけに輝國殿の旅宿へもちよと付け届け、俸が幸ひ居り合はせ、用意も大方出來たと聞き、先づは大慶。冤角する内もう暮相、一まづ歸つてお立ちの時分、又参るのも老足なれば、お邪魔ながら是れに居る。心遣ひ成し下されな。」兵衛殿の義理々々しい、嫁子の所は内同然、斷りに及ぶ事か、用が有らば遠慮なく、被仰つたがよいわいの。刻限まではコレ立田、和女の部屋にお寐間をとりや、後程お目にからん。」と、姫を連立ち入り給へば、後は親子が小聲になり、「コリヤ道々謀し合はした通り、太郎ぬかるな。」「氣遣ひなさるな親人。」と、奥と部屋とへ別れ行く。座敷々々は燭臺照らし、今宵限りの御奔走とりんく騒ぐ許りなり。土師の兵衛は一問より、密と抜け出で前裁の、勝手覚えし切戸口、錠捻ぢ切つて押し

ひらけば、外から相圖の挾箱、差し出す中間徒士若黨、「コリヤやい、言ひつけた人数の装束、丞相を
 迎ひのはり興、スハといふ時間に合はせ。」と、家來共先へ歸し、挾箱引んだかへ、月かけ漏る、木の
 間木の間、うそく窺ふ同腹中、「親人お首尾は、件の物は参りしか。」「倅氣遣ひ仕るな。」「コリヤ
 此の中に計畧の彼の一物、大事の談合こ、へく。」と、大庭の池の邊で嘯く親子、宵から素振に氣を
 つけて、宿禰太郎に目放しせず、立田の前が物かけより、聞くともしらず宿禰太郎、「さき程お聞きな
 さる、通り、判官代輝國、迎ひに参るは八つの上刻、時平公よりお頼みの、菅丞相殺す工面。質物
 仕立迎ひと偽り、請取つて途中でぐつとはいふものの、一番鶏のうたはねば、姑の片意地、なごり
 惜しんで渡されまい。八つ鶏の啼かぬ先に、宵啼する鶏是れに有るか。」と、挾箱より取り出し、「ホ
 ホ皮膚のよい白相國、とかうする内もう夜半、一調子はり上げ、存分にうたうてくれ、一聲聞かねば
 落ちつかぬ。親人なぜ鳴きませぬの。」「イヤ其の分では鳴かぬはず、宵鳴は天然自然、極めては鳴か
 ぬもの、それを鳴かすが秘密事。大竹の中へ熱湯を入れ、其の上にとまらすれば、陽氣の廻るを時節
 と心得時をつくる、留竹も挾箱に入れて来た、臺子の湯もたぎつてある、釜ぐちそつと取つてこい。」
 「ホ、取つてくるは安い事、湯を仕かけても鳴かぬ時は。」「ハテくどく、鳴かぬ時は又分別。」と、
 親子が奸計、「南無三寶一大事、先へ廻つて、母様へおしらせ申して、イヤさうしては、イヤはいいで

は又こちらが、いうてはあちらが、こちらが。」と、心迷ひし胸撫でおろし、「宿禰様、太郎さまは何處
 に。」と尋ぬる聲に、はつと二人がはいまうけでん、鶏隠す挾箱、あたふたしめて左あらぬ風情、「イ
 ヤ事々しう呼び立つるは、何ぞ急な川でも有るか、さもない事なら不遠慮千萬。親人も此の宿禰も、
 肝に徹へて悔りした。」と、いふ顔つれく打眈め、「お前方の悔りより、わしに悔りささしやんした、
 聞えぬ連合舅君、質迎ひを拵へて、菅丞相殺さうとは、あなたに何ぞ恨みが有るか。但しは時平
 に頼まれし、慾には馴染の女房も捨て、母様の義理も思はずか。お前は捨てる心でも、わしや得捨て
 ぬ太郎様、コレ申し爺父様、思ひとまつて下さりませ。」と、舅を拜み夫を拜み、聲も得立てぬ貞女の
 思ひ、涙操を顯はせり。兵衛は宿禰にめくばせし、「イヤはや眞身の意見に逢うて、親も倅も面目な
 い。向後心改める、姫女此の事聞き流しに。」「ア、勿體ない、聞き流さいでよいものか、御得心と
 有るからは、此の世許りか未來まで、變らぬ夫婦舅君、まだ如月の餘寒も烈し、火燵に膚温め、酒一
 つ上げたい、サアお出で。」と先に立田がそれこそを、心得太郎が後袈裟、肩先五寸切られながら、振
 り返つて掴みつき、「エ、是れ人でなし、卑怯者、一人の手にも足らぬ者、欺し殺しが本望か、女の義
 理を立て過し、悔しや無念。」と罵る聲、おとほね立てたと宿禰が下著、棲先口へ押し込み捻ぢふせ、
 肝先ぐつと一割り、兵衛は前後に心を配り、「倅息は絶えたか。」「氣遣ひめすな只今とめ、扱此の死

たる立田が死骸、驚き騒ぐ家内の騒動。太郎は鼻も動かさず、「殺した奴は内にある、詮議済むまで門打つて、家來共動かすな。」と、喚きちらせば母覺壽、姫もかしこへ轉び出で、「コハ誰人の所爲ぞや、先からお顔を見なんだは、伯母様のお傍にと、思ひ設けぬ此の死骸。父上には生別れ、お前には死別れ、時も異らず日も異らず、悲しきつらさ一時に、かかる例も有る事か。」と、老母に取り付き悔み泣き、「オ、道理々々、そなたはおれが傍にと思ひ、おれはそなたが傍に居ると、思ひ違ひが娘が不運、母が因果でおじやるわ。」と、かつばと伏して正體なし。太郎傍へ立ち寄つて、「涙が死人の爲にはならぬ、女房共への追善には、殺したやつをひつぱり切り、是れにて詮議仕らん。」と縁端に大胡坐、「男女に限らず家來のやつばら、片端から詮議する、マアとつ付きにをる宅内め、身が前へ出あがらう。」
 「ナイ／＼ない。」と、御前にかつづくばひ、「人はしらず、拙者めにお疑ひはござないはず。お死骸を取り上げた、御褒美を下されうで一番にお呼び出し、忝い義でござりまするでござります。」
 「ヤアまが／＼しい褒美とは横著者め、立田が死骸池に有るを、おのれは如何して知りをつた。サ、それ吐せ。」
 「イヤあの尻も天窗も見えう筈はござりませぬ、池の深みへ芝から傳うた血を證據に。」
 「ヤアぬかすな、提燈の灯明で、それがそれと知れるものか。うぬが殺して沈めた池、外の者がどうしてしらす、血の分では言譯立たぬ。」
 「是れはお旦那無理おつしやる、言譯立たうが立つまいが、池が血へ流

れ込んだ、其の外は存じませぬ。」
 「ヤア池が血へ流れたとは、血迷うて何ぼさく。きやつ詮議場で水くらはせ、白状さする、それ引き立て。」と宿禰も續いて立つ所を、老母押しとめ、「イヤ責めるに及ばぬ詞のてん／＼、嬉しや娘の敵がしれた。」
 「ハアせめなどは天晴お目高、科極まつた罪人、女共へ手向ける成敗、大袈裟に打ち放す、腕を左右へ引つばれ。」と、刀提げ立ち寄る宿禰、「イヤ是れ成敗は常の科人、袈裟に切つては只一思ひ、苦痛させねば腹が癒ぬ。娘の敵初太刀は此の母、跡は増殿刀を借る。」と、甲斐々々しくも裾引き上げ、向ふ目當は奴にあらす、油斷太郎が弓手の肋骨、突込む刀に宅内は、命拾うて逃けて行く。宿禰太郎は急所をさされ、腕き苦しむ息の下、「身共に何の科有つて、老筆めが。」といはせも果てず。「覺えないとは、いはさぬ／＼。我が科を人に塗り、成敗をして見せだて、裾はせ折つて下著の袈裟切れて有る。其の切れは、コリヤ立田が口に聲立てさせぬ無理殺し、齒をかみしめ放さぬ袈裟、切つた事を打忘れ、おのれが科をおのれが顯はす極重悪人。死骸の前で敵を取る、母が娘へ手向の刀、肝先へ徹へたか。」と、大の男を仕とめる老母、流石に河内郡領の、武藝の筐残されし、後室とこそしられけれ。稍時移れば、「判官輝國、只今是れへ御出で。」と、家來が申すに老母は驚き、「丞相は先程お立ち、誰を迎ひに、心得ぬ事ながら、此方へ通しませい。刈屋姫は奥へ行きや、此奴はまちつと苦痛をさす。」と、刀を其の儘體押し退け出で向へば、輝國も早入り來り、「お

迎への刻限、御用意よくば早お立ち。」と、申す詞の先折つて、「否コレ輝國殿、何おつしやる、丞相の迎ひに足下の家來が先程見え、請取つて歸られたは、もう一時も先の事。」「ヤアこれく伯母御、身が家來に渡したとは、旁以て心得ず。鶏の聲に刻限量り、只今鳴いた旅宿の鶏、八つに參る迎ひの約束、家來といはうが、直に身共が參つたとて、刻限も來らず、鶏も鳴かぬ先、渡したというては濟びまい。船が、りの其の間、伯母御に逢はすは、此の輝國が情の用捨。今日の今になつて、名残も一倍、鳥へはやらぬ、渡したといへば夫れで濟むと、鼻の先な女子の料簡、菅丞相の仇にこそなれ、爲にはならぬ。僞りな申されそ。」「イヤ僞りは申さぬ、庭で鳴いた鶏の聲、そこへござつた迎への衆、渡したに違ひはないが、請取らぬとおつしやるので、娘が最後婿めがあのだま、思ひ合はせばさつきに來たは質迎へ。」「コレ伯母御、内の騒動死人の有る上、質迎へ諱では有るまい、識者ども所爲で有らう。一時違へば三里の後れ、ほつ付いて取り返さん。」と、せきにせいてかけ出す輝國、「ヤア、判官先づ待たれよ、菅丞相は是れに有り。」と、一間より出で給ふ。覺壽は恟り、「さつきに別れた菅丞相、そこにはどうしてく。」と、不審し立つも道理なり。判官輝國打笑ひ、「ぬけくとした伯母御の僞り、暫時の仰天、丞相是れに在せば、輝國が安堵々々。見え渡つた此の御難儀、譯も聞きたし、力に成つて進ぜたけれど、私ならぬ警固の役目、はや刻限も移りぬれば、いざ御立

ち。」と勸むる所に、「先程見えた警固の役人、たつた今門前まで。」「何ぢや警固が、ハテよい所へ戻られた、諱つかぬ覺壽が證據、是れへ通し、輝國殿へ見せませう。」「イヤ身が名を銜つた質役人、直に逢うては悪しかるべし、忍んで様子を窺はん。」と、丞相諸共一間の障子、引き立て内に隠れ居る。輿に先だつ警固が大聲、「コレ老母、輝國の名代とけあなづり、とでもない物身共に渡し、能うぬつけりさされたの。」「是れは迷惑、菅丞相を請取りながら、とでもないとは何おつしやる。」「アレまだぬつべり、丞相は丞相でも、木で作つたはこつちにいらぬ、肉付の菅丞相、替へる氣で持つて來た木像、コリヤ此の輿に。」といふに覺壽も心付き、「エ、忝い、扱は魂を籠められし木像で有つたかい、猶も證據を見届けん。」と、心の悦びおし隠し、「此方の言分合點がいかぬ、其の木像見せさつしやれ。」「オ、しやちこぼつた荒木作り、サア今見せう。」と明ける戸の、輿に召したは木像ならぬ優美の姿、菅丞相莞爾と笑うて立ち出で給へば、警固はぎよつと呆れ顔、覺壽も違ひし心當、障子の内と今見る姿、心どきまぎ疑ひながら、「ア、よう戻して下さつた、慥かに伯母が請取りました。」「ヤアどこへく、そりやならぬ、とはいふものの、連れて歸つて見たのは木像。すりかへられたと氣がついて、かへに戻つた、爰では眞の菅丞相。おれが目の悪いのか、見所に寄つて變るわい。」「イヤ變らうが變るまいが、戻された菅丞相、いざ此方へ。」と立ち寄る覺壽、「ヤアのぶとい。」と突き飛ば

し、丞相を又輿に乗せ、戸を引き立てて家來に向ひ、「コリアわいらも様子を見る通り、いかにして
も怪しい事共。此の分では歸られず、念の爲家捜しする。」と、踏込む先に宿禰太郎、半死半生のた打
つ苦しむ。「南無三寶、太郎様が切られてござる、旦那々々。」と呼ぶ聲に、警固の中から親兵衛、前後
も更に辨へず、走り寄つて引き起し、「コリア倅、此の深手は何奴が所爲、相手を知らせ。」と氣をせい
たり。「なう兵衛殿、相手は姑。」「ア、私が手にかけた。」「ヤア壻を手につけて、落著き自慢、何科有
つて身が倅を。」「ヤアとほけさしやんなあひやけ殿、そいつが立山を殺した時、こなたも手傳ひ仕や
るがの、娘の敵切つたが何と。贖迎への棟梁殿、何も角も顯はれ時、さつぱりというた。」「エ、
残念々々、倅めが出世を思ひ、時平公に一味して、菅丞相を殺さんため、鶏に宵鳴させ、十が九
つ仕おぼせた兵衛が方便、腐り婆めに喫ぎ出され、殺された倅が敵、覺悟ひろけ。」と飛びかゝるを、
ヤアさはさせじと判官輝國、木陰より顯はれ出で、覺壽をかこうてつつ立つたり。「ヤアどなたが出て
もびくともせぬ、兵衛がたくみの破れかぶれ、死物狂の働き見よ。」と、切つてかゝればかいくゝり、
持つたる刀踏み落し、利腕つかんで引つくりかへし、足下に踏み付け大音上げ、「ヤア輝國が家來共、
贖者めらを片端から、く、れく。」といふ聲に、始めのぎせいぬけくゝに、一人も残らず逃げ失せ
り。覺壽はとつかは輿の戸の、明るる間隙やお氣詰りと、内を見ればこは如何に、筐の木像又びつく

り、是れはいかにと立ち歸り、此方の障子押し明くれば、「伯母御騒がせ給ふな。」と菅丞相の御詞、
爰でも悔り彼處でも、悔りびくり心に心の迷ひ、「どちらがどうちや輝國殿、目利なされて下され。」と、
問はるゝ人も問ふ人も、呆れ果てたる許りなり。丞相重ねて、「輝國の迎ひ遅參故、睡むともなく暫
時の間、物騒がしく聞えし故、窺ひ見れば兵衛が企み、太郎が所爲。立田の前ははかなき最期、是非
もなし、伯母御の心底さこそく。某是れへ來らずば、かかる歎きも有るまじ。」と、今更悔みの御
涙、「イヤ娘が命百人にも、かへがたき大事のお身、怪我過ちのなかつたを悦びこそすれ、何の泣こ、
何のく。」といふ目に涙、なう輝國殿、悪事の元は其の兵衛、此の世の暇を早うく、太郎も共に。」
と立ち寄つて、警引き上げ、「丞相の堅固の有様、おのれ親子に見せたが本望、娘が恨みも晴れつ
らん。」と、刀を抜けば息絶えたり。「エ憎いながらも不便な死態、有爲轉變の世の習ひ、娘が最期も
此の刀、壻が最期も此の刀、母が罪業消滅の、白髪も同じく此の刀」と取り直す手に、警拂ひ、「初孫
を見るまでと、貯へ過した恥白髪、孫は得見いで憂き目を見る、娘が菩提逆縁ながら、弔ふ此の尼。
種々因縁而求佛道、南無阿彌陀佛。」と唱ふれば、菅丞相も唱名の、聲も涙に廻向有る。判官輝國
大きに感じ、「伯母御前に先とられ、跡にさがつたおのれが成敗、強慾非道の皺頭。」と、水もたまらず
打ち落す。覺壽は木像抱き抱へ、菅丞相の右手の方、御座を並べて直し置き、「兵衛親子が企みも顯

はれ、何も角も納まりし、此の木像の不思議な働き、かかる例も有る事かや。「いやとよ最前もいふごとく、匹夫々々がたくみも顯はれ、我が急難を遁れしも、暫時の睡眠前後をしらず、木に彫み筆に畫く、例は本朝名高き繪師、巨勢金岡が書いたる馬は、夜なく出でて萩の戸の萩を喰ひ、唐土にも名畫の譽、吳道子が墨繪の雲龍、雨を降らせし例も有り、又神の尊像木佛などの、人の命に代らせ給ふ例は、數へ盡されず。菅丞相が三度まで造り直せし物なれば、木にも魂備はつて、我を助けし物やらん。讒者の爲に罪せられ、身は荒磯の島守と、朽ち果つる後の世まで、筐と思召されよ。」と、仰せは外にあら木の天神、河内の土師村道明寺に、残る威徳ぞ有りがたき。輝國四方を打眺め、「思はざる義に隙を取り、夜も明けはなれ候へば、御立ちぞう。」と申すにぞ、また改まる暇乞、「伯母が寸志の餞別せん、用意の物こなたへ。」と、刈屋姫の上著の小袖、かけたる伏籠諸共に、御傍近く取り直させ、「浪風荒き楫枕、餘寒を凌がせ申さん爲、伯母が心をたきしめた、小袖を島まで召さる、様に、輝國のお世話ながら頼みまする。」と有りければ、「是れは宜しき進せ物、苦の香防ぐとめ木の小袖、家來に持たせ參らん。」と、立ち寄り伏籠に手をかくる。丞相暫しとゞめ給ひ、「御恩を厚く籠め給ふ、伏籠にかけし此の小袖、中なる香はきかねども、名は大方伏屋か刈屋、伯母御前より道眞が、申し請けし女子の小袖、我が身にはあはぬ筈。身幅も狭き罪人が、たゞ此の儘に、お預け申す。我が小袖と

思召し、立田の前が追善の、佛事も共に。」と伯母御前の、心を悟る御詞、骨身に徹へ忍び兼ね、思はずわつと聲立てて、歎くに扱はと輝國も、心を感じ萎れ入る。覺壽が心は伏籠の内、「泣いたは結句あの子が爲、別れにちよつと只一目、伯母が願ひを叶へて。」と、立ち寄る袖を引き留め、「お年故のそら耳か、こゝ鳴いたは慥かに鶏、あの聲は子鳥の音、子鳥が鳴けば親鳥も、鳴くは生有るならひぞ。」と、心の歎きを隠し歌、鳴けばこそ別れを急げ鶏の音の、聞えぬ里のあかつきもがなと詠じ捨て、名残はつきずお暇と、立ち出で給ふ御詠歌より、今此の里に鶏無く、羽た、きもせぬ世の中や、伏籠の内をもれ出づる、姫の思ひは羽ぬけ鳥、前後左右をかこまれて、父は元より籠の鳥、雲居の昔忍ばる、左遷の身の御歎き、夜は明けぬれど心の闇路、照らすは法の御誓ひ、道明らけき寺の名も、道明寺とて今も猶、榮えまします御神の、生けるが如き御姿、爰に残れる物語、盡きぬ思ひにせきかねる、涙の玉の木櫛樹、數珠の數々くりかへし、歎きの聲に只一目、見返り給ふ御容顔、是れぞ此の世の別れとは、知らで別る、別れなり。

第三

鳥の子の巢に放れ、魚陸に上るとは、浪人の身の喩へ種、菅丞相の舍人梅丸、主君流罪なされ

てより、都の事共取りまかなひ、御臺のお行方尋ねんと、笠ふかふくと深緑、土手の竝木にさしか、れば、向うからも深編笠、我に違はぬ其の扮装、互に夫れぞと近く寄り、「梅王丸か。」「コレハ、櫻丸、ヤレそちに逢ひたかつた。」「マア話す事、聞く事有り。」と兄弟木陰に笠傾け、「叔先づ問はう、其方は日外智茂堤より、宮姫君の御跡したひ尋ね行きしと、内方八重の物語、何とお二方に尋ね逢うたか。」「成程道にて追付き奉り、菅丞相御流罪と聞くより、對面なさしめ奉らんと、安居の岸まで御供せしに、御對面叶はず。輝國殿の計らひにて、御歸洛願ひの妨げと、御二方の御縁も切られ、姫君は土師の里伯母君の方へ御出で、齋世の宮様は、法皇の御所へ供奉し奉り、事治まりしといひながら、納まらぬは我が身の上、冥加に叶ひお車を引く、其の有り難いこと打忘れ、賤しい身にて戀の取持、終には御身の仇となり、宮御謀叛と謔言の種拵へ、御恩請けたる菅丞相様流罪にならせ給ひしも、皆此の櫻丸がなす業と、思へば胸も張り裂く如く、今日や切腹、あすや命を捨てうかと、思ひ詰めは詰めたれど、佐太に坐する一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、竝べて見ると當春より、悦びいさみおはするに、我一人缺けるならば、不忠の上に不孝の罪、せめて御祝儀祝うた上と、詮なき命けふまでも、存へる面目なさ、推量あれ梅王。」と、拳を握り齒を喰ひしめ、先非を悔いたる其の有様、梅王も「理と、暫し詞もなかりしが、オ、道理々々、我とても主君流罪に逢ひ給

ふ上は、都に止まる筈なけれど、御館没落以後、御臺様のお行方しれず。先づ此方を尋ねうか、筑紫の配所へ行かうかと、とつおいつ心ははやれど、其方がいふ如く、年寄つた親人の七十の賀を祝ひも此の月、是れも心に懸る故思はず延引。互に思ひは須彌大海、是非もなき世の有様。」と、兄弟顔を見合はせて、涙催す折からに、鐵棒引いて先拂ひ、先退いて片寄れと、雜式がいかつ聲。梅王立ち寄り、「誰様ぞ。」と尋ねれば、「本院の左大臣時平公、吉田への御參籠、出しやばつて鐵棒喰らふな。」と、言ひ捨てて急ぎ行く。「何と聞いたか櫻丸、齋世の宮、菅丞相を憂目に逢はせし時平の大臣、存分いはうぢや有るまいか。」「成程々々よい所で出つくはした。」と、兄弟道の左右に別れ、尻引褰け身構へし、今や來ると待ち居たる。程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる、時平の大臣が路次の行粧、宛ら天子の御幸の如く、隨身青侍前後に列し、大路せばしと輾らせたり。兩人木陰を飛んで出で、「車やらぬ。」と立ちふさがる。「ヤア何者なれば狼藉する。」と、顔を見れば松王が兄弟、梅王丸櫻丸、「ム、聞えた、主に離れ扶持に離れ、氣が違うての狼藉か、但しは又此の車。時平公と知つてとめたか、知らいでとめたか、返答次第兄弟とて川捨はせぬ。」と、白張の袖まくり上げ、掴み挫がん其の勢ひ、梅王丸冷笑ひ、「ヤアいふなく、氣も違はねば此の車、見違へもせぬ時平の大臣、齋世親土菅丞相、謔言によつて御沉落、其の無念骨髓に徹し、出で逢ふ所が百年目と、思ひ設けし今日只今、櫻丸と此

の梅王、牛に手馴れし牛追竹、位自慢で喰らひ肥えた、時平殿の腕二つ三つ、五六百からはさねば堪忍ならぬ。いはれぬ主の肩持ち顔、出しゃばつて怪我ひろぐな。「ヤア法に過ぎた案外者、アレぶちのめせ、引つく、れ。」と、供の侍聲々に、前後左右に追取り巻く。兄弟は事ともせず、取つては投げ退け擱んでは、ぶち付けく、投げ付ければ、あたりに近づく者もなし。松王焦つて、「ヤア命しらすの亂暴者、何れもお構ひ有るな。御主人の目通り、御奉公は此の時節、兄弟と一つでない忠義の働きお目にかけてん。コリヤやい、松王が引き掛けた此の車、とめらるゝなら留めて見よ。」と、鼻づら取つて引き出す車、「ホ、ウ櫻丸梅王丸、爰になくばいざしらす、一寸なりとやつて見よ。」と、兩人轆に手をかけて、エイ／＼と押し戻せば、牛も四足を立て兼ねて、跡へ／＼とすさり行く。松王車の後方へ廻り、両手をかけて力足、やらんやらじの諍ひは、世にも希なる三つ子の舍人、互に劣らぬ主思ひ。命限り根限り、やつつ戻しつ引き合ふ車、大地は薬研と掘りうがち、土ににえ込む車の轍、「ヤア面倒な畜生め。」と、轆を放せば逸散に、牛は離れてかけり行く。車の内ゆるぐと見えしが、御簾も飾りも踏み折りく、踏み破り、顯はれ出でたる時平の大臣、金巾子の冠を著し、天子にかはらぬ其の粧ひ、赫々たる面色にて、「ヤア牛扶持くらふ青蠅めら、轆にとまつて邪魔ひろがば、轍にかけて敷き殺せ。」「ヤアさいふ大臣を敷き殺さん。」と、二人が力に、車を宙だめ、引つくりかへすを返され

じと捻ぢ合ふ松王、右へ押せば左へ押し、上げつ下しつ二三度四五度、爰を先途と揉み合ひしは、祭の神輿に異ならず。時平は上より金剛力、どうど踏んだる其の響、車も心木もこな微塵、碎けし轍を銘々提げ、大臣を打たと振り上ぐる。「ヤア時平に向ひ推参なり。」と、赫と睨みし眼の光、千世界の千日月、一度に照らすが如くにて、遺の梅王櫻丸、思はず跡へたぢ／＼、五體竦んで働かず、「無念無念。」とばかりなり。「なんと我が君の御威勢見たか、此の上に手向ひすると、御目通で一討。」と、刀の柄に手をかくれば、「ヤア松王待て／＼。」と、車より飛んでおり、「金巾子の冠を著すれば、天子同然、太政大臣となつて、天下の政を執り行ふ時平が、眼前血をあえすは社参の穢れ、助けにくいやつなれども、下郎に似合はぬ松王が働き、忠義に免じて助けてくれる、ハレ命冥加な蛆蟲めら。」と、邊を睨んですゝみ行き、ふり返つて松王丸、「よい兄弟を持つて兩人ともに仕合者、命を拾うた有り難い、忝いと三拜せよ。」と、いはれて兩人くわつとせき上げ、「エ、おのれにも言分有れども、親人の七十の賀、祝儀濟むまでナウ梅王。」「オ、其の上では松の枝々切り折つて、敵の根を断ち葉を枯らさん。」「オ、夫れは此の松王も親父の賀を祝うた跡で、梅も櫻も落花微塵、足元の明るい中、早く去れ。」「ヤア推参な、歸るをおのれにならうか。」と、詰め寄り／＼兄弟三人、互に残す意趣意恨、睨んで左右へ三重別れ行く。春先は、在々の鋤鋤までも樂々と、遊びがちな一農、一番村で年古

き、人に知られし四郎九郎、律義一遍取得にて、菅丞相の御領分、佐太に手がるき下屋敷、お庭の掃除承り、松梅櫻御愛樹に、培ひ水の養ひも、根が農の鍛仕事、我が身の老木厭ひなく、幹をこやし百姓業、畑の世話より氣樂なり。堤端の十作が鍛うち荷け、門口から、「四郎九郎殿内にか。」と這入るを見付け、「こりや十作、畑へか。」「イヤ今仕舞うて戻つたりや、鼻がいふには、何やら目出たい祝ひぢやて、大きな重箱に、眼へはひる様な餅七つ。朝茶の鹽にも喰ひ足らねど、もらはぬよりも忝い、禮もいひたし、祝ひとは、マア何でござる。」「サイノ菅丞相様のふつて涌いた御難儀、お下に住む俺らが、身祝ひ所ぢやなけれど、爲にやならぬさかいで爲るは爲るが、世間へも遠慮が有つて、彼岸園子程な餅七つ宛配つたは、此の四郎九郎丁度七十、此の春年頭のお禮に登つた時、おらが年をお尋ね。七十と申したりや、「古來稀な長生、其上珍らしい三つ子の爺親、禁裏から御扶持下され、倅共は御所の舍人、目出たいく、産まれ月産まれ日、産まれ出た刻限違へず、七十の賀を祝へ、其の日から名も改へ。」とて、ナウ聞かしやれ、伊勢の御師か何ぞの様に、白大夫とおつけなされた、則ち今日が誕生日。白黒まんだらかいは掃溜へ投つて退け、今日から白大夫といふ程に、さう心得て下され。」「夫れはめでたい、次手ながら問ひましょ、三つ子産むと扶持下さる、其の謂れも聞かしゃつたか。」「サイノ死んだ女房が産んだ時は、邊鄰の外聞ひよんな事ぢやと、思うたがもつけ

の幸ひ、三つ子の爺親、一代は作り取りの田地三反、日本ばかりぢやないけな、唐までもさうぢやて。男の子なりや御所の牛飼、女郎なれば東童とやら、是れも御所でつかはる、法式は忝いもの。旦那殿は流罪なれど、おらは所も追立てられず、下された田地は其の儘、そちの鼻も若い程に、産ますならおらにあやかりや。」と、話の中道辿りくるは、櫻丸が女房八重、今日は舅の祝ひ日とて、風呂敷包片手に提げ、「嬉しや爰ぢや。」と等取れば、「ホ、櫻丸が女房八重か、早かつた。外の嫁御も揃うてくるか、マアく上つてか、へも解きや。」「アイくまだ皆様はお出でないか、遅かると氣がせいて、淀堤から三十石の飛び乗り、船の足のはやいで、草臥れもせず早う來たが仕合でござんする。」「ヤコレ四郎九殿、お客さうな、もう往にましょ。」「エ、是れ四郎九とは、もの覺えがない十作、白大夫早忘りやつたかいの。」「イヤ忘れはせぬわいの、餅の祝ひとは格別、名酒呑まねば何時までも四郎九郎。」「ハレヤレ盛つた酒を飲まぬとは、但しはまだ呑み足らぬか。」「エ、ぬけく」と諷いふわちよ、おらに酒いつ盛つた。」「オ、先刻に盛つた、コレ樽や徳利は目に立つ故、餅の上へ茶笑の先で、酒鹽打つてやつたので、二度の祝ひ濟んだぢやないか。」「エ、夫れで聞えた。鼻が酒くさい餅ぢやというた、外へは遠慮でさう仕やると、おらは日來懇だけ、晩に來て寢酒一杯、お客是れに。」と出でて行く。「嫁女アレ聞きやつたか、今の世の人は、きめこまかで、おらが始末の手目見付けて、

ば、知れうと思つた喧嘩の筋、知つて居ても言はぬか。同じ胤腹一時に生まれた俸でも、心は別々、
 よう似た顔を存といへど、夫れもそれには極まらぬ、女夫子も有り、又顔の似ぬ子も有る。マア大概
 顔が似れば心もよう似て、兄弟の中も能い物ぢやが、おらが俸共、誰が見ても一つ作りとは思はぬ。
 生ぬるい櫻丸が顔付、理窟めいた梅王が人相、見るから如何やら根性の悪さうな松王が面構へ。ヤ千
 代が傍で廬相いうた、氣にかけてたもんな、マア怪我がなうて嬉しうおりやる。怪我の次手に、孫め
 は健なか、連れて来て顔見せいで、ヤア冤かういふ中、もう七つぢや。おれがうまれたは申の刻限、
 料理も大方出来たである、嫁達膳を出さぬかい。「アイくく」。刻限の過ぎるまで、連合衆はなせ
 見えぬ、千代様八重様、道まで往て見て来まいか。爰で待つより三人ながら、ござんせ往かう。「ヤ
 ア噴達何いふぞい、子供共は来て居るわい。「アノ来てぢやとは、どこにく」。エ、鈍な嫁共、其
 處に居るを得しらぬかい。コレ三本のあの木が子供等、梅王松王櫻丸、顔は残らず揃うて有る。勿體
 ない菅丞相様、哺める様にいはしやれました、生まれ日の刻限が違や悪い。祝儀には陰の膳も居る
 る慣ひ、サアく早う。」と白大夫が、いふに猶豫も成りがたく、俄に盛るやら箸打つやら、椀の向う
 の小皿に鱒、「先づ一番に親父様、是れでお居りなされませ。」と、給仕は元より慣はねど、見馴れ聞き
 馴れ舉動、八重が配膳御所めけり。「イヤおれも彼處へいこ。」「イヤ土間では冷が上ります、やつぱ

り爰で。」と押し供へ、是れから面々夫の給仕、膳を捧げて庭に下り、此の梅の木が梅王殿、枝振ずん
 と日頃の氣質、八重が連添ふ男振、木ぶりも吉野の櫻丸、是れは千代まで添ひ遂げる、女夫が中の若
 縁、色も艶も勢ひよい、松王殿で子達も揃ふ。「サア親父様、目出たうお箸なされませ。」「ホ、なされ
 うともなされうとも、親甲斐に座が高い、子供共へドレ挨拶。」「ハテもうそれには及びませぬ、お加
 減のさめぬ内。」「否々お春そでおじやらぬ、親でも子でも極まつた辭宜作法。」と、庭に下りるも健や
 かに、樹の前に畏まり、「イヤ是れ子供衆、何にも御座らずとも、かう参つて下されい。親が折角おり
 ての辭宜、辭宜返が仕たうても、動かぬは知れて有る、爰でく。ハ、ハ、ハ、噴達、餅を替やいの。」
 と、尻もちついて悦び笑ひ、我が膳に押し直り、箸を取るより、「ムウく扱鹽梅ぢや、味いわく。
 三人の嫁女達、給仕も片いさせぬ様に、三杯は喰ふ合點で、明おじやらしませぬぢやなんよえ、ハ、
 ハ、こりや新しい三方、土器、誰が持つて来ましたぞ。」「イヤ夫れは八重さんの。」「ハテ氣が付いて
 忝い、春も何ぞくれるかい。」「眞に忘れてをりました。」と、扇三本袖土産、中の繪は梅松櫻、お子
 達の數を祝うて、三本ながら末廣、目出たう祝うて上げます。」「こりやめでたい忝い、中の繪
 も話で知れた、明けて見るに及ばぬ、此の儘く、コレ戴きますく。」と、機嫌に千代が袂から、「是
 れは切の有りあひで、私が縫うた手づ、頭巾、頭に合はずば縫ひ直さう、お召しなされて下さんせ。」

けたに似ぬ腕なしめ。」オ、留めらるゝを幸ひとは、我が心に引きくらべて、松王には慮外の雑言、身が女房が留めたより、其方が女房が、親にもまだとの一言、肝先へきつとあたり、怵へ〜こらへたが、もう堪らぬ。眞劍の勝負は親人に逢つての後、夫れまでの腹癒に砂被らせねば堪忍ならぬ、千代に是れを預ける。」と、兩腰抜いて放り出し、裾引褰けて身拵へ、「ホ、畜生めが、こりやよい料簡、櫻丸が来るまでは松王が命、松王に預ける。」と、同じく兩腰放り捨て、「刃物を渡せば血はあやさぬ、女房共邪魔するな。」とつと寄つて、縁より下へ踏み落せば、さそくの松王、落ち様に諸足かけば梅丸、眞逆様に落ち重なり、掴み合ひ擲きあひ、組んでは放れ離れては又組み合ひ、捻ぢつけ引き伏せ蹴つ踏んづ、雙方力も同い年、血氣盛りの根比べ、千代と春とは二人の兩腰、取られもせうかと氣遣ひ半分、傍へも寄られずハア〜と、心を焦り氣をもみ上げ、「どちらが勝ちも負けもせず、擲き合うたが二人の存分。梅王殿もうよいわいな、松王殿もう置かしやんせ、やめて〜。」といふをも聞かず、勝負つかではむだ働き、投げてくれんと松王丸、嵩に掛つて押す力、ひるまぬ梅王つつかる、肩先ひねつてかつくりさせ、横に抱かへる松の木腕、劣らぬ肘骨梅の木腕、絡みもちつて押し合ふ力、雙方一度にこけかゝり、もたる、拍子櫻の立木、土際四五寸残る木の、上はほつきりぐわつさりと、折れたに驚く相嫁同士、二人が勝負も破れ角力、共に呆れて手を打ち拂ひ、うろつく中へ早下

向、「アレ親父様のお歸りぢや、白大夫様の。」といふ聲に、二人は肩入れ裾おろし、腰刀差す間も有らず戻られし、年は寄つても怖いは親、上へもあがらず犬蹲居ひ、今日の御祝儀お目出たいと、祝儀は述べても赤面し、塵をひねらぬばかりなり。親はほやく機嫌顔、「噂達が先へ来て、七十の賀を祝うてくれたで、今日の祝ひはさらりと仕舞うた。しれてある刻限、遅いはなんぞ障りが有つて來ぬに極めた梅王松王、能うこそ〜來てくれた。コレ二嫁女、煮くちたで有らうが、雑煮祝はしたもつたか。」と、折れた櫻は見ながらも、誰が所爲ぞと咎めせず、呵る所を呵らぬ親、一物有りとしられたり。梅王丸、懷中より用意の一通取り出し、「祝儀濟んで候へば、私の所存の願ひ、是れに書き付け候。」と、親の前に差し出せば、松王も又一通、「身の上の願ひ是れに有り。」と、同じ所へ直せしは、言ひ合はせたる如くなり。白大夫打笑ひ、「心安いは親子兄弟夫婦斯う並んだ中、願ひ有らば口では言はいで、ぎつとした此の書付、さらば俺もぎつとして、代官所の格で捌こ」と願書手に取り上げ、つぶつぶ讀むも口の中、願ひは何やら聞えねど、春と千代とは夫の心を知つて居る筈。跡先を知らねば案じるは八重一人、三人の兄弟鬩諍、親父様お頼み申し、今日中直しと言ひ合はした、千代様春様こりや何ぞい。何を言うてもこちの人、櫻丸殿ござらぬ故、心當が皆違つた。道で眩暈が發つたかと、見えぬ男を案じるやら、二人の願ひも氣にかゝり、小首傾け案じ居る。親父は二通讀み仕舞ひ、「コリ

ヤ梅王、其方が願ひに、旅へ立つ隙くれとは、ウ、推量するに外でも有るまい、菅丞相のござる鳥か。「成程々々、結構な御殿に引きかへ、埴生の小屋の御住居、御用聞く人なければ、梅王下つて御奉公仕らん、身のお暇。」と申しける。「ム、恩を知らねば、人面獸心というてな、顔は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心。コリヤやい、御臺様や若君様、おかはりも遊ばされず、御座所も知れた上、旅立の願ひぢやな。」「イヤ御臺様は、其れ以來お目にも懸らず、御座所も存じませぬ。併し女儀の御事なれば、若君様とは又格別、菅秀才の御事は慥かに。」といはんとせしが、松王を尻目につけて、「慥かに所は存ぜねども、息災に御座有る噂。」「アイ馬鹿者、大切な菅秀才御息災なを聞いたばかり、お目にもかゝらず有家も知らず、夫れでおのれ忠義が濟むか。女儀の身と吐しをる御臺様は、主ぢやないか。コリヤやい、尤も御不自由な配所のお住居、傍へ參つて御用を聞く、膝行役の奉公は、此の白大夫がよい役ぢやわい。血氣盛り奉公盛り、菅丞相の縁と有れば、根掘り葉掘り絶やさんとて、鶴の目鷹の目、油断ならぬ讒者の所爲。すはといふ時身を惜しませず、御用に立つ所存はなうて、膝行役を願ふは命が惜しいか、敵が怖いか、旅立の願ひ叶はぬ、取り上げぬ。」と願書顔へ打ち付けて、はつたと睨む老の腹立、道理至極に梅王夫婦、誤り入つたる風情なり。「ヤイ松王、そちが此の願ひを見れば、勘當を請けたいとな、ハアハ、神

武天皇様以來、珍らしい願ひぢやな。エ、不孝といはば譬へのない奴、餘り珍らしい願ひなれば、聞き届けてくれるぞ。」と親の料簡、「ハ、ハア忝し。」と悦ぶ松王勇み立ち、「親子兄弟の縁を切る、所存も問はず赦されしは、此の松王が主人へ忠義、推量有つての事なるべし。」「ハ、ハ、如何様、口は重寶な物ぢやな、主人への道立、臍がくねるわい。道も道によつてな、横に取つて行く道を、蟹忠義といふわい。甲に似せて穴を掘ると、勘當請ければ兄弟の縁も離れ、時平殿へ敵對せば、切つても捨てん所存よな。尤も善悪差別なく、主へ義は立つにもせい、親の心に背くをな、天道に背くといふわい。望み叶へてとらする上は人外、早歸れ、隙取らば親子の別れ、竹帚くらはさう。」と筋骨立てて怒り聲、松王は思ひの儘、女房來いと引き立て行く。千代は道に親兄弟、名残も惜しき相嫁の、顔を見る目もあかれぬ涙、袂絞つて出でて行く。「ハレヤレ嬉しや面倒な奴片付けた。ヤイそこな馬鹿者、御臺若君の御行方、尋ねにいかぬかうせぬか。」と、是れも手づようきめ付けられ、「そんなら島へは。」「サア行く所へはおれが行くわい、出て行け。」をこはがるおはる、「八重様跡で能いやうに、お詫言を。」と云ひ捨てて、夫婦は門へ、白大夫は唾を呑み込んで奥へ行く。兄弟夫婦に引きわかれ、取り残されし八重が身の、仕舞もつかぬ物思ひ、門へ立ちそに待つ夫、思ひがけなき納戸口、刀片手に莞爾と笑ひ、「女房ども嘸待ちつらん」と、聲にびつくり走りより、「ヤイいつの間にやら、來たともいは

す、案じる女房を思はぬ仕方。兄弟衆の事について、親父様のお腹立、其の場へは出もせいで、マアなんで此方様は納戸の内に。エ、これナアわけを聞かして〜」と、聞きたがるこそ道理なれ。暫く有つて白大夫、食み出し鐺の小脇差、三方に乗せしを〜と、出づるも老の足弱車、舍人櫻が前に置き、「川意能くばとく〜」と、いふに女房又悔り、「ヤアこりやなんぢや親父様。櫻丸殿どうぞいなア。何で死ぬのぢや腹切るのぢや、切らねばならぬ譯ならば、未練な根性さぎや任せぬ。こなさんが云はれずば、親父様の只一言、案じる胸を休めてたべ、お慈悲〜」と手を合はせ、泣くより外の事ぞなき。「ヤア親人に何御苦勞、是れまで馴染む夫婦の中、所存残さず言ひ聞かさん。某が主人と申すもお畏れ多き齋世の君様、百姓の倅なれども、菅丞相の御不便を加へられ、親人へは御扶持方、御愛樹の松梅櫻、兄弟が名に象り、松王梅王櫻丸、憚り有りや冥加なや、烏帽子子に成しくたされ、御恩は上なき築地の勤め、三人の其の中に、櫻丸が身の幸ひ、人間の胤ならぬ竹の園生の御所奉公。下々の下々たる牛飼舎人、勿體なくも身近く召され、菅丞相の姫君と、わりなき中の御文使、仕課せたが仇となつて、讒者の舌に御身の浮名、終には謀叛といひ立てられ、菅原の御家没落。是非もなき次第なれば、宮姫君の御安堵を見届け、義心を顯はす我が生害。今朝早々爰まで来て、右の段段、生きて居られぬ最期の願ひ、聞き届けて切腹刀、親の手づから下されたわいな女房、我にかはつて

お禮も申し、死後の孝行頼むぞ。」と、義を立て守る夫の詞、女房わつと聲を上げ、「仇なる戀路のお媒介、親王様の御悪名、丞相様の流され給ふ、其の言ひわけに切る腹なら、此の八重も生きては居られぬ。私は残つて孝行せいと、胴慾にもよういはれた。夫れよりはまだ酷い腹切り、禮を申せとは、それが何の禮。無理な事いふ手間で、一緒に死ねとコレ申し、女房の願ひ立てたべ。親父様の思案はないか、コレ俯伏して許りござらすとも、よい智慧出してくださいませ。夫の命生死は、親父様の御詞次第、御前は悲しうござりませぬか。親の手づから此の三方、腹切り刀は何事ぞ。」と、恨みつ頼みつ身を投げ伏し、悶え焦る、有様は、物狂はしき風情なり。白大夫顔ふり上げ、「子に死ねといふ腹切り刀、酷い親と思ふ、言譯ではなけれどな、此の曉は我が身の悦び、いつもより早く起き、門の戸明くれば櫻丸。ヤレ早う来てくれた、陸ならば夜通し、但しは船か、サアまア此方へと呼び入れて、様子を聞けば右の次第、白大夫づれが倅には、驚き入つた健氣者。留めても聞き入れず、今日の祝儀仕舞まで、女房が来て逢はしはせぬぞ、おれが出といふまでは、納戸の内に隠れて居いと、一寸延ばしに命を庇ひ、助けてよいか悪いかは、おらが料簡に及ばず、神明の加護に任さんと、最前祝儀にくれた扇三本。幸ひ繪には梅松櫻、子供の行末祈る顔で、氏神の祠へ直し置き、信を取つて御圍の立願、櫻丸が命乞ひ。中の繪は上から見えぬ三本の此の扇、初手に櫻をとらしてたべ、エ、上ら

せ給へと再拜祈念、取り上げた扇開けば梅の花。南無三、是れは叶はぬ告か、神の心を疑ふ御圖の、取り直しせぬ物なれども、助けたいが一杯で、取り直す次の扇、今度は違うて又松の繪、頼みも力も落ち果てて、下向きや折れた櫻。定業と諦めて、腹切り刀わたす親、思ひ切つておりや泣かぬ、そなたも泣きやんな。」「ヤ、、、、、アレ聞いたか女房ども。櫻丸が命惜しまれて、老人の心遣ひ、御恩も送らず先だつ不孝、御赦されて下されい。下郎ながら恥を知り、義の爲に相果つる。」と、三方取つて戴くにぞ、「もうコレ今が別れか。」と、泣くに泣かれぬ夫の覺悟。白大夫目を瞬き、「潔い俵の切腹、介錯は親がする、其の刀コレ見やれ。」と、懐から取り出すは、願ひ込んだる鉦撞木、「コレ此の刀で介錯すれば、未來永劫迷はぬ功力、利劔即是彌陀號。」と、撞木を取つて打ち鳴らす、鉦もしどろになむあみだく、なむあみだく、なむあみだく、念佛の聲と諸共に、襟押し寛け九寸五分、弓手の脇へ突立つれば、八重が泣く聲打つ鉦も、拍子亂れて、なむあみだく、なむあみだなむあみだ。右の肋へ引廻し、「憚りながら御介錯。」「オ、介錯。」と後へ廻り撞木振り上げ、南無阿彌陀佛と、打つや此の世の別れの念佛。九寸五分取り直し、喉のくさを刎ね切つて、かつばと伏して息絶えたり。八重が覺悟も此の場をさらす、夫の血刀取り上ぐる。枳殻の陰より梅王夫婦走り寄つて、「こりや何事。」と九寸五分もぎとり捨て、親の前にかしこまり、「コレ」先程歸れと有りし時、表

へは出たれど、櫻丸がこぬ不思議と、丞相様の御秘藏有りし、櫻の折れたを詮議もなされぬ、彼是不審に存するから、裏より忍び立ちもどり、始終の様子を承つた。へエ是非に及ばぬあの樹ととも、枯れし命の櫻丸、兄弟の最期餘所に見て、親人の鉦鼓に合はせ、女夫の者が忍びの念佛、あつたら若者殺せし。」と悔む夫婦も聞く親も、八重も死なれぬ身の練言、是非も涙に南無阿彌陀佛と鉦打ち納め、撞木と替る杖と笠。白大夫は片時も早く、菅丞相の御跡慕ひ、島へおもむく理世の旅立、櫻丸が魂魄は未來へ旅立。此の亡骸梅王夫婦を頼むぞと、八重が事までつどく、頼む詞の置土産、冥途のみやけは只念佛、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、南無阿彌陀等打ちかぶり、西へ行く足、十萬億土、亡骸送る親送る、生きての忠義死したる義臣、一樹は枯れし無常の櫻、残る二樹は松王梅王、三つ子の親が住み所、末世に夫れと白大夫、佐太の社の舊跡も、神の恵みと知られける。

第四

唄君を思へばよやヨホイホ、結ほれ絲のハリナ、とけぬ心がつろござる、いよつろござる、つらき筑紫に立つ年月、御いたはしや菅丞相、誰者の業に罪せられ、埴生の小家の起き臥しも、昨日と暮

れて今日は早、延喜三年如月半ば、空も春めく野山の眺め、野飼に召させ奉り、我が樂しみは在郷歌、唄君を思へばよやヨイホ、ハ、ハ、ハア何をがなお氣晴らし、しはらくさい、どつてう聲、牛殿の手前も面目ない、エ、見れば見る程見事な毛竝、角の構へ眼の備へ、頭持の様子、骨組肉合總毛一色、眞黒黒牛、渡孺子も及ばぬ色艶、天角地眼、一黒直頭、耳小齒違、天晴御牛候よ、ちよくらのちよせいと譽めにける。菅丞相はめづらかに、聞き馴れ給はぬ譽詞、「ヤイ白大夫、春は耕し、秋は刈穂の稻を負ほせ、耕作の助けとなる牛の善悪能く知る筈、天角地眼と申せしは、角と眼の備への事、一石六斗二升とは、牛を買ひ取る其の價、升目を積る物やらん、語れ聞かん。」と仰せける。「さつてもしたり、天下に有るとあらゆる事ども、餘さず漏らさず知つてござる丞相様、牛の事は御存じなく、お尋ねに預るは、百姓に生まれた一徳、お慮外ながら、牛の講釋聽かしやりませ。一黒と申すは、俵物の石目ではござりませぬ、毛色を吟味する時は、黒いが極上、それで一黒。次に直頭とは、天窗の見所、頭とは頭、何方へも傾かず、まんろくなが能いさかいで、直頭と申します。耳小の耳は耳、小はちひさし、随分耳は小さいを好みます。叔齒違とは、きやつがおねくこれを噛む、上下の齒先揃ふは悪し、五一に生えたが齒違の齒の見所、次第を上から言ひ立つれば、一石六斗二升八合、牛の講釋もう仕舞でござりまする。」實に性は道によつて賢し、白大夫が話を聞き、一つの徳を得

たるわ。」と仰せにひよこく小踊りして、「こりやマア何たる仰せぞい、親の代から御領分の百姓、三つ子の事までお世話になされ、御恩に御恩有り難うて、寐た間も忘れぬ此の親と違うて、三人の倅ども、一人は死ぬる、跡二人は氣も揃はず、面倒な奴等打ちはふつて、此の太宰府へ參つたは、去年の三月、うそ寂しい不自由なお住居。一年の日数は立てど、月見花見にもなされず、今日は何と思召す、牛引けと有る御意が出て、私が皺も腰も、ア、延びやかな春の野面。安樂寺へお參詣は、御歸洛の御立願でござりませう。」「いやとよ、我に科なければ、佛に苦勞かけ奉り、身の上祈る心はなし。讒者の業と知召さば、罪なき事も世にあらはれ、歸洛の敕諭下るべし。夫れまでは菅丞相、月にも花にも目はふれず、私なき臣が心、帝は知召されずとも、天の照覽明らかなり。安樂寺へ志すは、此の曉不思議の靈夢、菅丞相が愛樹の梅、今如月の花盛り、都の住居思ひ寐の、枕の硯引き寄せて、筆に任せて斯く許り、東風吹かば勻ひおこせよ梅の花主なして春な忘れそと、心を述べて睡眠みしに、妙なる天童、我が枕に立たせ給ひ、汝憐愍の心深く、仁義を守る忠臣の功、心なき草木まで情を受けし主を慕ひ、花もの言はねど其の驗、安樂寺へ詣で見よと示現によつて。」と宣ふ所へ、安樂寺の住僧杖を便りに老の足、それぞと見奉りしより、小腰を屈め立ち寄れば、丞相鞍よりおりさせ給ひ、「住侶の歩行は何國へぞ、我は貴院へ行く折から、是れにて對面祝著々々。」「ハ

ア愚僧儀も外ならず、公の御目にかゝりたく、参る仔細餘の儀にあらず、夜前不思議の靈夢の告、御慈愛の梅一樹、配所の主に見せよと有る、示現に變らぬ觀音堂の左の方、一夜に生ひ出づる不思議さよ。」と、語るも聞くも正夢の、割符を合はせしごとくなり。是れより寺へは程近しと、住伴伴ひ御歩路、安樂寺に入り給へば、それぞとしるき梅花の薫、袖に留木の心地せり。暫く是れにて御詠めと、牀几直させ褥を設け、御菓子小竹筒と住寺のもてなし。白大夫はこつてこて、梅の土際覗き廻り、「こりや不思議、イヤ希代ぢや、申し丞相様途次お住寺の夢話、へ、何をやらるゝやら、そんな事が能う有らうと、誠しないこと、疑うてをりましたが、来て見てびつくり、此の木の枝ぶり花の匂ひ、佐太のお下屋敷に預つて居りました、夫れぢや、其の梅でござりまする。ア、神佛のつけは争はれぬ、俺がこゝへ来た跡では、水一杯飲まして人も有るまいに、ぶき／＼とした木の色艶、芽立の氣條つういつい、花はうさるほど付いたれば、梅漬の時分二三斗は慥かに生らう。四五升は地を借りた年貢代、お寺へも進ぜます、跡は此方の實入々々、今は先腹の實入、御馳走酒下さりましたよ。ア、これお酌、白大夫が杯は、いつでも此の天目、立酒は氣に掛る。」と、牀几の傍にちよつつくばひ、口も心も有の儘、見えた通りの律儀者、花の眺めに一入の、興を催しおはする所に、「そりや喧嘩よ、アリヤ抜いた、切り合うてそりや來るわ、寺内へ入れな、門打て。」と、いふ間あらせず踏み込み、打

ち合ひ戦ふ侍二人、寺僧は驚き白大夫、御座を圍うて、「ア、これ／＼見れば雙方旅裝束、喧嘩はふり者と有つてから、爰で仕舞は付けさせぬ、出やれ／＼。」といふをも聽かず、切り合ふ一人は我が子の梅王、「コリヤまあ其方は何として、ハア／＼ひあいな切られな。」と、氣をもみあせる親心、聲の助太刀相手の刀、梅王に打ち落され、逃けるを隙さず飛び蒐り、片手つかみに筋斗打たせ、膝にかためし健氣の舉動。「ヤレ／＼出かした、手が／＼。ヤ手柄はしたが喧嘩の次第、次には其方が下つた様子、都の事を案じてござます。幸ひ是れに丞相様、様子一々申し上げい。」ハッハア恐れながら、梅王が念願達し、變らせ給はぬ御尊體、見奉るは生涯の本望。都に御座有るお二人様、世をしのぶお身なれば、一所には置きまされず、若君様は武部源藏に預け置き、私が妻、櫻丸が女房、八重と春とは、御臺様の御介抱、お身の上は差置かれ、配所の様子見て參れと、仰せに幸ひ出船の手番ひ、天運に叶ひ日和まん、千里一跳ね日數も込まず、夜前此の地へ筑紫船。乗合の中に時平が家來、鷲塚平馬、此の梅王を見しらぬ馬鹿者。ふづくりかけて様子問へば、菅丞相を殺しに來たと、おのれが口から最後を急ぐ、寺にござるを能う知つて、直に仕かける不敵者、梅王が御土産。」と、早繩かけてぐつと縛め上げ、縁柱に猿繫ぎ、心地よくこそ見えにける。丞相御悦喜淺からず、戀しき都の様子を知らず、忠義の花は有情の梅王、示現によつて飛び來る花は、非情の此の梅の木。有情非情も隔て

なく、菅丞相を慕ひくる、梅に褒美の御言の葉、梅は飛び櫻は枯る、世のなかに何とて松の情な
 ららん。つれなかるらん松王は、時平が舍人、枯れし櫻は宮の舍人、梅王は我が舍人、花の榮えは安
 樂寺、其の名も高き飛梅の、不思議は今に隠れなし。「ヤイ梅王、有り難い今の御歌、此の歌に准へ、
 其方をお譽め遊ばし、櫻は枯る、世のなかととは、死んだ倅を御悔み、情なかるらんと有る松王めは、
 時平に追従してをろな。」ホ、親人の推量違はず、兄弟といふも穢ららしい、畜生めはさて置いて、
 さす敵は此の鷲塚、サア時平がたくみ白状せい。いやといへば刀の引導、如何ぢや〜。」と立ちか、
 る。「ア、これ聊爾有るな、主従の義を立てぬき、命にかへていはぬは古風、いはして置いて殺すも古
 風、新しう助かる様に残らず申す。時平殿は王位の望み、邪魔になる菅丞相、首取つてたち歸れ、
 軍陣の血祭して、大望の旗を上げ、天皇親王院の御所、片端仕舞うて天下を一呑み。身共も公家に成
 る樂しみ、空悦びの裏が来て、恥をさらす縛り繩、早う解いてくださりませ。」と時平が叛逆、一々残
 らず、聞召されし菅丞相、柔和の形相忽ちかはり、御背に血をそぎ、眉毛逆立ち御憤り、
 都の方を睨み付け、物狂はしく立ち給へり。白大夫恟りし、「しれて有る時平が企み、今聞いたか何ぞ
 の様に、ついで覺えぬ怖いお顔。こ、から睨ましやまして、都へはとゞきませぬ。御持病の瘡が發
 れば、エヘン悲しうござります。」と、老のぐどく物案じ。「やをれ梅王白大夫、時平の大臣が謀叛の

企て、聞き捨てられぬ御大事、赦免なければ歸洛も叶はず、王位を望む朝敵と、しろし召されぬ玉體
 危し。臣が忠義徒らに此所に朽ち果つる、骸は虚命蒙るとも、死したる後は憚りなし、靈魂帝都に立
 歸り、帝を守護し奉らん。」天に誓ひの我が願ひ、驗は目の前白梅の、氣條ほつきと折り取り給ひ、
 「朝敵一味の佞人原、退治の手始めはれ見よ。」と、枝にてちやうど打ち給へば、平馬が首は飛梅の、
 氣條も花の亂れ焼、誠の劍も及びなき、梅の名作御手の中、親子は恐る、許りなり。「ヤア汝等、かか
 る大事を聞くからは、片時も早く都に登り、時平がたくみ奏問せよ。我は見上ぐる此の高山絶頂に、
 三日三夜立行荒行、根氣を碎き梵天帝釋、閻羅王、三天王に誓ひを立て、魂魄雲居に鳴る雷、十
 六萬八千の首領となつて、眷屬引き連れ都に上り、謀叛の奴原引裂き捨てん、現世の對面是れまでな
 り、いそふれやつ。」と御聲も、共に烈しきはやち風、吹き立て、本堂の、蕩破れて庫裏方丈、薙遣
 戸は木の葉の如く、庭の立木も飛梅も、花も砂も吹きしきる。親子も住寺も大きに驚き、期も來らざ
 る御身を捨て、天帝へ祈誓有る、御本意は達するとも、御臺姫君若君の、御歎きはいか許り、留まり
 給へ。」と御袖に、とり付く梅王白大夫、弓手馬手へ反ね飛ばし、「住僧いたくなとめ給ひそ、早天帝の
 恵みによつて、形は此の儘鳴神の、ふしぎを見せん。」と散り残る、梅花を取つて口に含み、天に向つ
 て吐く梅花、渦く花瓣火焰となつて、雲居遙かに行末は、怪し恐ろし三重夢破る、門山伏が螺の貝、